SATURDAY, JANUARY 1. 1927. NO 9761

The Japanese American News

昭和二年一月一日【土曜日】第九千七百六十一號

日米

謹迎諒闇之新年

日米

諒闇の中に昭和二年を迎ふ

新天皇陛下御詔勅の聖旨を遵奉して當來に善處すべし

諒闇の中に、茲に昭和二年を迎ふ。年の改まると共に心の清新なるんことを希ひ、將來に對する覺悟を定め氣分緊張に努め、大にしては人類の進歩向上、母國の隆盛を希ひ、又、わが在米同胞の福祉のために盡瘁努力を期する常とするものであつて、今や諒闇の中に於いても、此誠を深ふせざるを得ぬ。是偏に、新天皇陛下に對する忠誠であり、先帝陛下の皇謨を遵奉する所以でもある。

昭和元年は數日にして暮れた。然も大喪の中にあつて心の安定を保し難く、匆忙として暮れた。されば、茲に年改まると共に、新しき御代を迎ふたことを痛感するものである。思ふに今年は特に心を引きしめて事に處するの覺悟を要する。斯くてこそ昭和時代に榮めらしむる事が出來る。

母國の方を眺むれば、幾多の問題がある。法律の改修、制度の更新、能率的改善、人心の刷新等山の如くである。吾が在留同胞の生活に於いても、幾多改善さるべき所のものが多い。吾等は皆緊張せる心を以てこれを考察し、善處しなければならぬ。

此時に當つて、貴重なる吾等の心の糧となるものは畏れ多い事ながら、昭和元年十二月二十八日、新天皇陛下の下し給へる詔勅である。

謹んで詔勅の聖要を拜するに、明瞭に方今の諸問題を御指摘あり、その示し給へる大道は、日本國民たるもの、その國の内外に在るを問はず常に奉體しなければならぬ所である。

歐洲大戰以來漸變しつゝあつたわが日本は最近に至つて其變化激甚となつた。外來の新思想は潮の如く押寄せて人心を刺戟した。物質的新事象と幾多の方面に變革を與へ特に經濟方面に著だしく、思想の急變と相俟つて憂ふべき階級爭鬪の萌芽を見せてゐる。又、一方に於ては自我自覺に立脚せる人士ありて鬪爭をこれ事としてゐる。新天皇陛下が、國家全體の見地に立ちて、考察せようと仰られたのは即ち以上のごときを御覽遊ばされたものと察する。而してこの御聖訓は實に母國にある國民に對してのみ下し給へるものにあらずして等しく海外に在留する同胞にもまた給へるものであることは云ふまでもなく、また我が在米邦人社會に於いてもこの聖訓を拜して、喪心より反省自戒しなければならぬ幾多の事象があるのである。即ち監々たる小野心、榮のために相反目し、爭鬪を事とするがごときは同胞全體、日本民族全體の見地に立ちたるものではない。新天皇陛下には、又、文明の進歩、背及び其に日本民族亦躍進すべきであるも、各國興隆の跡を考察して秩序を紊さざるよう心掛けよと仰せられ、更に、無用の外觀詐示より脱殼を發ひ、盲目的模倣を排して、獨創性を發揮せよと宣ひ、共通の目的に向つて國民擧つて和衷協同すると共に世界の平和に盡くせよと詔へ給ふ。

御言、御旨、恐く現代日本國民の通弊を指摘し、改善すべき諸點を示されて餘蘊なしと申すも畏き次第である。徒らに新奇を追ひ、秩序を紊すは進歩に非ずして盲目的模倣である。歐米の美風良俗を咀嚼して自家藥籠中のものとするは貴すべきも、玉石混淆、悉くこれを模倣するは、のみが精神的であつても物質的であつても嘗て紊すべきである。東洋の倫理的特質を忘却して西洋の官能的傾向を追ひ自國文化の中核を放棄して歐米に追隨するは愚劣である。

近時傳へらるゝ處によれば、母國民衆は虛飾に流れて簡素ならず、實質よりも外觀を發ひ、實力によるよりも詐大的自家誇告を、にしつゝありと云ふが、これは我在留邦人社會に於ても見られないではない。虛飾虛禮に失した生活の根底をへ搖がさんとしてゐる者のあるのは即ちその一部である其はか簡素を尊ばずして無用の外觀を詐示し、獨創を閑却して徒らに模倣をなしつゝあるの事實は枚擧に遑かない。獨創を發揮して在國に寄與すべきであるに拘らず、精神なき模倣を事として却て無價値視さるゝ所も少くない。

斯くたる事態を排して協同一致、無用の外觀よりも簡素模倣よりも獨創、共存共榮の原理に基く世界平和の達成。身海外にありて日本民族を代表する者これを體して奮勵しなければならぬ。諒闇の中に茲に外國に昭和二年の新春を迎へたる在留同胞は、此聖旨を遵奉して努力しなければならぬ。そうして初めて行き詰まれる局面を打開し得よう。これなり以て年頭の言葉に代へる。

頗るデリケイトな政局の前途

野黨の鼻息では解散か、本社東京特電 卅一日午前一時着

來春の議會の形勢はどうなるか豫測六かしく、野黨兩派の鼻息では解散まで行くかとも云ひ、また休會開け議會の劈頭に於て新正派から、御大葬濟了まで休會すべし提議すべし目下最デリケイトである

諒闇中の議會で泥試合の形勢

例の陸軍機密費問題から

憲政會側が田中大將等の陸軍機密費問題を蒸し返すさい渉し豫審終結に際して角南判事を壓迫したのこそ奇怪である。

今上陛下に於せられては赤坂御所より隔日に宮城へ赴かれ大行天皇陛下御尊骸に向ひ御禮拜遊ばされること承る

隔日に宮城へ赴せ給ひ今上陛下御禮拜

先帝御尊骸に向ひ奉りて

一千五百の人夫を使ひ晝夜兼行で

大林組が御陵墓工事を開始

監督直木倫太郎博士

清水組と大倉組で御大葬場殿工事

晝夜兼行一月中に竣工の筈

御陵墓御工事は大林組が請負二千五百名の人夫を使役晝夜兼行で工事を進めつゝあるが一月末迄には完成の筈にして工事は大林組技師長鶴巻興局長直木倫太郎工學博士が監督してゐる

御大葬場殿も二十九日より清水組と大倉組とにより日夜に兼ついで工事を進めつゝあるが一月一杯に竣成の筈

神經衰弱の角南判事

話す事も支離滅裂

松島事件豫審の主任角南氏は極度の神經衰弱に罹り目下閉山縣の夫人の實家で靜養中だが往訪の新聞記者に對し、佛へられてゐる後任者服部判事その意見衝突説などを打ち消すような口吻を洩らしたれかも思へばシイメンス事件を取調べた大原判事も神經衰弱で三月初めよられたなどと切れに物語るさい始末である。

琴平銀行取付に會ひ

遂に休業す

行員が不法の手段で東本願寺前法王大谷句佛師を援助し行金を費消したさい上地下藏通寺支店を休業せしむるに至つた琴平銀行は二十八日取つけに會ひ遂に休業した

堺利彦出獄

祝賀主義者の元老堺利彦氏は二十九日出獄した

東京土木局就業員の爭議解決

東京市土木局就業員爭議は就業に側が讓歩し解決した

御大葬日取は二月九日と決定

新宿御苑傍に臨時停車場新築

御大葬日取は多分二月九日に御決定を見るらしい御大葬會場は新宿御苑として同御苑側に臨時停車場新築の筈

淺川御陵地々鎮祭

三十一日擧行す

兩三日中に基礎工事に着手

閑院宮御檢分の結果

大葬使閑院宮載仁親王殿下が二十九日摩下八王子附近の淺川御陵地御檢分に御出張遊ばされた結果として念ふ三十一日御陵地の地鎮祭を行ひ二三日中に直樣、御陵墓の基礎工事に着手することゝなつた

葉山住民によつて葉山神社の建立

近く宮内省の許可を得だ上

近く宮内省の許可を得た上大行天皇陛下崩御の地である葉山の住民は、大正天皇陛下の尊靈を御神體とする葉山神社を建立し奉らんとしてゐるが近く宮内省に向つて此の件につき交渉を開始する筈

本社東京特電 三十日午前八時着

不信任案の提出に床次總裁は反對

政本兩黨遂に一致を缺く

三問題以外は自主獨往と

本黨有志や申合す

日英米合資の證券會社

正式に成立

本社東京特電 卅日着

日、英、米合資の證券會社、日本電氣證券會社なるものは、いよ〳〵正式に成立した。

東本願寺の破産確定

控訴期間滿了し東本願寺破産は確定した。

今村裁判所長控訴さる

三木檢事長判決に不服

三木檢事長は朴烈怪寫眞事件に關する無罪裁判に於て無罪何やら主となつてゐるので料理は感心出來ない。

×

新議會の本會議は廿八日から再開

總豫算案を同日提出せん

審査期は二月七日迄

第五十二議會は一月十五日まで休會し本會議を二十八日から再開の筈であるが豫算案はその時提出せらるべく衆議院にては二月七日までを豫算審査期とする事となつた

政治的に追求する

憲政會側が態度聲明

機密費事件不起訴でも

田中大將等を中心とする陸軍機密費問題は遂に證據不充分で不起訴となつたが、會計檢査院の記錄は例の令裁判事件に關しても調査することを計さる關係上、不起訴となるのは當然で、これによつて田中大將等に對する一般國民の疑惑が氷解した譯ではないと稱し憲政會は之れを政治的に追求するさいふてゐる

にしたが政府不信任案の提出に就いては床次本黨總裁は飽くまでも反對し此點につき政本兩黨は遂に一致を缺くに到つた

霧の倫敦から

倫敦タイムス社にて 大阪朝日特派員 伊藤七司

「日米」社のS兄から社の近ムプレーンするだけ暮だ狀についての消息があつた。編輯局は三四年の間に大部分顧問が遂つたやうだが、それでも舊知人々を三四人發見することが出來た。事務所にも工場にもきつと、澤山の舊知がゐるに違ひない。諸兄と「ヤー、ヤー」と云つて久しぶりで握手し、それから例の食堂へ行つて「日米」に食事をとり、それから夕刻支那めしへゆく。と勝手なことを想像してゐる。

×

支那めしと云へば、桑港の支那めしが我々に最も適してゐるやうに思はれる。桑港の支那めしは廣東式であるから、先日香港に立よつた時に本場の廣東料理を注文してみたが、おいしい方とは思はなかつた。日本では東京と大阪と神戸とで食べてみたことがあるが、ついぞ一度も支那料理だけは旨いと思つた北京の料理は、清朝時代には全國から、より抜きの料理人が北京に集まつたのであるから、支那第一なのださうだ。漢口では吳佩孚の客となつて一流の處で御馳走になつたことがあるが、私はみたいな貧乏性で、そして、テーストの繊細なものには、桑港支那めしの料理が一番よくお口に合ふものと思はれる。なほ巴里にも倫敦にも、立派な支那料理やがあるが、食事よりもダンスやらの方が主となつてゐるので料理は感心出來ない。

×

ロンドンは十月末から、一二月頃まで霧のシーズンである。米大陸では、桑港に霧の都として有名であるが、ロンドンの霧は桑港のそれとまるで較べものにならぬ。桑港の霧は煙を多く含まず、粒が大きい、濃度もそれほどひどくない、要するにおとぎ上品だ。ロンドンの霧はお上品とは米國製である。

米國フイルムの撮影は英國の氣候が日本のそれと同樣であつて映畫製作に適應しないからものにならぬであらうと思はれる。

冬のロンドンは天氣がよくないから、各新聞の寫眞ないしい、ロンドンタイムスは毎日45のレンズで感光度の極めて強いプレートを使用してゐる。

×

米國の對英侵入は機械具製にさゝまらない、諸君がおなじみのウールウオースは十仙店は英國大都市に到る處に支店を設けてゐる、そして繁昌することすさまじい英人もウールウオースを眞似た店を出してゐるが、ウールウオースにはとても及ばない、米人はデパートメント・ストアーでも英人をくなつてしまふさうだから、コ

ロンドンでは霧が來襲するとの消息が來ると、郊外への電車や汽車が數多く取消され、郊外からの電車や汽車は一時間又は、二時間も後れる衝突の事故も多い、市内では乘合自動車もタクシーも數時間立往生することは珍しくない。市内の交通要所に大きいかゞり火をたいたり、電車の前部にアーク燈をつけたり、交通巡査が、の纏めにテール・ライトをつけるなぎである。ロンドンから名物の霧を取去るとロンドンがなくなる。

ロンドンの霧は地上のみならず地下鐵へも侵入した。地下鐵のスペースへも密閉した室にもいつとはなく、侵入する、夜と晝との差別がなくなる。

×

英國でも、國産奮重、外國品輸入の運動が盛んである。英國及英領土の品物を、なるべく、使用するやうにこさるあるが、私みたいな貧乏人は、その實價が盛んに行はれてゐる。從つて英陸軍省めがレット安全がみそり事件や米國フイルム排斥問題等が起こつた。

しかし英國が如何に米國品を排斥しやうとしても電氣機具、自動車、自轉車、家具用品、印刷及それに附帶する機具は、米國には及ばないとの輸轉機もライノタイプ製、私の事務室の電燈スタンドも米國製、一般商店會社のタイプライターやアフ米國製である。

しかし、法律上、米國は、せめて、國際司法裁判にでも加入すべきである、米國に對する戰時債務はなるべく拂ひたくない、しかし、國際司法裁判にでも加入すべきである、米國に對する戰時債務はなるべく拂ひたくない、しかし、せめて

阿蘇山活動 盛んに灰を噴出

高森町には五分以上積む 地震も起つた

本社東京特電　三十日午前十時着

二十八日夜地震があつたが、熊本よりの電報によれば阿蘇山活動を始め盛んに火山灰を噴出し附近一帯では眼も口もあけられぬ始末であり高森町のごときは降灰五分以上積んでゐるといふ。

一鮮人が社員三名射殺

拓殖會社に闖入

本社東京特電　廿九日着

朝鮮京城より着の電報によれば二十八日午後京城拓殖會社に三十四五歳と思ふ支那服の朝鮮人闖入し拳銃を亂射して三名の事務員を斃はし五名を傷けたが、警官に追はれ逸に自殺した。

爆彈を

義烈團の一味

殖産銀行へも

みぎ決行の後三十分ばかり經て復もや三十四五歳の支那服の支那人が爆彈を殖産銀行に投じたが幸にも爆發せず死傷はなかつた、犯人は大會社銀行爆發のため武器彈藥を密輸入した義烈團の一味だといはれてゐる。

窃盗團

組織逮捕

大阪水上署警官五名が竊盜團を組織し多數の手先を使つて、盛に金品を竊取したる一味の限定で上陸した、また鳥取件發覺し、何つれも職を逐はれ大阪水上署警官に逮捕され、今回は殿下の御遊覽申上げるのが至當であるとの思ふ、自分としてはその考へで今年臨時費、十二月三十日より正金日まで後會ある毎に同胞諸君に其方針で御話してゐた次第である皇族の御通過といふことは昨年の

御警護を第一に 君臣接近の精神

但し御歡迎は遠慮申上げ 奉送は謹慎して波止場で

秩父宮御通過に就て 武富總領事は謹話す

秩父宮殿下及び從者の御一行は一月四日霞のサイベリア丸で桑港御出發のことはすでに決定のごとし、桑港御着きの時間は今日の處全然未定の問題である、臣子の心として、幾分にても何等かの形式にて、御旅情を御慰め申しあげたいといふ心の起るのは誠だ自然ではあるが、ぞう考へても卿歡迎の宴會等は御遠慮申上げるのが至當であると思ふ、自分としてはその考へで今年臨時費、十二月三十日より正金日まで後會ある毎に同胞諸君に其方針で御話してゐた次第である皇族の御通過といふことは昨年の

朝香宮殿下の御乘船

があり其前にも

あつて我々も同胞諸君も桑港では何れも次ぎ次ぎはするつもりである、獻上品の目錄を當館までくだされば、それを殿下に差上げる、しかし現品は直接郵船の支店の方へ御差しだしを願ふ、船では御うけしないはずである。

第四には地方の方々からこの際の心得を尋ねてこられる向きがあるが、自分は前に言つた通り、種々の關係上御道筋を極秘に附することにしてゐるから、沿道その他で奉迎は一切見あはせられたく通知してゐる。

第三は宮殿下への獻上品のことは殿下がおうけになるかどうかは知らないが、領事自身としては取り次ぎはするつもりである、獻上品の目錄を當館までくだされば、それを殿下に差上げる、しかし現品は直接郵船の支店の方へ御差しだしを願ふ、船では御うけしないはずである。

第四には地方の方々からこの際の心得を尋ねてこられる向きがあるが、自分は前に言つた通り、種々の關係上御道筋を極秘に附することにしてゐるから、沿道その他で奉迎は一切見あはせられたく通知してゐる。

第三は宮殿下への獻上品のことは殿下がおうけになるかどうかは知らないが、領事自身としては取り次ぎはするつもりである、獻上品の目錄を當館までくだされば、それを殿下に差上げる、しかし現品は直接郵船の支店の方へ御差しだしを願ふ、船では御うけしない

第二には地方の方々からこの際の心得を尋ねてこられる向きがあるが、自分は前に言つた通り、種々の關係上御道筋を極秘に附することにしてゐるから、沿道その他で奉迎は一切見あはせられたく通知してゐる。

第三は宮殿下への獻上品のことは殿下がおうけになるかどうかは知らないが、領事自身としては取り次ぎはするつもりである、獻上品の目錄を當館までくだされば、それを殿下に差上げる、しかし現品は直接郵船の支店の方へ御差しだしを願ふ、船では御うけしない

第二には御乘船の場合の奉送はなつて日本への御旅程を終らせられることを祈つてゐるからそのことを一般に諸君もおふくみくださるやう、自分としては希望する次第である。

日本爲替 又騰貴す

▲一月三日午後五時四十分【同】【五日沙港發ジャクソン號着】▲一月四日午後五時四十分【六日沙港發プロテシス號着】▲一月八日午後一時十分【タフト號着】▲一月六日着【一月四日沙港着アリゾナ丸積二十二日橫濱發着マッキンレー號積二十八日橫濱發】

▲一月三日午後五時四十分【同】【桑港郵便局發表】

▲一月四日午後五時四十分【同】【桑港郵便局發表】

▲一月四日午後五時四十分【同】【桑港郵便局發表】

▲一月四

東久邇宮殿下一月五日佛國御出發遊さる　米國に

一月七日沙港御出發の御豫定

アキタニヤ號で紐育に御着

本社東京特電　卅一日午前七時着

佛國御留學中の東久邇宮殿下には愈々一月五日佛國シェボルグ御出發、アキタニヤ號にて御渡米遊ばされ、鐵路シャトルに出られ二月七日同地出帆（十日出帆伊豫丸か）で横濱に御出發、御歸朝遊ばされる由、御附武官安田鐵之助少佐を同伴されること

簡易生活の模範にす　局制御廢止

新帝陛下の御英斷に依る

但し皇太后附女官は居殘

簡易生活の範を垂るべく新帝陛下の思召で、宮中の御局制度を廢止に決定、尤も從來よりの奥付の正親町典侍等の各女官は皇太后付き女官として當分居殘るらしい

先代友綱死去

東京大相撲の功勞者なる先代の友綱真太郎は逝去した。

服部判事　松島事件を結審

一万枚餘の調査を作成す

野黨側は是れを非難

松島遊廓事件審査決定書を見るに、平渡信が政友會所屬岩崎勳を通じ最初から詐欺の目的で箕浦を利用し先づ二十萬圓を引き出し、悪辣極まる平渡は萬成信托會社々長の小久保信太郎等が淀川畔に買取したる四萬五千坪の土地を持てあましてゐるに乘じ更に謀略をめぐらし次いで床次邸に於て三萬圓を中心に謎の會見を遂げたのであるが政友會所屬岩崎勳が床次氏の代理として受け取り書を出し茲に私文書偽造罪を構成してゐるとあり、又平渡と岩崎は更に憲政會の援助を得る必要ありとして箕浦に運動を依頼したるに箕浦はこれを快諾したものであるといふてゐる。

最初から詐欺目的で　箕浦を利用した

岩崎勳と平渡信が

中川大阪知事利用　床次邸で謎の會見

三萬圓を詐取した

安藤某は精神異狀

調書によれば、平渡信は、其の秘書の益田岩雄なるものと共に更に大阪府知事中川望氏の名を利用して三萬圓を詐取したることを記して居り又大東土地會社の相談役今木田治作なる者も本件に關係あり仲間を欺きて豐國土地會社より一萬五千圓を詐取したりと云ふて居る。本件の主要人物の一人なる安藤某は精神に異狀ある爲め其の鑑定を要するを以て本件より審理を分離さる

若槻首相不起訴

證據不充分の理由で

若槻首相等の保證被告事件は證據不充分の理由により不起訴になるらしい

公判は四五月頃か

俞松島事件の公判は來四五月頃になるらしいといふ

廣田公使

福岡で越年し南支方面視察

本社東京特電三十日着

和蘭公使に新任された廣田宏毅氏は福岡で越年し上海より福建や廣東方面を視察してから赴任の筈

不逞鮮人

三名重懲役

先年比律賓に於て日本人の歸途上海に立よれる田中義一大將を狙撃せんとし誤つて米國婦人を即死せしめた義烈團員に對する裁判は朝鮮大邱の地方法院で判決あり被告李鍾巖は十三年外二名は十年と八年の懲役を申渡さるる告訴代理人と角南判事

飲食を共にし問題となる

松島事件の角南豫審判事が、同事件告訴代理人と屢々料理店で酒食を共にした事實ありとて憲政會の一部は江木法相に向ひ詰問方を要求せんとしてゐる

箕浦勝人以下全部有罪

豫審終結して箕浦勝人以下全部有罪公判に附せらるる事となった

機密費事件は不起訴

證據不充分で

松島事件は廿七日豫審終結し田中大將等の機密費事件は證據不充分で檢事局では不起訴と決定したさいふ。然し新正倶樂部は機密費問題に關し質問書を提出し、議會に於て五大臣の答辯を要求した

再び米國御訪問　御希望の御言葉

御出迎の米人記者に御洩し

御流暢なる英語で

本社紐育特電　二十九日着

秩父宮殿下は紐育に御到着の際御出迎への米人記者にたいし謙て御用意遊ばされた左のごときステートメントを與へさせ給へしが御附武官は殿下の御胸中を御察し申しあり、記者連にむけ御感想なきこの際質問しまるるすことを遠慮するやうに注意した。

「余はいまや最も悲痛な事情の下に歸國を急ぎつつある途

本紙二日間

新年休刊

本紙は本日新年增大號を發行して二日三日兩日休刊し四日より再び平常通り休刊する。

御出迎

日米有力者

是よりさきクーリッヂ大統領を代表せる國務次官バトラーライト氏は政府代表の前駆日米國大使館附き參事官にして現に國務省情局長たるヒウ・ウィルソン氏、海軍代表ブルックリン鎮守府司令長官ブランケット少將、陸軍代表ドラン少將、松平大使、澤田參事官、華府大使館附陸海軍武官齊藤紐育總領事の諸氏と共に沿岸巡邏船ラリタン號にて「マデステック」號に赴き御安着を喜び奉る旨の御挨拶を申あげたが、殿下は深き悲しみを御胸底に抱かれつゝスポーツの宮樣らしい見るから御健康の御姿を現して一行をサロンに迎へられ御答禮かあらせられた。

午後四時御上陸

殿下御一行はそれより前記の日米高官とともにラリタン號に召され濃霧を冒して午後四時第五十九埠頭に御上陸遊ばされしが、同埠頭には紐育在留同胞代表者百餘名いづれも喪章をつけ謹んで奉迎し殿下御一行は直に騎馬巡査及び合衆國政府派遣探偵團衛士の下に御

御迎

ガバナース島海軍司令部からはそれと同時に二十一發の禮砲を放ち殿下に對し奉りて敬意を表するところかあつた

沖合まで

御言葉

ガバナース島海軍司令部からはそれと同時に二十一發の禮砲を放ち殿下に對し奉りて敬意を表するところかあつた

書籍

數冊獻上

ニューヨーク同胞は殿下御服喪中におわすので強ての申合はせ通り歓迎御晩餐會を廢しスポーツの宮樣にふさはしき山嶽に關する書籍數冊を獻上し御旅情を慰め奉る事にした

お殘し

再び御渡英か

荷物を

殿下は御荷物の殆ど全部をお殘しに相なつてゐるが、是より推察するに殿下には米國御經由にて御大婚が過ぎてから再び英國へ御留學遊ばさるゝやうに推察さる。

紐育の各紙

筆を揮へて殿下を御賞揚

殿下をマジエスチック號まで御出迎ひ申あげたブルックリン海軍鎮守府司令長官ブランケット少將は殿下を稀にみる聰明の御方であるとその御人爲りを賞揚し奉つたがニューヨークの各新聞紙もまた極力賞揚し奉る所があつた。

調を賜ふ

紐育で

五銀行家に

殿下はニューヨーク各地御見物の御豫定を排し二十九日午前十一時十五分米國政府差し御旅館に入られたる殿下は林男および松平大使と共に御食事を取らせ給ふて午後日本、正金、臺灣、朝鮮、住友各銀行ニューヨーク支店長に謁見賜り、早々御寢室に入らせ給ふた。

列車で

華府へ

政府特別仕立

秩父宮殿下　國祖の墓に御參詣

花環を捧げられた大戰々死者の墓にも

アーリントン墓地へ

本社華府特電　卅日午前九時着

大使官邸に一夜を過ごさせ給ひし秩父宮殿下には三十日午前大使官邸御出發遊ばされて直にアーリントン墓地に於る歐洲大戰出征米國戰死軍人の墓に御參詣ありて勇士の靈に花環を手向け給ひ引きつゞき郊外マウント、バーノンにおける米國々祖ワシントンの墓にも御參詣花環を捧げられた

殿下三十日午後　大統領と御會見

白堊館において非公式に

アーリントン及びマウント、バーノンより大使官邸に御歸の後殿下は御小憩の後同午後ホワイト、ハウスにク

諒闇の新年を迎へ　門松を廢して謹慎

だが昭和の新年に對する人々の希望は輝いてゐる

新年を日本人町

「松の内」例年なら今日から向ふ一週間は上町邦人街は新年のお芽出度で各戸毎に緑の松ら飾り、その香を漂はしてお正月氣分に浸るのだが今年は諒闇の新年とて しかも去だ多くの人は喪に喪の黒布をさふさとてゐるこの朝は十時修正會を勤め年頭の禮拜を行ふことゝなつてゐる。

百八ツの除夜の鐘

佛教會で

卅一日の晩

除夜の鐘がつゴーンと響けば、もう蜜を送つて新年の元旦である。佛教會は例年に倣ひ三十一日の午後十二時を相圖に百八の煩鐘をつて除夜法會を厳修したが元日の朝は十時修正會を勤め年頭の禮拜を行ふことゝなつてゐる。

常磐丸　洋上で失火

日本歸航の途

日本郵船會社の新造貨物船常磐丸（六九七一噸）はシアトルより日本に向け航海中二十九日北太平洋にて失火し貨物に火が燃え

初興行

笑樂團曾我の家立花家

諒闇中に付き年始缺禮

安孫子久太郎

諒闇中に付き年賀の禮を缺き申候

常光律事務所

雜煮會

サター街　青年會で

本紙新年號目錄

三十二ページ

ケロッグ國務卿　停車場迄御出迎

直に大使官邸へ成らせらる

二十九日午後三時ワシントンに御到着遊ばされた秩父宮殿下は停車場にケロッグ國務卿の御出迎ひを受けさせられて御挨拶を代るがるに直に大使官邸へ成らせられた

ボルチモーアで　秩父宮と大統領

の御乘車が擦れ違ひとなり

互に車窓から御挨拶御交換

ボルチモア　卅日發特電

秩父宮殿下を乘せ奉つた特別仕立ての列車は二十九日午後二時ボルチモアにてユウジアシー州トレントンにおける演説に赴むくクーリッヂ大統領を乘せた特別列車と擦れ違ひたが殿下と大統領とは互に窓から御挨拶の御交換があつた。

相馬茶店　234 E. 1st St., Los Angeles Cal. Tel. Vandike 7847 Tucker 799

財滿商會　電話ウエスト九三九一

寒い！寒い！石炭をご買ひ下さい　配達迅速、御用命は電話で　ダイヤモンド石炭商會　電話ウエスト五四六五　デビサデロ街一八二三

御茶　特許品　カステラ　祝餅並に赤飯　花月堂　文化洋菓子　各種　桑港ポスト街一七三二　電話ウエスト六八三一

貸家　九室五十弗、八室五十弗、室四十弗、七室四十七弗半、五室四十弗、其他店舗及フラット澤山あり御望みの方は直接桑港オフアレル街一四〇八　三上理事務所　電話フ井ルモア八二八六

産科婦人科　皮膚　泌尿器病　産婦人科醫院　村上　桑港ポスト街一七六三　電話ウオナップ二一八五　加州、華州公認ドクトル　村上憲佑

御料理　萬　日本食　桑港グラント街五四六　電話ドグラス五三三六

すき燒　桑港パイン街五五七　デベンポート五八三八　あづま家

すき燒　桑港ブキャナン街一七〇九　電話ウエスト一六六二　元祖博多屋

港すし　電話ウエスト四六六三

お多福　料理　東洋ポスト街一五四五　電話フ井ルモア一九〇三

新渡米　關西娘　笑樂團　萬歳一座　◇正月一、二日　金門學園ホールに於て開演仕る筈の處會場の都合上スカットライトテンプル館に變更　【サター街パンネス街角】　主催　ポ市北米興行社

曾我廼家　喜劇大一座　初日　二日目　喜劇　越後獅子　二場　所作事　保名狂亂　千代子所作事　將門　立花家　濱子　（忍ぶ夜孝事寄）　社會劇　節分の夜　三場　社會劇　無言悔悟　三場　所作事　鶴亀　立花家所作事　戻り籠　立花家　當る一月五、六日午後正七時金門學園ホールに於て開演　主催　桑港興行會社

ラリッチ大統領夫婦を非公式に御訪問遊ばされたが尚殿下御一行は三十日夜ワシントン出發桑港へと向はせ給ふ筈である

秩父宮殿下　國祖の墓に御參詣

花環を捧げられた大戰々死者の墓にも

アーリントン墓地へ

本社華府特電　卅日午前九時着

大使官邸に一夜を過ごさせ給ひし秩父宮殿下には三十日午前大使官邸御出發遊ばされて直にアーリントン墓地に於る歐洲大戰出征米國戰死軍人の墓に御參詣ありて勇士の靈に花環を手向け給ひ引きつゞき郊外マウント、バーノンにおける米國々祖ワシントンの墓にも御參詣花環を捧げられた

初興行

笑樂團曾我の家立花家

諒闇中に付き年始缺禮

安孫子久太郎

諒闇中に付き年賀の禮を缺き申候

常光律事務所

雜煮會

サター街　青年會で

本紙新年號目錄

三十二ページ

殿下三十日午後　大統領と御會見

白堊館において非公式に

アーリントン及びマウント、バーノンより大使官邸に御歸の後殿下は御小憩の後同午後ホワイト、ハウスにク

新春の大安賣り

暖かで丈夫で柄のよい中川のフランネルを御用ひ遊ばせ

各種ネル一割引

男女アンダウエヤー破格——百パーセント　ウール、ミクス　カトン

綿各種一割五分引き

純オバシヤツ二割より二割引

毛布、子供洋服、オーバーコート、トランク、スーツケース、スエタ類は持荷澤山

特に一月二日の日曜日は客樣の御便宜上終日營業致します、何卒御用命の程願ひ上げます

日曜日も無休

中川商品館　ブキャナン街一七〇一　電話ウエスト九一九四

初春活動寫眞

新派　金色夜叉　ぜひ共見て下さい

▲一月一日、二日　オークランド

▲一月三日　マウンテンビュー

▲一月四日、五日　コンコード

▲一月六日　ローダイ

各一晩づゝ興行致します御引立を御願致します

桃中軒浪右工門

當用日記年鑑暦類

大正十六年版

大形上製　一、四〇
大形背革　一、八〇
中形總革　二、三〇
中形背革　一、三〇
中形上製　一、〇〇
中形運氣　一、〇〇
中形御家寶　一、〇〇
中形重寶　一、〇〇
小形上製　八〇
小形御重寶　一、〇〇
家庭日記上製　一、〇〇
家庭當用日記　一、〇〇
英文當用日記　一、〇〇
英文懷中日記上製　八五
懷中日記上製　四〇
ポケット日記　二八
同並製
同日本製
同十五仙
同十八仙
同十八仙
同十五仙
同一打十仙
同十五仙
同廿五仙
時事年鑑　二、五〇
國民年鑑　一、七〇
毎日報知年鑑　一、〇〇
練習かるた一組　一、〇〇
標準かるた一組　一、〇〇
新年繪葉書一打　十仙
クリスマス繪はがき　同一打十仙
同十五仙
同廿五仙

株式會社　よろづ商店　1300-4th St., Sacramento, California

シンガー裁縫ミシン　ラヂオ、ピアノ　太田商會

ヴィクター蓄音器—日米レコード

電話ウオーナップ八九八　1715 Buchanan St., S. F. Calif.

◎シンガーミシン並に蓄音機新古澤山あります

◎日本行は運賃税金共不用、荷造堅固、保險附

みさま

桑港ポスト街一八六一　電フ井ルモア四七豊一

小幡女子裁縫學校

OBATA SEWING SCHOOL, 1310 Post St., S. F. Calif.

北米合衆國政府版權著作權所有（第八期）生徒募集

小幡式婦人裁ち方　女兒服男兒縫ひ方　通信教授部

直接當校にて學ばれた方々と同樣に充分なる技能を得るここが出來ます、御一報次第規則書進呈

深く研究なされた方には小幡式「カッティング」を勧め致します

北米サンフランシスコ　（入學除料）　材料供給

各國活動寫眞フィルム　新派、舊劇衣裳及附屬品一切貸賃仕候

桑港興行會社　須市朝日座直營　桑港グリー街一五〇五電話ウエスト八七六八

諒闇中に付き
年始の禮を缺く

高等御食事所
常盤園
杉山米吉
ポスト街一七六七

謹迎新春

ポスト街一六六一
高等御食事
福廣
廣嶋歌子
電話ウエスト五八三八

諒闇中に付年賀缺禮
サリナスの部

渡邊連平　平林三太郎
竹下政幹　尾鼻林之助
佐藤仙太郎　伊藤茂承
古賀謙藏　丹田種吉
田住隆助　乘田惠七
卜部宇助　太田福藏
宮本助市　豐島淺吉
菅原秋實　松宗京次郎
瀧澤喜六　中通次郎作
岩重治吉　福田龜一
大庭留吉　在日本 山本重吉
遠藤喜太郎
福森畩照　日米サリナス支社 下司竹次郎
谷居菅夫
風岡勝太郎　モントレー 矢半田貞三

スリフトグラーヂ
長野久吉
小林與太郎
高田伊助

山本兄弟農園
山本又槌
同平
同種一

遠林樓

鬼塚商店
鬼塚留藏

立花
酒井善十郎

山下商店
山下喜平
筧本勇
筧本常吉
電話一三九

藤野旅館
藤野商店
藤野美角

謹で諒闇之新春を迎ふ

資本金　壹億圓（全額拂込濟）
積立金及繰越金　九千五百五十萬圓（大正十五年九月現在）
預金總額　五億四千萬圓

横濱正金銀行

桑港サンソム街四一五—四二九
桑港支店（明治十九年六月創立）
（電話）カーネー街三九六

羅府メーン街百番地
羅府分店（大正十二年二月創立）
（電話）ブロードウエー六一四四、六一四五

爲替騰貴に伴ひ弗貨預金增加の趨勢を助長する爲め今般利率引上を斷行仕候
米弗貨定期預金利率（一ヶ年四分五厘 / 六ヶ月四分）
但し期限前支拂の場合にも相當利息差上候

諒闇中に付き
年始の禮を缺く

桑港ゲリー街一五〇五　電話ウエスト八七六八

一月元旦

桑港興り食社

社長　奥定吉
支配人　中村源一郎
外社員一同

迎春の言葉

舟郎

新春を迎ふる人の心は潮合に眞劍なものだ。平素自省の心を持たぬ人も、此日は何かしら己れを云ふものを考へずにはゐられないからである。

◎己れを省みて己の小なることのみ思ふ人がある。いはゆる敬虔な人、いはゆる純眞な人に、それが多いやうである。然し人間を云ふものが果して是等の人々が口にし筆にするやうに己れの弱點や缺點ばかり見るものであらうか

◎ひゝき目に見てさへ褒きそ十二年巳卯の人、二十七の人事の厳父である、安政二年乙卯の慶應三年の丁卯の人四十九の明治人も知るごとく、武富楽港總領

春

私は他力本願の尊さを充分に認めるが、宿命觀的他力に生やうとは思はぬ。『あゝまよ生しも鶴の百分の一』是も一茶の句だが、私にはさうまで投げやりな心にはなり得ない。◎大雅久不作　吾衰竟誰陳

李太白の此豪快なる自負心を見ては己れの小なるを想ふやり切れてあるけれども、而も、『我立たずむば』の氣魄が年木阿彌彦六氏、新時代社主村井共に驚へたとは決して信ぜぬ。私はあくまでも大地を踏しめて堅實して行かうと思ふ。かくしてこそ來らんとする一年を迎ふる意義があるのではないだからうか。

卯年生れの名士

日本と在米同胞

政治家軍人學者文士等

浪人及び金滿家

卯年生れの人は今年七十三の女次は政二年の乙卯の人、六十一の慶應三年の丁卯の人四十九の明治人も知るごとく、武富楽港總領

武富時敏氏

がある。

頭山滿翁の

七十三が

芳賀矢一博

士が六十一の卯年生れ、帝大文科の大御所で著書は積んで等身以上に及ぶ。

岩崎小彌太

男がある。四十九の卯年生れ、三菱王國の大立物であることは説明を要しまい、七十三の組に

大石正巳人

道がある。

鈴木貫太郎

大將がある、わが海軍の官際海軍戰術の權威で、世界の海軍國英佛に一目を置かれてゐる。

伯爵吉井勇

氏の父君は、明治十二年生れの四十九であり、

河上肇博士

は明治十二年生れの四十九であり、

賴母木桂吉

氏は、六十一の卯年生れ、嘗て米國に遊び、

東ケ崎菊松

翁が享年七十三で帝大の法醫學者で、日本の法醫學者として日本のチャキ〳〵の研究學者として

在米同胞方面

大石國嘉博

士があるの七十三で帝大の法醫學者で、日本の法醫學者として日本のチャキ〳〵の研究學者として

山口義博

士が

文士方面

卯年生れの文士を探してゐると中々多い、まあ一般に知られた遠から簡單に御紹介に為ぶと、先づ筆頭は十二年生まれの

正宗白鳥

さんだ一昨年あたりから歳曲方面にも腕の奇の春」と矢繼早の傑作、さうだ若い者！云ひたさうな格好白鳥さんも然し五十に手がさゞくやうになつたとは…

永井荷風

氏も十二年だ近來は世間のフランス物語り、アメリカ語りの夢も棄てゝ銀座カフエーゝタイガーの女給に御贔屓の噂、棄て難い近代歓樂の中に老を忘るゝとは芽出たい、二十四年生れは

久米正雄

近來鎌倉でマ久米正雄の戀敵で勝利者法城を守る人々出しまゝ、富を つんでゐる、蓋し女

細田源吉

此人もジフトの人、動かぬ筈だ、

倉田百三

氏、學生、看護婦文學青年に病氣を賣物にして人気を博し、大邸宅をか

松岡讓氏

久米正雄の戀敵で勝利者法城を守る人々出し

廣津和郎

氏出版業ニ云ふ大望を起した お陸は、試者小説の柳浪さんも氣の毒な話、この人賭事に來たら眠かない

自己反省之感

可楽都　麻坪古巴

人生五十極轉倒
三季既去及終冬
艱難成性氣冷靜
立眺雪嶺夕陽暖

文士は思はれぬ豪傑振

宇野浩一

やつぱり菊富士ホテルの執筆所の布團の中で

前田寅寛郎

氏は、こ

前田寅寛郎

氏は、

武富時敏氏

岩崎小彌太

芳賀矢一博

頭山滿翁

大石正巳人

鈴木貫太郎

伯爵吉井勇

河上肇博士

賴母木桂吉

東ケ崎菊松

在米同胞方面

大石國嘉博

山口義博

文士方面

宇野浩一

前田寅寛郎

正宗白鳥

永井荷風

久米正雄

細田源吉

倉田百三

松岡讓氏

廣津和郎

自己反省之感

人生五十極轉倒
三季既去及終冬
艱難成性氣冷靜
立眺雪嶺夕陽暖

幕末俠客傳

神田伯山演

八一　小次郎召捕り

小『さうも旦那、ごぶさたを御用御用々々』あつちからも

ヤッさいふぶ、向かふへ投げた

諒闇中に付年始の禮を缺き申候

一月一日

一安博孝
宿澤美代藏
天野市助
秀島七三郎
前田英雄
佐藤兼藏
渡邊金之助

HOLLISTER SEED COMPANY
P. O. BOX 715 HOLLISTER, CALIF.
●特撰最上のレタス種子
ニューヨークスペシアル
●アニオン新種子各種
●ピー種子
代價表は無代進呈
ホリスター種子グロア卸小賣
山中丈吉主
當國の種子耕作經驗
價か　二十三年間

Dr. LAU YIT-CHO
502 Grant Ave., S. F.
Phone China 224
梅毒、痳病專門全治保證
男女内外科、皮膚血毒
神經慢性滯經産婦
劉日初
診察時間 平日 自午前十時至午後七時 日曜日 自午前十時正午十二時
桑港グラント街五〇二　電話チャイナ二二四

日米寫眞師會　毎月第四月曜日休業
雨宮寫眞館　電話ウエスト三三二七　サッター街一六二七
房木寫眞館　電話ウエスト六五五六　フサルモア街一七四七
原田寫眞館　電話フサルモア二三〇〇　サター街一七九七
森山寫眞館　電話オルナッタ五一四三　フサルモア街一七一二

竹の家　電話ダグラス八四八　サッター街一六二七
うづ巻　桑港グラント街五一〇　電話ウオナッタ四二二九
みどり　桑港グラント街一六八八　電話デベンポート七六八三
うすゝみ　電話ヴエスト六四二五　ポスト街一七六七　御食事
常盤園　電話フサルモア三八二三　ブキヤナン街一七二八
菊川亭　電話オルナッタ一二四八　ブキヤナン街一七二八
御料理　グリー街一六一〇
芹野治療院　桑港グリー街一八〇二　電話ウエスト三八九二

グッド城岩　公認調劑　郵送無料
新日米常備藥品
ナイス…一弗　宇津救命丸…一弗
中將湯…一弗　小兒奇應丸…一弗
命の母…一弗　胎毒下し…一弗
六神丸…二弗　人參エキス…二弗
活力素…二弗　理究ヴイタミン二弗
胃腸藥　ソリゼイダ　府庁で評判のよいベーク博士の胃腸藥を御試しあれ、如何なる急性慢性の胃腸病にも効く効く、當店唯一の「自慢藥」定價一弗五十仙、四弗
安全イージー月さらへ　五弗　九弗
米國婦人界に於て絶大な賞讃歓迎を博しつゝあるケーレー博士の流經專門藥は「月經閉止三四ケ月以内迄は確實なる偉効を奏し最も容易く安全に應用の目的を達し…且身體には少しの障害をも及す事なく頗る滿足を與ふ」
鎮痛藥　セーフテーブースト　二弗　五弗
体温に依り一二分間に解け錠ての毒菌、生膿を殘らず撲滅す但し爽快にして安全無害其他日米ゴム製品サッタ類一切取揃へあり註文次第個人名義にて密送する（郵送料不要）
●治絲藥　ゴノキール　價五弗　九弗
洗膿法を要せずして急性、慢性淋疾を迅速に平癒し而も再發せざる故ハヲキン博士は皆
●浮血　ピューリン　ハヲキン博士　價五弗　弗
梅毒、痳毒、ニキビ吹き出もの等は六百六錠注射を要せず體内の毒氣を取得る家庭治療劑
加州縣府東第一街一〇一（Tel. VA 9110）
THE IWAKI DRUG CO.
201 E. First St., L. A., Calif.

日本ドラッグ
ニップ胃腸藥　五〇錠入　七十五仙　一〇〇錠入　壹弗廿五仙
蛋白、脂肪、肉類等に驚くべき消化を象ねたる最強力澱粉質消化劑にて効藥——配合禁忌副作用無無
安全月さらへ　最新發明　宗野醫學博士特製
月經止りの心配が三日以内に安心請足最新醫學博士の秘方目下日本にて一般好評ある流經劑
實驗上八十パーセント迄石効
第一號一二ケ月止りに使用の分五弗
第二號三四ケ月に使用の分　金十弗
浄血新藥　代價五弗
ニキビ、吹出者、梅毒、痳毒、凡て六百六號の注射を要せず體内の毒氣を安全に除去する家庭治療藥
NIPPON DRUG CO.
2690 Post St. S. F. Calif. Tel. West 185

日本人に親切な公證人
J. DAGGETT
事務所住所　Douglas 40.
40 Montgomery St., S. F.
あんま術　眼科耳鼻科婦人科外科
桑港グリー街一五二四　電話ウエスト四一七四

大阪藥店　公認調劑　郵送無料
●有効驗實通經丸　塗製五弗　強服十弗
色々の藥を用ひ効果無くて困りの方は早く此の安全通經丸を試し下さい
●機能發育器　八弗　十弗　十四弗　十八弗
機能強壮治療唯一の驚嘆器
●ヨヒンビン五、〇〇〇　●活力素二、〇〇〇
●トツカビン五、〇〇〇　●滋榮丸一、〇〇〇
●セービン五、〇〇〇　●強精錠五、〇〇〇
●スペルミチン二、五〇〇　●強精丸一、〇〇〇
●カルクス一、五〇〇　●人參命丸三、五〇〇
●パーワー錠五、〇〇〇　●人參精丸三、〇〇〇
●治痳藥　ゴノタール　名博士發見五弗
膀胱を内服すれば外用塗を用ふる手數なく然かも治痳の目的を達する最新藥なり
●千宮座藥殺菌座藥　三十回分二弗　九十回分五弗
身體に何等の害なくして効かもれ有効に目的を達する最新藥なり
郵送ポスト街一五九四　電ウエスト三四七四
OSAKA DRUG CO.
1594 Post St., S. F. Calif.

昨年中の御愛顧を謝し
併せて日本人諸君と共に
謹んで大喪の新年を
迎へます
創立十五ケ年
ダブリューテー　ガードナー商會
フサルモア街一四〇五（エリス街近く）
（メンス　ファーニッシング店）
W. T. GARDNER CO.
Men's Furnishing Goods of Quality
1405 Fillmore St.,　Near Ellis

葬儀社
マーテン・エンド・ブラウン
桑港スカット街一五一五（ゲリー街とポスト街間）
1515 SCOTT ST., SAN FRANCISCO.
TELEPHONE WEST 10

謹で諒闇の新年を迎ふ

桑港　日米新聞社

本社員（ABC順）

安孫子久太郎　西田一雄
安孫子康作　名倉弘
青柳國弘　長田政雄
淺野七之助　小笠原謙三
エフ・ダブリュ・クレンチ
福田順一　大野誠一
藤田稔　大野乙吉
府玻かめい　大野禎一
原信太郎　佐々木戒三
東榮藏　佐々木勇平
日敷彦太郎　清由藏
堀川昇次郎　清光慶
一丸嘉久藏　島崎政太郎
水野房吉　清水幸助
石毛忠男　四至本八郎
石津實藏　田原ひで
菊池參平　武井武富
木村正友　寺田和助
松井周次　寺田照義
水野鎌之助　富田清萬
壬生三樹衛　土田典雄
宮木貞次　豊田季雄
村田壽雄　渡邊哲四郎
森下とめ　脇水五郎
中川卓　柳渡
中野房吉　安河内富子
西方長平　吉田宣光

フレスノ籠球大會戰

（廿一日）

二日佛教會コートで

加州大學日本人學生籠球軍は二勝一敗を轉換して負傷したフレスノ日(日曜)午後一時半より布市佛教會コートにおいて布佛青年軍と會戦の筈だが廿八日パークレーで行はれた兩軍會戦には二十四對二十三のグロースゲームでも佛青軍が惜敗してゐるので今回はその雪辱戦でもあるから定めし緊張した激戦であらうと

●熊海總會　來る三日(月曜)午後二時デルレー、ホールにて熊本海外協會布部支部の總會を開き種々重要事項協議のほか新役員選擧を行ふにつき會員は洩れなく出席ありたいと

●組合の割引　今回加州日本人青年商組合の決議により市内各書店とも五弗以下の書籍雑誌購入に一割、五弗以上は一割五分の割引をなすことになつたと

●來布　南加大學生早野三重喜伊達清之助兩君冬期休業にて來布中▲王府尾崎善藏氏夫人親戚河西氏方に滞在中

●在留證明　徴兵延期に要する在留證明は廿日まで取扱ひのものに二百二十五番まで布市日本人會に下附されてゐると

●渡米　支那街中村善平氏の長男善雄君サイベリア號にて渡米し父家に入つたと

●出生　サンガー廣島縣人畑保人氏長女昭枝廿七日安平産院で▲バイセリア廣島縣人山下新一氏二男和夫廿八日三浦産院にて

延十郎一座の名殘興行

一月十日十一日兩夜中加の好劇連をいたく滿足せしめ兩夜とも札止めの大入りを占めた延十郎一座が歸國前のお名殘として一月十日(月)十一日(火)の兩夜日本ホールで左のプログラムで今一度のお目見をするよし

初日　諸式三番叟—引幕切
初春夜の玉うさぎ大暗闇り
忠兵衛　封印切り
二日　一番目本藏下屋敷
▲二番目　延治三番目神崎東下り▲大切京人形

されもこれも上々の出し物特に梅思、紙治は聞に西役者の得意のもの延十郎の名手がさうゝ之を演じ出すか艶治郎につゞく妙技が見る人達の譯でもあらうまた延見子の京人形も好劇家の渇を癒すに十二分でがなかあらう

ミカドホテルで瓦斯往生

廣島縣人坪井植枕を並べて廿七日午後八時過ぎ市内フラレ街に眞宅嘉一郎氏が經營するカド、ホテルで印度人三名が枕を並べて死んでゐたのを主人が發見しその筋に引渡したが調べ日曜學校父兄より同地佛女再へ

▲マデラ附近で衝突のため自

日曜樂會

美以教會(三月二日)午前十時五郎氏は オークグローブに近々日曜學校十一時禮拜説教『聖書和の新年』教會の使命』町田牧師午後二時エポス同盟

サンノゼ（三月廿日）

●孝國教師に贈物　ギシロード教師のオーチヤードスクールに通學の子供達の父兄から教師に贈物をなしたりと、なほ贈り物は清水亀次郎氏父兄を代表して校に届けしよし

●學園の父兄會　アグニューの父兄會を開催したが父兄會を開催し公學校の教師にクリスマスの贈物をなしたりと、なほ贈り物は清水亀次郎氏父兄を代表して校に届けしよし

●除夜祈禱會　日本人基督教會においては三十一日午後八時より例年のごとく除夜祈禱會を催し一般の出席を歓迎すと

●出生　市内遠藤喜太郎氏方には去る二十五日男兒分娩産後の名母子ともに健全なりと

ワツソンビル（廿日）

總領事館よりの注意

去る十二月二十五、六、七、八、九、十、十一、十二の八日間は御崩御に同時に今上天皇御即位あらせられ同日「十二月二十一日」より明和元年と御年號を定められたるにつき風日以後官庁向一切の届書や願書等の年號は明和元年と記載なすやう當地日本人會に通知ありたいよし

●借地希望者　日本人會幹事コロリタスその他各方面より肥沃の土地を借りたき白人地主多數あるよしなれば希望者は大至急日本人會元木幹事まで申込まれたしと

●青年會理事會　葉村青年會理事は明和二年一月七日金曜日午後七時半より大和ホールにおいて開催なす由なれば理事諸氏は出席せられたしと

●日米年鑑について　千九百二十七年度の日米年鑑が立派に出來上がりましたので本社の方から購讀者諸氏のところへ配布されてゐると思ひますが萬一不着の方や内容ページの脱落變更および印刷製本の不充分なる物がありましたら當支社まで御申込下さいお知かへして差かへ致します。なほ購讀以外の方でも御入用の方には一部一弗五十仙でお分けしてあげます

サンオン（三月日）

●特別寄附　日曜長山中丈吉氏は本都日本人會へ金二十弗を特別寄附いたされた

●役員改選　本都日本人會においては明和二年度役員の投票を行ひ日本人會事務所において

山中丈吉氏、山本福次郎氏、大久保氏、岩室氏、西量平氏、兒玉新太郎氏、岩室久一氏の開票委員立會の開票の結果會長若山孫次郎氏二十一點、次點山中丈吉氏十九點、次點大西量平氏七點、評議員は第一區大下九市氏、岩室吉藏氏、佳田福一氏、田島隆之氏、乙黒波太郎氏、山中丈吉氏、大久保氏、小畑寅一氏、乃美臨造氏、酒井繁美氏、第二區小畑瀧藏氏、兒玉新太郎氏、加谷常助氏、本戸市氏、第三區佐々木戸久二氏、小林幸太郎氏、榮一郎氏、第四區小池田新一氏、數田秀夫氏、增本秀吉氏、第五區倉本豊吉氏、佳田福一氏、田島英之助氏

●徴兵延期願書を受取れる本都日本人會においては明年度役員に當選いたされたる丸山、猪山兩氏および中村、田舞太郎氏

●農家の移動　西氏農園にありたる丸山、猪山兩氏および中村、田舞太郎氏の梅本則隆氏等留謙明手續いたせし中で左記段奉願謝候一々拝趨の上御禮可申上筈に候へども不取敢以紙上御禮申述候

昭和元年十二月廿八日
中加セルマ市
森井富士楠

私儀今回不慮の出來事に遭遇致し候際は皆々樣の御高配を蒙り厚く御禮申上候

敬具

御禮廣告

故善之進儀遠路態々御會葬被下且つ多分の香奠寶は拝趨御禮可申述筈處午略儀以紙上御禮申上候

十二月廿日　サンノゼ
妻土井岡セイ
菊子
長女
長男
次男
三男
次女
親戚　森
友人　田尻嘉助
西土良助
林孫助
辨慶助
山夫武人
中村雄一郎
植田武雄
高橋政一
大地知一郎
中村坂藏
外長宇
同

御禮廣告

故勇夫儀葬儀の際は長男拘はらず遠路態々御會葬被下且つ多分の香奠料等一切ご辞退致し難く有難く御會葬の上御禮申上候

父　有田正助
母　正よ
次男　光之助
次女　吉木民之助
友人　小川浦三郎
神山浦三郎
花山口捨藏
芹沢安次郎
神野安次郎
大野政次郎
山口太郎
猛野平藏
昭和元年
サンガー町
サンガー青年會

御禮廣告

故善之進儀葬儀の際は遠路態々御會葬被下且つ多分の香奠寶は拝趨御禮可申述筈處午略儀以紙上御禮申上候

十二月廿日　サンノゼ
妻土井岡セイ
菊子
長女
長男
次男
三男
次女
親戚　森
友人　田尻嘉助
西土良助
林孫助
辨慶助
山夫武人
中村雄一郎
植田武雄
高橋政一
大地知一郎
中村坂藏
外長宇
同

定期總會廣告

本會は來る昭和二年一月廿日午後正一時よりフレスノ市本會事務所にて定期總會を開催致度候條會員諸賢奮って御出席被下度此段廣告致候也

昭和元年十二月廿八日
岡山縣人會
會員諸賢各位

定期總會廣告

昭和二年度定期總會を來る一月六日(木曜日)午後二時より布市佛教會講堂にて開く此段廣告候也

昭和元年十二月廿七日
フレスノ日本人會

米國各地邦人樂店にあり
婦人良薬　喜谷實母散
本舗　東京京橋区銀座町
喜谷市郎右衛門
電話京橋五五五番　五六番
▲全國到る處に販賣す
血の道　産後　冷込等に特効有

レント安
トランク
スーツケース
旅行用鞄

値段安し
TAYLOR'S TRUNK FACTORY
2110 ALLSTON WAY
BERKELEY, CALIF.

村華
自動車使用諸事葬儀取扱
パーランド葬儀社
イーストレーキ街三番
電話六三三三
Burland Undertaking

NEW YORK LETTUCE SEED CO.
SEEDS FARM
Cienega District
Hollister, Calif.
SALES OFFICE
P. O. Box G, Tel. 1068
Watsonville, Calif.
特選種子
當商會は專屬の種物園にて製産のニューヨーク、レタス種子のみを安價に分配致します
ニユーヨーク　レタス
種物商會

土地周旋
瓜、西瓜、縞、ポテト、アニオン、レタス、スピニチ耕作に適する地及び葡萄園、現金借地何れにてもあります
中加デラノ町
鈴木旅館
周旋主任
味園英之助
（郵函一四八）

御禮廣告
故勇夫儀葬儀の際は拘はらず遠路態々御會葬被下且つ多分の香奠料等一切ご辞退致し難く有難く御會葬の上御禮申上候
父　有田正助
母　正よ
次男　光之助
次女　吉木民之助
友人　小川浦三郎
神山浦三郎
花山口捨藏
芹沢安次郎
神野安次郎
大野政次郎
山口太郎
猛野平藏
昭和元年
サンガー町
サンガー青年會

御禮廣告
故善之進儀葬儀の際は遠路態々御會葬被下且つ多分の香奠寶は拝趨御禮可申述筈處午略儀以紙上御禮申上候
十二月廿日　サンノゼ
妻土井岡セイ
菊子
長女
長男
次男
三男
次女
親戚　森
友人　田尻嘉助
西土良助
林孫助
辨慶助
山夫武人
中村雄一郎
植田武雄
高橋政一
大地知一郎
中村坂藏
外長宇
同

御禮廣告
故善之進儀葬儀の際は遠路態々御會葬被下且つ多分の香奠寶は拝趨御禮可申述筈處午略儀以紙上御禮申上候
十二月廿日　サンノゼ
妻土井岡セイ
菊子
長女
長男
次男
三男
次女
親戚　森
友人　田尻嘉助
西土良助
林孫助
辨慶助
山夫武人
中村雄一郎
植田武雄
高橋政一
大地知一郎
中村坂藏
外長宇
同

《サンノゼ欄》
神經系科、電氣科療法及マッサージ科、うちみ、くちき
次郎田　自然科學療院
加州華村市　電話六〇五W

《サンノゼ欄》
北米大街四〇六
電話四三〇〇W
佐市支社

《サンノゼ欄》
電話
サンノゼ七三〇〇
ドクター・ビーティー
電話
盥漱用鑑管、水道鑑管
其他一切の新古道具類
レビーン道具店

《オークランド欄》
布市イー街三〇六電話三七五〇W
加州公認
谷田部保
ウエスタン・ホテル内

《オークランド欄》
布市公認歯科醫
布市フラレ街一四三一
江田産院
自動車設備あり公認江田スズノ
三浦産院

《オークランド欄》
王府支社
王府フランクリン街八二八
電話レーキサイド七三四一
住宅レーキサイド三四三五

《フレズノ欄》
布市ヒ街一四〇二
フレスノ　赤色木病院
電話　住宅　六九八一　六八五四

《フレズノ欄》
布市エフ街九四九
電話三九四二J
中原歯科醫院
中原久一
産婦人科專門
御親戚御法事用
電話一五七〇
堀産院

《フレズノ欄》
布市カーン街一四三〇
電話三〇九一R
林病院
電話八七五二
布市イー街九豊宜
林病院

オケ・グラージ
布市カーン街一四〇二
電話貳二豊二
井上山本
湖月堂
布市エフ街九二〇電七〇一W
安平産院
布市B街八一一電話七〇四〇J
公認
フレスノ　赤色木病院
電話　住宅　六九八一　六八五四
石川商店
布市北五街五八〇
電話三二一一W
岩崎洋服店
注文服專門
佐市ジャクソン街六二一
山口屋
北六街六二八八
電話四二七J
常盤旅館
北六街六二七
電話七二九八
南海屋
北五街六〇六
電話二九八〇〇W
山本旅館
北五街五九五
電話八六二J
大平館
ジャクソン二四三
電話三〇一J
佐市旅館業者
ジャクソン二四三
電話サンノゼ七三一四
サンノゼ産院
サンノゼ北六街五二九
電話サンノゼ七三一四

恭迎新年
諸君の御幸福と御健康を祈る
弊店は昨年中皆樣から多大の御引立を蒙り有難御禮申上候
弊店は皆樣の御最負に酬ひんが爲め、出來る限り品質良好の品物を提供すべく努力致す決心です
千九百廿七年は弊店創立七十五年に相當致しますので記念祝を致し度く希望して居ます
CHARLES FORD COMPANY
WATSONVILLE, CALIF.

諒闇中につき年始の禮を御遠慮申上候
舊年中は多大の御愛顧を辰ふし難有存じ厚く御禮申上候
尚ほ本年は舊年に倍し御引立の程伏て願上候
一月元旦　敬具
TRADE MARK REGISTERED
高麗人參精
高麗人參錠
一手販賣元
日米藥種、書籍、美術品並化粧品
直輸入商
加州公認
濱井回春堂藥店
櫻面都市第三街千二百〇六番
（電話）メーン一九二二J

美洲樓
日本人の支那料理
王府第八街四一五　主人　足立
電話レーキサイド一六八五
美洲樓

各種
▼飲料
▼麹
王府　丸山商店
電話レーキサイド五一五四

ハッピー寫眞館
電話レーキサイド八七八七
引延進呈　王府第八街一六二

公認
産婆　山崎シモ
電話レーキサイド四五三六
王府第六街一六五

公認
歯科醫
王府第八街五一八
矢幡富藏
電話オークランド二六八
ブロードウエー一〇〇七
犬飼猛
電話オークランド三六〇
ブロードウエー一〇〇七
住宅ハムボルト一九三六

師
王府
犬飼よし子
電話オークランド三六〇七
住宅オークランド八〇七

ウエスタン眼鏡
池袋　二
電話オークランド八六一六
1917 Telegraph Ave Oakland Lake 7316
眼鏡低廉

王府第八街四一五
電話レーキサイド八八五六
山田醫院
須大醫學士　山田崇三郎

王府第十街三〇
電話レーキサイド六七九八
辻寫眞館

公認
眼科專門醫
王府第六街三三一　引延進呈
上原久雄

王府第七街四三〇
電話レーキサイド六九九六
住宅電話レーキサイド六六六
重富寫眞館

王府第八街三七四
電話王府七一六〇
引延
重富

王府第十街三〇
電話オークランド一六六四
堀田産院

王府第十五街一四
電話オークランド一九四八
住宅オークランド五三七一
中村時計店

王府第十五街一四
電話　商店オークランド一九四八
住宅オークランド五三七一
草野ホテル

王府第八街三七九
電話オークランド二五七二
電話レーキサイド七九六四

王府第八街百三十一番
（マデソン街とオーク街の間）
（マデソン公園前）
王府一二〇二
電話
同七九六
灣東商會

公認
藤森醫院
醫學士　藤森直和
電話オークランド六二七七

王府第八街百二十一番
（マデソン街とオーク街の間）
（マデソン公園前）
灣東運送店
王府第八街三七九
電話レーキサイド六七九八
灣東運送店

金銀賣石時計指輪裝飾品一切月賦掛の御書に應じます
ジョージ・ゴールドン
王府十五街四一四
電話　商店オークランド一九四八
住宅オークランド五三七一
中村時計店

師國に關する總ての手續を最も親切に取扱ふ
王府フランクリン街七一四
分館　王府八街三七九
草野ホテル

資本金一億圓
株式會社
三井銀行
利率　年六分
海外特別當座預金
本預金は在外者各位の爲め特に設けたる御便利な預金にして左記の如き特長利益有之候
(一)利息は定期預金公定利率と同じ割合にして毎年五月、十一月の二回に計算可致候
(二)通帳を使用するを以て御出し入れ共自由にして而も五ヶ年間書替の必要無之候
(三)預入は銀行爲替又は郵便爲替にて御送附致下度候
本預金取扱店は横濱、神戸、廣島、下關、門司、仙臺、長崎の各支店に限り申候
本支店出張所々在地
東京本店、日本橋　丸之内(東京市)
名古屋　京都　廣島　門司
横濱　神戸　下關
大阪　大阪西　大阪堂島　大阪川口
長崎　上海　釜山　孟買　仙臺　酒水(瓜哇)

サクラメント（州一）

加州一なる誇べき 大金鑛脈を發見

櫻府から卅哩以内の地で七八百万弗を發掘の豫想

櫻府から三十哩以内なるエルドラド郡のピック・プザードの舊金坑區内で全国新なる一大金鑛脈が發見されたとの報道は、著しく紙面の耳目を聳たしている。其處はフォルサムから九哩隔たつたアメリカン河の中部分岐點に位し今から約六ヶ月前に當市のファーマー・メカニック銀行頭取たるジョージ・ダブルユー・ベルチャー氏と鐵山技師なるアルバート・バンダーグラフ氏との共同支配權に屬したものである。

▲今回發見された新鑛脈は加州第一の金鑛を以て尚り得るも、既に五百万弗を寄附

▲市川德志夫人入院　當市より百五十哩に及びベルチャー氏の支配權の及ぶ範圍は四千五百坪の長さであり、最低に見積つても七八百萬弗は掘り得べく、既に五百万弗を寄附

▲大正區通信　フロリン山田環氏ご逝去追悼記念として大正學園に本年度の卒業生の記念として大正學園に本年度の卒業生の記念として大正學園に本年度の卒業生の

家庭小說

奔流 (五十八)

三宅やす子作

うたがひ 五

醫者は太い指輪をはめた手をゆつくりと金盥の中につけて、幾度も石鹼でこすつた。

淳子は客に行くところの話しでは無かつた。進だけが、はきなれないはかまをはいて、

「よく氣を付けないといけないよ」

さいひ置いて出かけた。

「ほんとに御苦勞樣ですけれど……皆にどうぞ宜しく仰しやつて」

「彼はもう、さつさと門の方に歩いてゐた」

脫ぎ捨てを片づけて彼女は病室を見舞つた。瑠璃子は熱のために、ウト〳〵眠り續けて、早い息づかひだけが部屋に響いた。氷嚢を取り換へて火鉢の側にぽつねんと坐つてゐると森として ゐるけれど落付かない夜だつた女中が二枚の夕刊を持つて來たが別に珍しい記事もなく、讀んでも興味を引くはずもなくて直ぐに讀み捨てた。

「もうお歸りになる時分だわ」女中に何といふことなしに聲をかけた。

「今、お歸りかと思つて出ましたら郵便でございました」

暫らくして郵便を持つて來た女中は、いつも定まつて居眠りをするのが自慢らしかつた。

「たけや、疲れたでせう。門だけ開けておいてもうおやすみ」

「ハイ、でもまだ早うございますから」

もつたいらしくさがる、たけの姿を見送ると淳子は急におかしくなつて了つた。

その時門の鈴がせはしく鳴つて進が歸つて來たらしかつた。

「お遲うございましたわね」

淳子は出迎へて着替を出したが、「瑠璃子はどうした」

「ぐつすり眠つてますけれど惡い方ではなささうですから……」

「フム」と進は默つて着物を脫いだ。

「どうかなさいまして?」

いつも出先のことを色々話す彼が浮ない顏をして口も利かないを怪しんで淳子はたづねた。

「どうもしない」

「何か腹立つことでもおありになつたの?」

「腹を立てたつて仕方がないさ」

淳子はぢつと夫の顏を見た。

「何か香川であつたんでせう」

「うるさいな。何もないよ、いつもの通り」

進は一寸の間を置いて言つた。

「敬一さんが淳子はどうしてるつて言つてた」

敬一といふのは、香川の當主である。

「君は淳子に隨分甘いさうだから女房天下にならないやうに氣をつけろといつたよ」

「まあそんなことを」

淳子はムッとしていつた。

「どうせ母親が母親だから、甘やかせばろくなことはない、ともいつた」

「あなたに向つてそんなことをいつたのですか」

淳子はカッとした。

「そんなにムキにならなくてもいゝさ。敬一さんは事實をいつてゐるだけだ」

「事實を? あなたまでそんなことを仰しやらうとするのね」

進は、淳子の恨んだ言葉に相手にならずに先を續けた。

「敬一君は僕のことを世間知らずだ」といつた。そんなことをいひ出したといふのは、一寸した話のきつかけで、僕がお前のことを多少褒めた形になつたからなんだが——成る程敬一さんのいふ通りかも知れないね」

なぜです、とも何とも淳子はくやしくていへなかつた。

「今だからいふが——僕が始めてお前に逢つた時の眼は、そんな冷めたい利己的の眼ぢやなかつた。あの時のお前の眼には情熱があつた。無理もない。あれはみんな、よその人に捧げるための熱だつたのだ。僕はその熱の幻を見せられたにすぎないやうに、全くの世間知らずだつた。

僕はあらゆるものにかへても、と望んで得たものは單に情熱の殘骸だつたのだ。僕は敬一君にも促されなければならなかつた」

淳子はやつといふだけの勇氣を「あなたはまだ俊郎さんのことをいつてらしやるのね——それならほんとのお見當違ひ私はあんな人に私の純な心の切れつぱしでも奪られませんでしたわ。私の心はそつくり舊のまゝ傷つけられてはゐません。うそとお思ひになるなら俊郎さんとむかひ合つて話て見たつてわかることですわ」

「遲ひますわ、そんなこと。そんなことがあるものですか」

「——」

進は吐き出すやうにいつた。

「俊郎だなんて名を一切いはないやうにしてもらはう。聞きたくないから。不眞面目に處女の心を玩あそんだ、あんな者は、僕の心には死んだ者として置いてあるんだから」

「……」

あつ子は頭から水をあびせられた氣がした。

「だからう」と暫らくしてからいつた。

「これつきり、そんなことは仰しやらないでね。つまらないんですもの、いつまでもいはれゝば、私の心が暗くされるだけのこと、しまひに私は自棄になつてしまひますわ」

「……」

それにしても平氣で人の家庭に石を投げる人がにくらしかつた。

「威張つてるわ」と淳子は心の中でのゝしつた。

(意地にも私は、夫の心を私ひとりにひきつけてあの人達に指もさゝせやしないから)

あつ子はそれ以來、前にも增してかしこい妻だつた。

彼女達の間に面白くない感情が漂ひ始めたとさつた時、彼の女はいつも綺麗にそんなものを拂散らすことに敏感だつた—

新年の各劇場

桑港の

新年の各劇場はそれぞれ大競爭してゐるが殊にマーケット街の活動寫眞館は競つて大物を上映してるからファンに取つては見時である、ザット御紹介すればセントフランシスは近頃メッキリ賣り出したハチ髭のアドロフ・マンジュー氏と色男役としてバレンチノと競爭したリカルド・コルツ氏リダ・デ・プチ孃の「惡魔の悲しみ」をやつてる。

◇

イムペリアルはイバン・モスキン主演の「ミカエル・ストロゴフ」である、標題の名が示すやうにロシヤ物で出場人員四千人と稱してる、ジプシーの戀、町の火事、母性愛、曠野における活劇等活動寫眞としてのテクニックを殆ど盡つくしたやうな作で面白い。

キャリフオルニヤはミルトン・シルスの「沈默の愛人」だが一日からは「惡魔馬」これは純然たる西部劇だ子供さん達にはいゝ。グラナダがいゝ。死んだヴアレンチノと婚約があつたとかないとかは別として非常に我儘で、表情は淫蕩的でおキャンであるポラ・ネグリ孃が「ホテル・インペリアル」に出演、セイゼイ山のある際どいところをやつてゐる見供に見せるには考へものだが、アメリカ人にはもつて來いの寫眞全く艶つぽい處は彼の獨得の藝!

◇

活動の一流處はザット前記の獻立て芝居ボイドビルになると「アルカザ」は喜劇「故鄉の人」これは只わけもなく面白おかしいもので新年にはいゝだらうが大したものでなし「カラン」はオペレット「ブラクサムタイム」これはニューヨークあたりでも大分評判になつた一種の喜歌劇で澤山の美人が出演する、此の一座は昨年も出桑して好評だつた。

「コロムビヤ」には久し振でリチャード・ベンネットの一座がかゝつた。やはり喜劇一座である題は「知つてる癖に」だ、新年桑港にかゝつてる喜劇として此の一座のが見ごたへあらう。「パンテーヂ」では世界野球爭覇戰の本壘打王ベーブ・ルースが出てる、ファンには一度はお目にかゝつてい顏、映畫で「夜牛の接吻」をやつてる「ウ井ルキ」はコルフの「クインハイ」だ、これも滑稽本位のオペレット式のもの、ゴールデンゲートとオフユームは盛り擇山、だが大したことはない、早變した處喜劇やオペレットばかり、唯一つ公會堂でやつてる基督劇「ミラクル」は範を異にする。ラインハルトの演出は鮮かで、舞臺一面に作つたカソリック大殿堂も大仕掛ダイアナ孃のマドンナ五百數十人の出演これだけでも話の種に見て置く必要があるし又二度と見られぬだらう

日米支同盟 舞臺で成る

主役は日本人でコーラス卅餘名

舞や獨唱の新試み

(紐育發)東洋人の舞踊家聯盟家を混じた一座が近くブロードウエーに一旗擧げることは既報した處であるが、その後米人興行師側との交涉も進みブロードウエーではお馴染の

舞踊家 伊藤道郎君が主導役となり、目下ブロードウエーは五十丁目のローズランドで盛んにお稽古中とある。今回の一座は純然たる東洋人聯盟とも稱すべきものであつて主役を演ずる日本人側では伊藤道郎君が門下生を率いて例の日本のチヤールストンや元祿花見踊りを演ずる外、能樂の山川五郎君は

道成寺を改作したものを上場し伊顯祐次君のテナー、それに一時シューバート興行團のオペレッタ「ミカド」に出演したソプラノの小池ひさ子さんら銀鈴のごとき美聲を聞かせる以外最近やかましい日系市民側からは布哇生れの寄席藝人で知られてゐる都シスターース(男一女二名)加州で生れた美しい河野孃の獨唱があり故廣瀨牧師の遺兒で米婦人との間に生れたベースの廣瀨ジョーヂ君といふ

混血兒の歌手も出演する而してこの主役を背景とするコーラス團の卅餘名は全部支那人をもつてするといふのであるが舞臺上における純然たる日米支同盟を實現したもので、開場の上は定めてブロードウエーの人氣を呼ぶことであらう。舞踏場面も大小とりまぜて廿四幕と云ふレヴユーで近くハートフオードで小手試しを行つた上來春早々ニューヨークで蓋を開けることになつてゐる。

監獄で雪州出演

囚人慰安

當市デーリイ、ニウス紙主催の下に在サンクエンチン監獄の囚人慰安演藝會を明朝七時から同監獄のメッス・ホールに於いて擧行することゝなり各劇場に出演中の役者連も喜んで是れに出演を快諾してゐるが昨年押し迫つて當市オヒューム座にて「馬賊王子」を上演した早川雪州一座も今夜特に羅府から來桑しサンクエンチンに赴くそうである。出演々藝の**重なる**ものは早川雪州を始めとしオヒュームのトミー、ボーイ音樂團やゴールデンゲート座のエツトリング一座その他活動寫眞等にして各座も競つて役者連を貸すことになつてゐる。

海上風靜 謹詠

モニタ 久津木才次郎

陽の御帝今出ましぬ果てもなき海一ぱいは金色にして

×

伊勢の海眞珠も育つ和風に朝にきこゆ豐の船唄

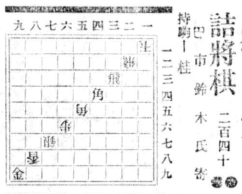
×

海の幸千尋の底の目なし魚此の靜けさにうたけせし世や

懸賞 詰將棋 二百四十

巴市 鈴木氏寄

持駒一桂



右の解答

△一三飛成▲一二金間△二三桂打▲二一玉△一二成飛▲同金△三一飛打▲二二玉△一一飛成▲三一玉△一二成飛▲四二玉△三二成飛▲四一玉△三三成飛▲同…六五玉△五五飛▲六七玉△五五…角打▲八八玉△八五成飛▲同銀△九九香打▲同…△七七金打▲八八金…

變化 △五八角打の處三四に角打の手あり

右解答に對し加州は勿論遠くはメキシコ、紐育、シカゴ地方よりワシントン州其他山中部より多數の解答に接したるが正解者中抽籤法により左の通り當選者を得たり

一等 櫻而都 小林丙子郎氏
二等 桑港 別院氏
三等 同 直井岬月氏
四等 ネバタ州 宮家友吉氏

新版 大春堂 迅速誠實
THE TAISHUN-DO
1423 KERN ST. FRESNO, CALIF

◇講談倶樂部新年號 キング新年號 一弗 半弗◇

大正十六年度 當用日記 大形函入一、四〇 中形背革一、三〇 同上製一、〇〇 小形上製八〇

運勢暦 三〇 運氣暦 二五 御家寶 二〇 御壽寶 二〇 御重寶 二〇 略暦 〇五

懷中日記上製 四〇 同 並製 二八 英文當用日記 一、一〇 同 懷中日記 八五 家庭日記 一、〇〇 家計日記 五〇

ライオン當用日記 中形一、八〇 小形一、〇〇

新年繪葉書 特製色刷一打 二五 米國風景一打 一五

クリスマス カード 一枚一仙 英文新年カード 一枚一仙

百人一首 かるた 一組一弗

日本行汽船切符御申込みに應ず
日本御料理 小川ホテル
612 California St. San Francisco, Calif. Tel. Davenport 1816

桑港パイン街五五一 551 Pine St., S. F. Calif.
電話ダベンポート 七〇八三
日本行汽船切符取次
帝國ホテル

日本行各汽船切符取扱ひ 並出國許可證諸證明手續
桑港ラグナ街一五五一
館主 田中米吉
電話ウエスト五二一五
日本ホテル

日本行乘船券
電話ダベンポート七一六八
出國許可、再入國請願、移民局事項
440 Pacific St., S. F. Calif.
田村旅館

北米の五車堂
1698 Post St. S. F. Calif.
現代的御贈答品
井上 英和大辭典 六、五〇
上井 英和大辭典 七、五〇
上井 和英大辭典 三、五〇
上 和英中辭典 二、八〇
袖珍 コンサイス 英和辭典 和英辭典 英和合本 二、二五 二、四〇 二、八〇
三省堂 ディクショナリー
改訂 英作文辭典 五、五〇
漢和大辭海(井上博士) 五、五〇
英文 手紙と日記の書き方 一、三〇

イーストマン コダック
寫眞用材料各種
桑港ポスト街一六三九
瑞穗商會
電話ウエスト一〇九四

オーヱー藥舖
1708 Buchanan St., S. F. Calif.
機能發育器 八弗五十仙、十二弗 十五弗 目錄あり
グロビュール 痳病内服藥 五弗 九弗 慢性たりとも洗滌藥を要せずして數週間にして全治す
ラヂオール礦泉 三弗 リューマチス、神經痛、皮膚病に特効あり
オーヱー胃腸丸 一弗 惡酒の爲に胃腸を害した人とか慢性の胃腸病患者は一度お試し下さい

大正十五年七月一日現在 職員錄 四、二〇
大正十六年 時事年鑑 二、五〇
大正十六年 國民年鑑 一、七〇
大正十六年度 當用日記 大形上製 一、四〇 大形背革 一、八〇 中形上製 一、〇〇 中形背革 一、三〇 中形上製 一、〇〇
家庭日記 一、三〇 九星暦 二〇
運勢暦 一、五〇
世界のテナー藤原義江吹込 沖のかもめ 荒城の月 (ヴイクター・レッド シール兩面盤)
青木大成堂
1601 Geary St., S. F. Calif. Tel. West 5331

大谷友右衛門 實川延十郎大一座

御名殘興行

正月元日、二、三日(三日間)

サクラメント市 於ボクシンク・ホール

毎夜正六時開演

觀劇料金 貳弗均一

初日 元日(土曜)

壽式三番叟

引ぬき 初春花の玉うさぎ大だんまり

伽羅千代萩 竹の間より御殿床下まで

大喜利 大和往來 梅川忠兵衛 封印切り

二日目 二日(日曜)

義士忠臣藏 本藏下屋敷 桃井若狭之助館の段

時雨炬燵 紙屋治兵衛

馬士と武士 勘忍袋 神崎與五郎東下り

大喜利 名作 左小刀京人形

三日目 三日(月曜)

加賀見山 故鄉錦繪 敵討まで 四幕

大喜利 つゞれの錦 大安寺堤 春藤治郎右衛門

大石藏之助 南部坂雪の別れ

スタクトン 八日、九日

フレスノ 十日、十一日

日米興行會社

俳優連名

中村延男 (實川男寿)

中村歌[illegible]

中村[illegible]

實川延[illegible]

中村[illegible]

實川延[illegible]

市川[illegible]

實川延[illegible]

實川延十郎

竹本 太夫

三味せん 豐澤[illegible]

はやし方

[illegible]

衣裳元 大谷[illegible]

小道具方 [illegible]

かつら [illegible]

床山 [illegible]

背景師 [illegible]

電氣照明 [illegible]

事務員 小川[illegible]

總監督 [illegible]清水

日米
第二新年號

十字街頭に立てる在留同胞社會の現狀

時局に善處するの覺悟

昭和二年の年頭所感

桑港總領事　武富敏彦

一、今や在留同胞は十字街頭に立ちてをる、親も子も乃至は同胞社會全體も此人生の岐路に直面してをる、之に善處するか否かは人生興廢の岐る所である。以上は自分が過去一年間巡州各地で叫んだ議論の前提であり又結論である、自分は色々の關係から思ひ切つて思ひ切つた事を云ひ得ない自分の不才と怯懦とを恥じ、自分の中心思想だけは少くも耳を傾けて下さつた方には略明かであらうと自信する。

▽

二、同胞社會が行詰まつたといふ訴へがある、然し行き詰まるも詰まらぬも考へ樣次第では行き詰まるなどの如き勇氣も缺くべからざるものである。

▽

三、考へれば考へる程問題は輕重山になる、十年後二十年後の同胞社會は如何になるだらうか、現代同胞の各種生業の狀態は今日通りの內容で何時までも續き得るか、次代同胞の時代はどなつたならば生業狀態の變化は如何に現れるか、今後に於ける米人の何れを是とすべきや屢はしの社會との接觸融和の關係は如何に變化するか、勿論德の關係について所信を申述べることも報恩の一かと存じます。

▽

私共が過去久遠劫來の業因を察知し現在の身を處すべき道を知り未來劫の自己を明かにする難義なる問題を存じます或人は宗教を以て解決せんとし或人は宗教は道德の延長にして我れ一切を體驗するこれを宗教といひ上の四恩（君主の恩、父母の恩、一切衆生恩、三寶の恩）は我等の精神に銘記すべき教示にして宗教は道德を守らしむるための方便なりとさへいふものありて衆生の根底とすべき教示にして宗教は道德を一致してこそ故に釋尊は常に四恩の尊重べ

▽

サテ今後の爲替相場はどうなるかと云ふに減だ大ケ敷い問題なれども、ちょうスペキュレーションによる賣買は藏相の測は出來ない、即ち

▽

日米貿易と云ふても其大部分は米國東部と日本との商賣であり又は藩府は東に渡米人足の仕事をするに過ぎ例があります

▽

日米間の貿易も生絲安、爲替

▽

「幸福」！最も多く口に出し

▽

人の幸福はバラの花の香

▽

「幸福」！最も多く我等が考ふる言葉であるこゝろ、愛の燈火の光ごゝろ、

▽

愛は極度を見出し兼ねるもの、

▽

愛は本仕は決局る處人間生存

▽

（一）青少年の運動遊戯場、（二）公會堂（四病院、尤も（一）の

▽

（三）

▽

（四）

▽

（五）

▽

（六）

▽

（七）

▽

（八）

▽

（九）

▽

（十）

▽

（十一）

▽

（十二）

▽

（十三）

▽

（十四）

▽

（十五）

▽

（十六）

▽

（十七）

▽

（十八）

▽

（十九）

▽

（二十）

▽

（二十一）

▽

（二十二）

▽

（二十三）

▽

（二十四）

▽

（二十五）

▽

（二十六）

▽

（二十七）

▽

（二十八）

▽

（二十九）

▽

（三十）

▽

（三十一）

▽

（三十二）

▽

（三十三）

▽

（三十四）

▽

（三十五）

▽

（三十六）

▽

（三十七）

▽

（三十八）

▽

（三十九）

▽

（四十）

▽

（四十一）

▽

（四十二）

▽

（四十三）

▽

（四十四）

▽

（四十五）

▽

（四十六）

▽

（四十七）

▽

（四十八）

▽

（四十九）

▽

（五十）

▽

（五十一）

▽

（五十二）

▽

（五十三）

▽

（五十四）

▽

（五十五）

▽

（五十六）

▽

（五十七）

▽

（五十八）

▽

（五十九）

▽

（六十）

▽

（六十一）

▽

（六十二）

▽

（六十三）

▽

（六十四）

▽

（六十五）

▽

（六十六）

▽

（六十七）

▽

（六十八）

▽

（六十九）

▽

（七十）

▽

（七十一）

▽

（七十二）

▽

（七十三）

▽

（七十四）

▽

（七十五）

▽

（七十六）

▽

（七十七）

▽

（七十八）

▽

（七十九）

▽

（八十）

▽

（八十一）

▽

（八十二）

▽

（八十三）

▽

（八十四）

▽

（八十五）

▽

（八十六）

▽

（八十七）

▽

（八十八）

▽

（八十九）

▽

（九十）

▽

（九十一）

▽

（九十二）

▽

（九十三）

▽

（九十四）

▽

（九十五）

▽

（九十六）

▽

（九十七）

▽

（九十八）

▽

（九十九）

▽

（百）

▽

（百一）

▽

（百二）

▽

（百三）

▽

（百四）

▽

（百五）

▽

（百六）

▽

（百七）

▽

（百八）

▽

（百九）

▽

（百十）

▽

（百十一）

▽

（百十二）

▽

（百十三）

▽

（百十四）

▽

（百十五）

▽

（百十六）

▽

（百十七）

▽

（百十八）

▽

（百十九）

▽

（百二十）

▽

（百二十一）

▽

（百二十二）

▽

（百二十三）

▽

（百二十四）

▽

（百二十五）

▽

（百二十六）

▽

（百二十七）

▽

（百二十八）

▽

（百二十九）

▽

（百三十）

▽

（百三十一）

▽

（百三十二）

▽

（百三十三）

▽

（百三十四）

▽

（百三十五）

▽

（百三十六）

▽

（百三十七）

▽

（百三十八）

▽

（百三十九）

▽

（百四十）

▽

（百四十一）

▽

（百四十二）

▽

（百四十三）

▽

（百四十四）

▽

（百四十五）

▽

（百四十六）

▽

（百四十七）

▽

（百四十八）

▽

（百四十九）

▽

（百五十）

▽

（百五十一）

▽

（百五十二）

▽

（百五十三）

▽

（百五十四）

▽

（百五十五）

▽

（百五十六）

▽

（百五十七）

▽

（百五十八）

▽

（百五十九）

▽

（百六十）

▽

（百六十一）

▽

（百六十二）

▽

（百六十三）

▽

（百六十四）

▽

（百六十五）

▽

（百六十六）

▽

（百六十七）

▽

（百六十八）

▽

（百六十九）

▽

（百七十）

▽

（百七十一）

▽

（百七十二）

▽

（百七十三）

▽

（百七十四）

▽

（百七十五）

▽

（百七十六）

▽

（百七十七）

▽

（百七十八）

▽

（百七十九）

▽

（百八十）

▽

（百八十一）

▽

（百八十二）

▽

（百八十三）

▽

（百八十四）

▽

（百八十五）

▽

（百八十六）

▽

（百八十七）

▽

（百八十八）

▽

（百八十九）

▽

（百九十）

▽

（百九十一）

▽

（百九十二）

▽

（百九十三）

▽

（百九十四）

▽

（百九十五）

▽

（百九十六）

▽

（百九十七）

▽

（百九十八）

▽

（百九十九）

▽

（二百）

▽

（二百一）

▽

（二百二）

▽

（二百三）

▽

（二百四）

▽

（二百五）

▽

（二百六）

▽

（二百七）

▽

（二百八）

▽

（二百九）

▽

（二百十）

▽

（二百十一）

▽

（二百十二）

▽

（二百十三）

▽

（二百十四）

▽

（二百十五）

▽

（二百十六）

▽

（二百十七）

▽

（二百十八）

▽

（二百十九）

▽

（二百二十）

▽

（二百二十一）

▽

（二百二十二）

▽

（二百二十三）

▽

（二百二十四）

▽

（二百二十五）

▽

（二百二十六）

▽

（二百二十七）

▽

（二百二十八）

▽

（二百二十九）

▽

（二百三十）

▽

（二百三十一）

▽

（二百三十二）

▽

（二百三十三）

▽

（二百三十四）

▽

（二百三十五）

▽

（二百三十六）

▽

（二百三十七）

▽

（二百三十八）

▽

（二百三十九）

▽

（二百四十）

▽

（二百四十一）

▽

（二百四十二）

▽

（二百四十三）

▽

（二百四十四）

▽

（二百四十五）

▽

（二百四十六）

▽

（二百四十七）

▽

（二百四十八）

▽

（二百四十九）

▽

（二百五十）

▽

（二百五十一）

▽

（二百五十二）

▽

（二百五十三）

▽

（二百五十四）

▽

（二百五十五）

▽

（二百五十六）

▽

（二百五十七）

▽

（二百五十八）

▽

（二百五十九）

▽

（二百六十）

▽

（二百六十一）

▽

（二百六十二）

▽

（二百六十三）

▽

（二百六十四）

▽

（二百六十五）

▽

（二百六十六）

▽

（二百六十七）

▽

（二百六十八）

▽

（二百六十九）

▽

（二百七十）

▽

（二百七十一）

▽

（二百七十二）

▽

（二百七十三）

▽

（二百七十四）

▽

（二百七十五）

▽

（二百七十六）

▽

（二百七十七）

▽

（二百七十八）

▽

（二百七十九）

▽

（二百八十）

▽

（二百八十一）

▽

（二百八十二）

▽

（二百八十三）

▽

（二百八十四）

▽

（二百八十五）

▽

（二百八十六）

▽

（二百八十七）

▽

（二百八十八）

▽

（二百八十九）

▽

（二百九十）

▽

（二百九十一）

▽

（二百九十二）

▽

（二百九十三）

▽

（二百九十四）

▽

（二百九十五）

▽

（二百九十六）

▽

（二百九十七）

▽

（二百九十八）

▽

（二百九十九）

▽

（三百）

▽

（三百一）

▽

（三百二）

▽

（三百三）

▽

（三百四）

▽

（三百五）

▽

（三百六）

▽

（三百七）

▽

（三百八）

▽

（三百九）

▽

（三百十）

▽

（三百十一）

▽

（三百十二）

▽

（三百十三）

▽

（三百十四）

▽

（三百十五）

▽

（三百十六）

▽

（三百十七）

▽

（三百十八）

▽

（三百十九）

▽

（三百二十）

▽

（三百二十一）

▽

（三百二十二）

▽

（三百二十三）

▽

（三百二十四）

▽

（三百二十五）

▽

（三百二十六）

▽

（三百二十七）

▽

（三百二十八）

▽

（三百二十九）

▽

（三百三十）

▽

（三百三十一）

▽

（三百三十二）

▽

（三百三十三）

▽

（三百三十四）

▽

（三百三十五）

▽

（三百三十六）

▽

（三百三十七）

▽

（三百三十八）

▽

（三百三十九）

▽

（四百）

▽

（四百一）

▽

（四百二）

▽

（四百三）

▽

（四百四）

▽

（四百五）

▽

（四百六）

▽

（四百七）

▽

（四百八）

▽

（四百九）

▽

（四百十）

▽

（四百十一）

▽

（四百十二）

▽

（四百十三）

▽

（四百十四）

▽

（四百十五）

▽

（四百十六）

▽

（四百十七）

▽

（四百十八）

▽

（四百十九）

▽

（四百二十）

▽

（四百二十一）

▽

（四百二十二）

▽

（四百二十三）

▽

（四百二十四）

▽

（四百二十五）

▽

（四百二十六）

▽

（四百二十七）

▽

（四百二十八）

▽

（四百二十九）

▽

（四百三十）

▽

（四百三十一）

▽

（四百三十二）

▽

（四百三十三）

▽

（四百三十四）

▽

（四百三十五）

▽

（四百三十六）

▽

（四百三十七）

▽

（四百三十八）

▽

（四百三十九）

▽

（四百四十）

▽

（四百四十一）

▽

（四百四十二）

▽

（四百四十三）

▽

（四百四十四）

▽

（四百四十五）

▽

（四百四十六）

▽

（四百四十七）

▽

（四百四十八）

▽

（四百四十九）

▽

（四百五十）

▽

（四百五十一）

▽

（四百五十二）

▽

（四百五十三）

▽

（四百五十四）

▽

（四百五十五）

▽

（四百五十六）

▽

（四百五十七）

▽

（四百五十八）

▽

（四百五十九）

▽

（四百六十）

▽

（四百六十一）

▽

（四百六十二）

▽

（四百六十三）

▽

（四百六十四）

▽

（四百六十五）

▽

（四百六十六）

▽

（四百六十七）

▽

（四百六十八）

▽

（四百六十九）

▽

（四百七十）

▽

（四百七十一）

▽

（四百七十二）

▽

（四百七十三）

▽

（四百七十四）

▽

（四百七十五）

▽

（四百七十六）

▽

（四百七十七）

▽

（四百七十八）

▽

（四百七十九）

▽

（四百八十）

▽

（四百八十一）

▽

（四百八十二）

▽

（四百八十三）

▽

（四百八十四）

▽

（四百八十五）

▽

（四百八十六）

▽

（四百八十七）

▽

（四百八十八）

▽

（四百八十九）

▽

（四百九十）

▽

（四百九十一）

▽

（四百九十二）

▽

（四百九十三）

▽

（四百九十四）

▽

（四百九十五）

▽

（四百九十六）

▽

（四百九十七）

▽

（四百九十八）

▽

（四百九十九）

▽

（五百）

▽

（五百一）

▽

（五百二）

▽

（五百三）

▽

（五百四）

▽

（五百五）

▽

（五百六）

▽

（五百七）

▽

（五百八）

▽

（五百九）

▽

（五百十）

▽

（五百十一）

▽

（五百十二）

▽

（五百十三）

▽

（五百十四）

▽

（五百十五）

▽

（五百十六）

▽

（五百十七）

▽

（五百十八）

▽

（五百十九）

▽

（五百二十）

▽

（五百二十一）

▽

（五百二十二）

▽

（五百二十三）

▽

（五百二十四）

▽

（五百二十五）

▽

（五百二十六）

▽

（五百二十七）

▽

（五百二十八）

▽

（五百二十九）

▽

（五百三十）

▽

（五百三十一）

▽

（五百三十二）

▽

（五百三十三）

▽

（五百三十四）

▽

（五百三十五）

▽

（五百三十六）

▽

（五百三十七）

▽

（五百三十八）

▽

（五百三十九）

▽

（六百）

▽

（六百一）

▽

（六百二）

▽

（六百三）

▽

（六百四）

▽

（六百五）

▽

（六百六）

▽

（六百七）

▽

（六百八）

▽

（六百九）

▽

（六百十）

▽

（六百十一）

▽

（六百十二）

▽

（六百十三）

▽

（六百十四）

▽

（六百十五）

▽

（六百十六）

▽

（六百十七）

▽

（六百十八）

▽

（六百十九）

▽

（六百二十）

▽

（六百二十一）

▽

（六百二十二）

▽

（六百二十三）

▽

（六百二十四）

▽

（六百二十五）

▽

（六百二十六）

▽

（六百二十七）

▽

（六百二十八）

▽

（六百二十九）

▽

（六百三十）

▽

（六百三十一）

▽

（六百三十二）

▽

（六百三十三）

▽

（六百三十四）

▽

（六百三十五）

▽

（六百三十六）

▽

（六百三十七）

▽

（六百三十八）

▽

（六百三十九）

▽

（七百）

▽

（七百一）

▽

（七百二）

▽

（七百三）

▽

（七百四）

▽

（七百五）

▽

（七百六）

▽

（七百七）

▽

（七百八）

▽

（七百九）

▽

（七百十）

▽

（七百十一）

▽

（七百十二）

▽

（七百十三）

▽

（七百十四）

▽

（七百十五）

▽

（七百十六）

▽

（七百十七）

▽

（七百十八）

▽

（七百十九）

▽

（七百二十）

▽

（七百二十一）

▽

（七百二十二）

▽

（七百二十三）

▽

（七百二十四）

▽

（七百二十五）

▽

（七百二十六）

▽

（七百二十七）

▽

（七百二十八）

▽

（七百二十九）

▽

（七百三十）

▽

（七百三十一）

▽

（七百三十二）

▽

（七百三十三）

▽

（七百三十四）

▽

（七百三十五）

▽

（七百三十六）

▽

（七百三十七）

▽

（七百三十八）

▽

（七百三十九）

▽

（八百）

▽

（八百一）

▽

（八百二）

▽

（八百三）

▽

（八百四）

▽

（八百五）

▽

（八百六）

▽

（八百七）

▽

（八百八）

▽

（八百九）

▽

（八百十）

▽

（八百十一）

▽

（八百十二）

▽

（八百十三）

▽

（八百十四）

▽

（八百十五）

▽

（八百十六）

▽

（八百十七）

▽

（八百十八）

▽

（八百十九）

▽

（八百二十）

▽

（八百二十一）

▽

（八百二十二）

▽

（八百二十三）

▽

（八百二十四）

▽

（八百二十五）

▽

（八百二十六）

▽

（八百二十七）

▽

（八百二十八）

▽

（八百二十九）

▽

（八百三十）

▽

（八百三十一）

▽

（八百三十二）

▽

（八百三十三）

▽

（八百三十四）

▽

（八百三十五）

▽

（八百三十六）

▽

（八百三十七）

▽

（八百三十八）

▽

（八百三十九）

▽

（九百）

▽

（九百一）

▽

（九百二）

▽

（九百三）

▽

（九百四）

▽

（九百五）

▽

（九百六）

▽

（九百七）

▽

（九百八）

▽

（九百九）

▽

（九百十）

▽

（九百十一）

▽

（九百十二）

▽

（九百十三）

▽

（九百十四）

▽

（九百十五）

▽

（九百十六）

▽

（九百十七）

▽

（九百十八）

▽

（九百十九）

▽

（九百二十）

▽

（九百二十一）

▽

（九百二十二）

▽

（九百二十三）

▽

（九百二十四）

▽

（九百二十五）

▽

（九百二十六）

▽

（九百二十七）

▽

（九百二十八）

▽

（九百二十九）

▽

（九百三十）

▽

（九百三十一）

▽

（九百三十二）

▽

（九百三十三）

▽

（九百三十四）

▽

（九百三十五）

▽

（九百三十六）

▽

（九百三十七）

▽

（九百三十八）

▽

（九百三十九）

▽

（九百四十）

▽

（九百四十一）

▽

（九百四十二）

▽

（九百四十三）

▽

（九百四十四）

▽

（九百四十五）

▽

（九百四十六）

▽

（九百四十七）

▽

（九百四十八）

▽

（九百四十九）

▽

（九百五十）

▽

（九百五十一）

▽

（九百五十二）

▽

（九百五十三）

▽

（九百五十四）

▽

（九百五十五）

▽

（九百五十六）

▽

（九百五十七）

▽

（九百五十八）

▽

（九百五十九）

▽

（九百六十）

▽

（九百六十一）

▽

（九百六十二）

▽

（九百六十三）

▽

（九百六十四）

▽

（九百六十五）

▽

（九百六十六）

▽

（九百六十七）

▽

（九百六十八）

▽

（九百六十九）

▽

（九百七十）

▽

（九百七十一）

▽

（九百七十二）

▽

（九百七十三）

▽

（九百七十四）

▽

（九百七十五）

▽

（九百七十六）

▽

（九百七十七）

▽

（九百七十八）

▽

（九百七十九）

▽

（九百八十）

▽

（九百八十一）

▽

（九百八十二）

▽

（九百八十三）

▽

（九百八十四）

▽

（九百八十五）

▽

（九百八十六）

▽

（九百八十七）

▽

（九百八十八）

▽

（九百八十九）

▽

（九百九十）

▽

（九百九十一）

▽

（九百九十二）

▽

（九百九十三）

▽

（九百九十四）

▽

（九百九十五）

▽

（九百九十六）

▽

（九百九十七）

▽

（九百九十八）

▽

（九百九十九）

▽

（千）

▽

（千一）

▽

（千二）

▽

（千三）

▽

（千四）

▽

（千五）

▽

（千六）

▽

（千七）

▽

（千八）

▽

（千九）

▽

（千十）

▽

（千十一）

▽

（千十二）

▽

（千十三）

▽

（千十四）

▽

（千十五）

▽

（千十六）

▽

（千十七）

▽

（千十八）

▽

（千十九）

▽

（千二十）

▽

（千二十一）

▽

（千二十二）

▽

（千二十三）

▽

（千二十四）

▽

（千二十五）

▽

（千二十六）

▽

（千二十七）

▽

（千二十八）

▽

（千二十九）

▽

（千三十）

▽

（千三十一）

▽

（千三十二）

▽

（千三十三）

▽

（千三十四）

▽

（千三十五）

▽

（千三十六）

▽

（千三十七）

▽

（千三十八）

▽

（千三十九）

▽

（千四十）

▽

（千四十一）

▽

（千四十二）

▽

（千四十三）

▽

（千四十四）

▽

（千四十五）

▽

（千四十六）

▽

（千四十七）

▽

（千四十八）

▽

（千四十九）

▽

（千五十）

▽

（千五十一）

▽

（千五十二）

▽

（千五十三）

▽

（千五十四）

▽

（千五十五）

▽

（千五十六）

▽

（千五十七）

▽

（千五十八）

▽

（千五十九）

▽

（千六十）

▽

（千六十一）

▽

（千六十二）

▽

（千六十三）

▽

（千六十四）

▽

（千六十五）

▽

（千六十六）

▽

（千六十七）

▽

（千六十八）

▽

（千六十九）

▽

（千七十）

▽

（千七十一）

▽

（千七十二）

▽

（千七十三）

▽

（千七十四）

▽

（千七十五）

▽

（千七十六）

▽

（千七十七）

▽

（千七十八）

▽

（千七十九）

▽

（千八十）

▽

（千八十一）

▽

（千八十二）

▽

（千八十三）

▽

（千八十四）

▽

（千八十五）

▽

（千八十六）

▽

（千八十七）

▽

（千八十八）

▽

（千八十九）

▽

（千九十）

▽

（千九十一）

▽

（千九十二）

▽

（千九十三）

▽

（千九十四）

▽

（千九十五）

▽

（千九十六）

▽

（千九十七）

▽

（千九十八）

▽

（千九十九）

▽

（二千）

▽

（二千一）

▽

（二千二）

▽

（二千三）

▽

（二千四）

▽

（二千五）

▽

（二千六）

▽

（二千七）

▽

（二千八）

▽

（二千九）

▽

（二千十）

▽

（二千十一）

▽

（二千十二）

▽

（二千十三）

▽

（二千十四）

▽

（二千十五）

▽

（二千十六）

▽

（二千十七）

▽

（二千十八）

▽

（二千十九）

▽

（二千二十）

▽

（二千二十一）

▽

（二千二十二）

▽

（二千二十三）

▽

（二千二十四）

▽

（二千二十五）

▽

（二千二十六）

▽

（二千二十七）

▽

（二千二十八）

▽

（二千二十九）

▽

（二千三十）

▽

（二千三十一）

▽

（二千三十二）

▽

（二千三十三）

▽

（二千三十四）

▽

（二千三十五）

▽

（二千三十六）

▽

（二千三十七）

▽

（二千三十八）

▽

（二千三十九）

▽

（二千四十）

▽

（二千四十一）

▽

（二千四十二）

▽

（二千四十三）

▽

（二千四十四）

▽

（二千四十五）

▽

（二千四十六）

▽

（二千四十七）

▽

（二千四十八）

▽

（二千四十九）

▽

（二千五十）

▽

（二千五十一）

▽

（二千五十二）

▽

（二千五十三）

▽

（二千五十四）

▽

（二千五十五）

▽

（二千五十六）

▽

（二千五十七）

▽

（二千五十八）

▽

（二千五十九）

▽

（二千六十）

▽

（二千六十一）

▽

（二千六十二）

▽

（二千六十三）

▽

（二千六十四）

▽

（二千六十五）

▽

（二千六十六）

▽

（二千六十七）

▽

（二千六十八）

▽

（二千六十九）

▽

（二千七十）

▽

（二千七十一）

▽

（二千七十二）

▽

（二千七十三）

▽

（二千七十四）

▽

（二千七十五）

▽

（二千七十六）

▽

（二千七十七）

▽

（二千七十八）

▽

（二千七十九）

▽

（二千八十）

▽

（二千八十一）

▽

（二千八十二）

▽

（二千八十三）

▽

（二千八十四）

▽

（二千八十五）

▽

（二千八十六）

▽

（二千八十七）

▽

（二千八十八）

▽

（二千八十九）

▽

（二千九十）

▽

（二千九十一）

▽

（二千九十二）

▽

（二千九十三）

▽

（二千九十四）

▽

（二千九十五）

▽

（二千九十六）

▽

（二千九十七）

▽

（二千九十八）

▽

（二千九十九）

▽

（三千）

▽

（三千一）

▽

（三千二）

▽

（三千三）

▽

（三千四）

▽

（三千五）

▽

（三千六）

▽

（三千七）

▽

（三千八）

▽

（三千九）

▽

（三千十）

▽

（三千十一）

▽

（三千十二）

▽

（三千十三）

▽

（三千十四）

▽

（三千十五）

▽

（三千十六）

▽

（三千十七）

▽

（三千十八）

▽

（三千十九）

▽

（三千二十）

▽

（三千二十一）

▽

（三千二十二）

▽

（三千二十三）

▽

（三千二十四）

▽

（三千二十五）

▽

（三千二十六）

▽

（三千二十七）

▽

（三千二十八）

▽

（三千二十九）

▽

（三千三十）

▽

（三千三十一）

▽

（三千三十二）

▽

（三千三十三）

▽

（三千三十四）

▽

（三千三十五）

▽

（三千三十六）

▽

（三千三十七）

▽

（三千三十八）

▽

（三千三十九）

▽

（三千四十）

▽

（三千四十一）

▽

（三千四十二）

▽

（三千四十三）

▽

（三千四十四）

▽

（三千四十五）

▽

（三千四十六）

▽

（三千四十七）

▽

（三千四十八）

▽

（三千四十九）

▽

（三千五十）

▽

（三千五十一）

▽

（三千五十二）

▽

（三千五十三）

▽

（三千五十四）

▽

（三千五十五）

▽

（三千五十六）

▽

（三千五十七）

▽

（三千五十八）

▽

（三千五十九）

▽

（三千六十）

▽

（三千六十一）

▽

（三千六十二）

▽

（三千六十三）

▽

（三千六十四）

▽

（三千六十五）

▽

（三千六十六）

▽

（三千六十七）

▽

（三千六十八）

▽

（三千六十九）

▽

（三千七十）

▽

（三千七十一）

▽

（三千七十二）

▽

（三千七十三）

▽

（三千七十四）

▽

（三千七十五）

▽

（三千七十六）

▽

（三千七十七）

▽

（三千七十八）

▽

（三千七十九）

▽

（三千八十）

▽

（三千八十一）

▽

（三千八十二）

▽

（三千八十三）

▽

（三千八十四）

▽

（三千八十五）

▽

（三千八十六）

▽

（三千八十七）

▽

（三千八十八）

▽

（三千八十九）

▽

（三千九十）

▽

（三千九十一）

▽

（三千九十二）

▽

（三千九十三）

▽

（三千九十四）

▽

（三千九十五）

▽

（三千九十六）

▽

（三千九十七）

▽

（三千九十八）

▽

（三千九十九）

▽

（四千）

▽

（四千一）

▽

（四千二）

▽

（四千三）

▽

（四千四）

▽

（四千五）

▽

（四千六）

▽

（四千七）

▽

（四千八）

▽

（四千九）

▽

（四千十）

▽

（四千十一）

▽

（四千十二）

▽

（四千十三）

▽

（四千十四）

▽

（四千十五）

▽

（四千十六）

▽

（四千十七）

▽

（四千十八）

▽

（四千十九）

▽

（四千二十）

▽

（四千二十一）

▽

（四千二十二）

▽

（四千二十三）

▽

（四千二十四）

▽

（四千二十五）

▽

（四千二十六）

▽

（四千二十七）

▽

（四千二十八）

▽

（四千二十九）

▽

（四千三十）

▽

（四千三十一）

▽

（四千三十二）

▽

（四千三十三）

▽

（四千三十四）

▽

（四千三十五）

▽

（四千三十六）

▽

（四千三十七）

▽

（四千三十八）

▽

（四千三十九）

▽

（四千四十）

▽

（四千四十一）

▽

（四千四十二）

▽

（四千四十三）

▽

（四千四十四）

▽

（四千四十五）

▽

（四千四十六）

▽

（四千四十七）

▽

（四千四十八）

▽

（四千四十九）

▽

（四千五十）

▽

（四千五十一）

▽

（四千五十二）

▽

（四千五十三）

▽

（四千五十四）

▽

（四千五十五）

▽

（四千五十六）

▽

（四千五十七）

▽

（四千五十八）

▽

（四千五十九）

▽

（四千六十）

▽

（四千六十一）

▽

（四千六十二）

▽

（四千六十三）

▽

（四千六十四）

▽

（四千六十五）

▽

（四千六十六）

▽

（四千六十七）

▽

（四千六十八）

▽

（四千六十九）

▽

（四千七十）

▽

（四千七十一）

▽

（四千七十二）

▽

（四千七十三）

▽

（四千七十四）

▽

（四千七十五）

▽

（四千七十六）

▽

（四千七十七）

▽

（四千七十八）

▽

（四千七十九）

▽

（四千八十）

▽

（四千八十一）

▽

（四千八十二）

▽

（四千八十三）

▽

（四千八十四）

▽

（四千八十五）

▽

（四千八十六）

▽

（四千八十七）

▽

（四千八十八）

▽

（四千八十九）

▽

（四千九十）

▽

（四千九十一）

▽

（四千九十二）

▽

（四千九十三）

▽

（四千九十四）

▽

（四千九十五）

▽

（四千九十六）

▽

（四千九十七）

▽

（四千九十八）

▽

（四千九十九）

▽

（五千）

▽

（五千一）

▽

（五千二）

▽

（五千三）

▽

（五千四）

▽

（五千五）

▽

（五千六）

▽

（五千七）

▽

（五千八）

▽

（五千九）

▽

（五千十）

▽

（五千十一）

▽

（五千十二）

▽

（五千十三）

▽

（五千十四）

▽

（五千十五）

▽

（五千十六）

▽

（五千十七）

▽

（五千十八）

▽

（五千十九）

▽

（五千二十）

▽

（五千二十一）

▽

（五千二十二）

▽

（五千二十三）

▽

（五千二十四）

▽

（五千二十五）

▽

（五千二十六）

▽

（五千二十七）

▽

（五千二十八）

▽

（五千二十九）

▽

（五千三十）

▽

（五千三十一）

▽

（五千三十二）

▽

（五千三十三）

▽

（五千三十四）

▽

（五千三十五）

▽

（五千三十六）

▽

（五千三十七）

▽

（五千三十八）

▽

（五千三十九）

▽

（五千四十）

▽

（五千四十一）

▽

（五千四十二）

▽

（五千四十三）

▽

（五千四十四）

▽

（五千四十五）

▽

（五千四十六）

▽

（五千四十七）

▽

（五千四十八）

▽

（五千四十九）

▽

（五千五十）

▽

（五千五十一）

▽

（五千五十二）

▽

（五千五十三）

▽

（五千五十四）

▽

（五千五十五）

▽

（五千五十六）

▽

（五千五十七）

▽

（五千五十八）

▽

（五千五十九）

▽

（五千六十）

▽

（五千六十一）

▽

（五千六十二）

▽

（五千六十三）

▽

（五千六十四）

▽

（五千六十五）

▽

（五千六十六）

▽

（五千六十七）

▽

（五千六十八）

▽

（五千六十九）

▽

（五千七十）

▽

（五千七十一）

▽

（五千七十二）

▽

（五千七十三）

▽

（五千七十四）

▽

（五千七十五）

▽

（五千七十六）

▽

（五千七十七）

▽

（五千七十八）

▽

（五千七十九）

▽

（五千八十）

▽

（五千八十一）

▽

（五千八十二）

▽

（五千八十三）

▽

（五千八十四）

▽

（五千八十五）

▽

（五千八十六）

▽

（五千八十七）

▽

（五千八十八）

▽

（五千八十九）

▽

（五千九十）

▽

（五千九十一）

▽

（五千九十二）

▽

（五千九十三）

▽

（五千九十四）

▽

（五千九十五）

▽

（五千九十六）

▽

（五千九十七）

▽

（五千九十八）

▽

（五千九十九）

▽

（六千）

▽

（六千一）

▽

（六千二）

▽

（六千三）

▽

（六千四）

▽

（六千五）

▽

（六千六）

▽

（六千七）

▽

（六千八）

▽

（六千九）

▽

（六千十）

▽

（六千十一）

▽

（六千十二）

▽

（六千十三）

▽

（六千十四）

▽

（六千十五）

▽

（六千十六）

▽

（六千十七）

▽

（六千十八）

▽

（六千十九）

▽

（六千二十）

▽

（六千二十一）

▽

（六千二十二）

▽

（六千二十三）

▽

（六千二十四）

▽

（六千二十五）

▽

（六千二十六）

▽

（六千二十七）

▽

（六千二十八）

▽

（六千二十九）

▽

（六千三十）

▽

（六千三十一）

▽

（六千三十二）

▽

（六千三十三）

▽

（六千三十四）

▽

（六千三十五）

▽

（六千三十六）

▽

（六千三十七）

▽

（六千三十八）

▽

（六千三十九）

▽

（六千四十）

▽

（六千四十一）

▽

（六千四十二）

▽

（六千四十三）

▽

（六千四十四）

▽

（六千四十五）

▽

（六千四十六）

▽

（六千四十七）

▽

（六千四十八）

▽

（六千四十九）

▽

（六千五十）

▽

（六千五十一）

▽

（六千五十二）

▽

（六千五十三）

▽

（六千五十四）

▽

（六千五十五）

▽

（六千五十六）

▽

（六千五十七）

▽

（六千五十八）

▽

（六千五十九）

▽

（六千六十）

▽

（六千六十一）

▽

（六千六十二）

▽

（六千六十三）

▽

（六千六十四）

▽

（六千六十五）

▽

（六千六十六）

▽

（六千六十七）

▽

（六千六十八）

▽

（六千六十九）

▽

（六千七十）

▽

（六千七十一）

▽

（六千七十二）

▽

（六千七十三）

▽

（六千七十四）

▽

（六千七十五）

▽

（六千七十六）

▽

（六千七十七）

▽

（六千七十八）

▽

（六千七十九）

▽

（六千八十）

▽

（六千八十一）

▽

（六千八十二）

▽

（六千八十三）

▽

（六千八十四）

▽

（六千八十五）

▽

（六千八十六）

▽

（六千八十七）

▽

（六千八十八）

▽

（六千八十九）

▽

（六千九十）

▽

（六千九十一）

▽

（六千九十二）

▽

（六千九十三）

▽

（六千九十四）

▽

（六千九十五）

▽

（六千九十六）

▽

（六千九十七）

▽

（六千九十八）

▽

（六千九十九）

▽

（七千）

▽

（七千一）

▽

（七千二）

▽

（七千三）

▽

（七千四）

▽

（七千五）

▽

（七千六）

▽

（七千七）

▽

（七千八）

▽

（七千九）

▽

（七千十）

▽

（七千十一）

▽

（七千十二）

▽

（七千十三）

▽

（七千十四）

▽

（七千十五）

▽

（七千十六）

▽

（七千十七）

▽

（七千十八）

▽

（七千十九）

▽

（七千二十）

▽

（七千二十一）

▽

（七千二十二）

▽

（七千二十三）

▽

（七千二十四）

▽

（七千二十五）

▽

（七千二十六）

▽

（七千二十七）

▽

（七千二十八）

▽

（七千二十九）

▽

（七千三十）

▽

（七千三十一）

▽

（七千三十二）

▽

（七千三十三）

▽

（七千三十四）

▽

（七千三十五）

▽

（七千三十六）

▽

（七千三十七）

▽

（七千三十八）

▽

（七千三十九）

▽

（七千四十）

▽

（七千四十一）

▽

（七千四十二）

▽

（七千四十三）

▽

（七千四十四）

▽

（七千四十五）

▽

（七千四十六）

▽

（七千四十七）

▽

（七千四十八）

▽

（七千四十九）

▽

（七千五十）

▽

（七千五十一）

▽

（七千五十二）

▽

（七千五十三）

▽

（七千五十四）

▽

（七千五十五）

▽

（七千五十六）

▽

（七千五十七）

▽

（七千五十八）

▽

（七千五十九）

▽

（七千六十）

▽

（七千六十一）

▽

（七千六十二）

▽

（七千六十三）

▽

（七千六十四）

▽

（七千六十五）

▽

（七千六十六）

▽

（七千六十七）

▽

（七千六十八）

▽

（七千六十九）

▽

（七千七十）

▽

（七千七十一）

▽

（七千七十二）

▽

（七千七十三）

▽

（七千七十四）

▽

（七千七十五）

▽

（七千七十六）

▽

（七千七十七）

▽

（七千七十八）

▽

（七千七十九）

▽

（七千八十）

▽

（七千八十一）

▽

（七千八十二）

▽

（七千八十三）

▽

（七千八十四）

▽

（七千八十五）

▽

（七千八十六）

▽

（七千八十七）

▽

（七千八十八）

▽

（七千八十九）

▽

（七千九十）

▽

（七千九十一）

▽

（七千九十二）

▽

（七千九十三）

▽

（七千九十四）

▽

（七千九十五）

▽

（七千九十六）

▽

（七千九十七）

▽

（七千九十八）

▽

（七千九十九）

▽

（八千）

▽

（八千一）

▽

（八千二）

▽

（八千三）

▽

（八千四）

▽

（八千五）

▽

（八千六）

▽

（八千七）

▽

（八千八）

▽

（八千九）

▽

（八千十）

▽

（八千十一）

▽

（八千十二）

▽

（八千十三）

▽

（八千十四）

▽

（八千十五）

▽

（八千十六）

▽

（八千十七）

▽

（八千十八）

▽

（八千十九）

▽

（八千二十）

▽

（八千二十一）

▽

（八千二十二）

▽

（八千二十三）

▽

（八千二十四）

▽

（八千二十五）

▽

（八千二十六）

▽

（八千二十七）

▽

（八千二十八）

▽

（八千二十九）

▽

（八千三十）

▽

（八千三十一）

▽

（八千三十二）

▽

（八千三十三）

▽

（八千三十四）

▽

（八千三十五）

▽

（八千三十六）

▽

（八千三十七）

▽

（八千三十八）

▽

（八千三十九）

▽

（八千四十）

▽

（八千四十一）

▽

（八千四十二）

▽

（八千四十三）

▽

（八千四十四）

▽

（八千四十五）

▽

（八千四十六）

▽

（八千四十七）

▽

（八千四十八）

▽

（八千四十九）

▽

（八千五十）

諒闇中に付き年賀缺禮

桑港の部

山崎平作
山本初太郎
綱野太
藤田良造
藤田祐信
福原角太郎（スタクトン街一二五二）
後藤治一郎
ハリス洋服洗染所
橋本義人
花木信吉
原常助
半田精一
久島好光（ハイド街一五〇九）
人見藤右衛門（喪中に付年賀欠禮）
秀川元彦
廣瀬孫太郎
井浦惠喜藏
井浦守次郎
飯田俊彦（ワシントン街二九八六）
岩橋進
岩城久吉
川島宇市（メーソン洋服洗染所）
小林由藏（ポスト街八一二）
小池專作
小林藤平（パシフィック街九三九）
小西正勝
高一郎（ポスト街洋服洗染所）
近藤宗助（ラーキン街一六〇四）
栗田秀吉
水取德松（サクラメント街三〇八五）
道田彌市

橫山辰市
濱崎澤一（旭ホテル）
三原床
萬木喜三郎
森長市（ポスト湯）
るびす湯及床（片山）
橋岡俊一
林かつ子
西岡光太
森內庫太郎
溝之佐市
中村松太郎（ルイス洋服洗染所）
中野淺吉（諒闇中に付年賀欠禮）
中田忠左衛門（ポーク街一八一五）
長野乙作（東京洋服洗染所）
仁田坂豐太
荻吉三郎
佐野幸吉
佐藤友平（コロンバス洋服洗染所）
笹島滋
瀨尾定六
重住杏之助
仰木又助
須田ちか
田邊助一
田ノ上源右衛門
鈴木俊三（サター街八八一）
竹歲百藏
田所耕
田中小十郎
戶田國續
有働常次郎（スタニアン洋洗所）
梅窪正樹
若松丈吉
吉田初藏
吉岡彥一（フォルソム街七〇五）

木下房市（名古屋ホテル）
小松賢（ガーフィ・アパートメント）
森下平三郎
南部千代太郎（南部ホテル）
末永勇吉（ステート・ホテル）
進實正（薩州館）
汐崎善之助
王城龜（富士ホテル）
田村寅吉（ニュー・パシフィック・ホテル）
田村信吉（田村ホテル）
東京ホテル（スタクトン街一一一六）
宇佐美源次郎（ミカド・ホテル）
職員一同（旭洗濯所）
職員一同（キヤリフオルニヤ洗濯所）
職員一同（コロンバス洗濯所）
久保川良知
久保川廣
外職員一同
職員一同（ゴールデン・ルール洗濯所）
職員一同（マーキュリー洗濯所）
職員一同（パシフイック洗濯所）
衣鳩新太郎（オーション洗濯所）
塚本松之助（ピープルス洗濯所）
職員一同（パイン街洗濯所）
職員一同（スターライト洗濯所）
職員一同（ウエスタン洗濯所）

山崎床並に玉場
上田基吉（上田床）
富士湯（スタクトン街一一二二）
菊の湯 筧龜四郎
西谷嘉一（みなと湯）
田伏菊之助
大正湯（パイン街五三八）
宇井邦造（東京湯）
河村吾市（河村玉場）
共同花店
奧林甚二郎
大石德太郎
大石米太郎
アルバーツ花店
吉田操
堂本切花店
榎本定楠
本多花店
井上花店

榮正一郎
迫平久吉（大正床）
矢部床
山中床
渡邊槌二
渡邊薰（都堂製菓所 琴師匠〔生田流〕）
松永茂（堀桂庵）
森下桂庵（フイルモア街二二三八）
細井刺繍店
磯江刺繍店
楠守信
濱野政吉
石田大造
八木勇熊（執工店）
肥後利助
佐伯重秋
谷田部爲次郎
白石安吉
的野音吉
中島鎌太郎
石井樂三
村上淺次郎
藤本運送店

鈴木床
橫濱床（岡本）
太多和藤吉
都床（セントアネ街）
桑港切花卸商
植松忠治（加州花卉市場）
村瀨初代（村瀨裁縫研究所）
合田千春（中村裁縫學校）
小幡繁子（小幡裁縫女學校）
猪野哲雄（金門貸自動車 電話フイルモーア二五五七）
弓矢竹虎
吉村德輔
井上三吉
伊藤常二
田中十男
相澤美代志（相澤代理事務所）
山形莫越
今井定四郎
川口勘九郎（サター街一七五二）
芦澤寫眞館（美術）
中原利晴
吉澤商店（グランド街）
保田安之助
米神印刷所
麻生山藏
萩原五郎

マリナ切花裝飾店（チエスナツツ街二一九五）
永田茂（電話 ウーナツツ 四四八二）
太田宗一
露木武雄
的井宅治
藤岡佐七郎
井村坂之助
木下東洋（うすどみ內）
スター花店（ポスト街一八一一）
佐藤源太郎
日本茶寮
金門公園
謹而諒闇の新年を迎ふ

中井佐市
中嶋謙喜知
村上商會（グリー街）
木林武二（食料品行商）
齊藤廣次（齊藤商店）
美濃部弘
富士商會（兄弟）
水原菊猪
星野甘堂（美術品裝飾）
自動車修繕所（デヨーデ・ツー・ツード ビージーグラージ內）
鈴木商會（タイヤー）
出野順造（小林商店支店）
飯田榮藏
玉井茂一（ポスト街一五五四）

御大喪に付き年賀の禮を廢す
安井惠喜太

謹迎新年
蜂谷商店
サウスパーク街
正月元旦

中川登志雄
藤井八郎（中川商品館）
井上琴治
井上晉（井上商會）
土井口祐二郎（運送業）

諒闇中に付年始の禮を缺き申候

高等御料理
宇ぜん
てる子
美知子
さと子
板前木下東洋

諒闇中に付年始の禮を缺き申候

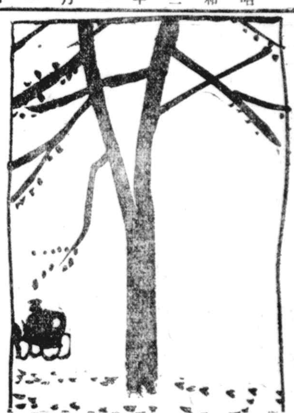
菊川亭
グリー街一六一〇
電話ウエスト六四二五
主人 菊川甚之助
はる子、はな子
とし子、しも

諒闇中に付年始の禮を缺き申候

みどり亭
桑港ブキヤナン街一八六八
電話 ウオルナツツ 四二二九
杉本嘉一郎
深雪 お榮 さか枝
靜枝 一惠

諒闇中に付年始の禮を缺き申候

うづまき
グラント街五一〇
電話 ダグラス 二八一〇
主人 大川乙作
るり子、繁子、みや
三四、きよ女



米國本年度の景氣如何？

前半季は不振なるべし 後半季は良好はならんか

桑港日本人商業會議所書記長　渡邊久克

○昨年前半季の不振に苦しんだ米國經濟界はせめては後半季に於いて幾分の恢復あらん事を豫期して居たにも係はらず後半期は却て棉花の大暴落に遇つて全く豫期を裏切られて了つた。不振續きを引き受て來た本年度の米國經濟界の景況如何、毎年の例に随つて聊か臆測を開陳して新年の辭に替へる事とする。

○米國の經濟界は正に數年來不振である。然し其意味は一九一九——二〇年頃の様な上景氣ではないと云ふに過ぎずして若しも之れを歐洲諸國や日本などに比較すれば雲泥の差で此の意味に於いては米國は世界中一番景氣の好い國である。世界の金の半以上を掩有して而も尚毎年列國に對して十億弗以上の貸付を敢てし、貸金は殖ゆる一方、利息收入は増加して來る、製造工業は日一日と進歩し、農産物は生産過剩に困るといふ國である。此位景氣の好い國は世界中外にはない。否人間歴史始まつて以來、此様な幸福な國があつた事がない。從つて米國經濟界の不振と云ふ意味は單に米國内に於いてのみの比較的の考察に過ぎずして日本流の不景氣を意味するのではない。

○昨年の經濟界に最も不良の影響を與へたのは初期に於ける東中、北部に於ける氣候の不順、之に基する穀作の不良で、更に後半季に於ける棉花の暴落に依りて一層甚だしき痛撃を加へられた。久しい間の不振續きの爲め製造工業家は消極政策に傾いて了つて何れの品も單に辛ふじて註文丈けを充たすに止め、卸商小賣商は殆ど其日暮しの様な狀態に居た。斯様な不安狀態にあつたから銀行預金は益々増加するにも係はらず、投資熱は愈々收縮して流石旺盛であつた建築界も紐育と桑港とを除いてはメツキリと寂れて了つた。而も賦拂勘定の掛賣高は益々膨脹し、疾くに五十億弗を突破して今日では恐らく六七十億弗にも上つて居る事であらう。其の結果は集金の不良となり、後半季、殊に節季つまつた頃には誰も彼れも集金難を嘆ずるに至つた。

米國經濟界の簡易なバロメーターである米全國の手形交換高を見るに

▲一月より六月迄

年	千弗
一九二五	二四七、八九九、三〇六
一九二六	二六二、一五二、〇四

▲六月より十一月迄

年	千弗
一九二五	二〇八、一八二、四五
一九二六	二〇六、二九五、二三

即ち前半季は昨年度に比し百五十億弗の増加なりしも後半季五ケ月間は昨年同期より二十億弗の減少を見た。米國では實際上手形の交換高は前年度と同程度の景氣ならば大抵一割前後の増加を示すのが常例であるにも係はらず斯く減少したのは餘程不振であつたものと見ねばならない。

破産數に於いても相當不良の證跡を殘してゐる。即ち十一ケ月分の比較に於いて

▲破産數

一九二五年	一七、二三一件
一九二六年	一八、〇四二件

▲同負債額

	千弗
一九二五年	四三六、五二八
一九二六年	五六〇、〇二二

貿易も亦不良で輸出減少、輸入増加を示した

▲輸出（十ケ月分）

	千弗
一九二五年	三、九九三、七三八
一九二六年	三、八六三、九九〇

▲輸入

一九二五年	三、四五三、五一八
一九二六年	三、六九九、一七六

○米國は金の有り餘る程ある國である。然し矢張り有る處には有るけれども無い處には無いのが金である。金を貯めてゐる者は貯まればたまる程遣はない。金を惜げもなく費消する人間に澤山金を持たさなければ金廻りは好くならぬ。銀行家や金滿家がイクラ金を持つて居ても投資して呉れなければ結局無いのと同一である。儲かつた時に最も大膽に惜氣もなく金を費ふのは百姓か漁業家である。米國はまだ農業國である。農業家に金を持たせば必ず品物は動き出て金廻りがよくなる。即ち農産物の豊凶、其相塲の高落に依りて經濟界は最も多く左右せらるゝのである。昨年度不振の原因の大部分が農産物にあつた、從つて本年度の景況如何も亦農産物の如何に掛つて居るものと見て大過なからう。而して將來に於ける農産物の豊凶、相塲の上下は要するに謎で、神でなければわからない。若しも本年度の農産物が當れば元來が金か有り餘りて居て底力の十分にある米國であるから一擧に大好景氣が現出するであらう。從つて吾等の最も銳敏に熱心に注意せなければならぬのは農業狀態である。余は深い理論的の根據は有してはゐないが何だか本年は百姓が當る年であるやうな直覺的の感じを抱いて居る。

○一昨年經濟界の禍根と認められて來た賦拂勘定、即ち割拂ひ掛賣高は當業者が警戒に警戒を加へつゝあつたにも係はらず一向減少せないで却て増加しつゝある模様である。然し乍ら病氣も慢性となれば左程急に驚く程の變化の甚ひとはならないやうに長い間の習慣と經驗との結果今日では此禍根も自然的に按配せられて甚だしく其の害は認められないやうに一般に觀察せらるゝに至つた。此禍根か現狀の儘で惡化せず自然的にアツヂヤストせられて行く國民が凡そ買ひ度い丈けの物を買ひ盡くし得た曉が來れば其餘力は則ち他方面へ迸り出でゝ、或は茲に經濟界の一大ブームを生じ珍しい好景氣を呈するに至るかも知れぬ。從つて今日の亂暴な賦拂勘定の膨脹は今は苦るしいが他日好況を齎す一原因として必ずしも悲觀するには及ばない。

○建築界の不況は正に爭はれない事實である。今一昨年と昨年との米全國の建築許可數を基礎とする價格比較を見るに

一月より十月迄十ケ月間

年	弗
一九二五	三、二七二、五六〇
一九二六	三、〇九三、七〇五

則ち二億二千萬弗からの減少である。然し米國の建築界は戰後極端な旺盛を極はめ過ぎた感がある。古い物をばドシ／＼と打壞して思切り新しいものを無闇矢鱈に建てすぎて今日では一通り建てるべきものは建て盡したやうな觀があつて一先づ峠を下らざるを得ざる時機に達してるやうに思はれる。從つて建築界の不況は必ずしも不景氣の證左とはならない。建築界に投ぜられた資本は今後方面を轉換して他の方面へ投資せらるゝであらう。建築界の不況に引き替て自動車の製造高は十一ケ月間の比較に於て

年	千弗
一九二五	三、〇八九、一五三
一九二六	三、四〇七、四一一

則ち三億一千六百萬弗からの増加である。是則ち米國經濟界は尚餘裕綽々たるものがある證左で資本家は確實な投資の需要を競ふて追求しつゝあるのである。

○税金は年毎に減少せられ、外國よりの利息收入は年々増加し國民の貯蓄は日々に増加し行くのみで、農業、製造工業等何れも、少し油斷すれば忽ち生産過剩となるといふのが米國の現狀である。或ひは本年も昨年度より引續いての不振を受け前半季は餘香んばしくないものと覺悟せねばならぬかも知れぬ。殊に棉花暴落の影響は尚之より各方面へ波及すべきが故に勿論その覺悟で警戒を要する。が、然し若し幸にして農産物が順調に行り、タトヘ餘り多くは望む事は出來ないにしても大體に於て後半季は相當好景氣を呈するものと豫期して差支ないであらうと余は信ずるものである。

日本人農家は加州に止まつて

子女を教養すべきである

松岡亮作

日系市民に對して如何なる方針を執らしむるかの問題に對して、私は躊躇する事なく農を執れと云ふのである。この方針は獨り日系市民にのみに限つた事ではなく如何なる國、如何なる人種に對しても一様にこの議論を押す事が出來ると思ふ。

▽人類に農が必要であると云ふ事は今更改めて説明する必要はないが、然し第二世及び日本人が何處の地をトして農業を爲すべきかは研究しなくてはならぬ問題である。これに對しては加州が第一の農業地であると結論したいのである。

▽『加州には外人土地法が制定せられ日本人の農業は嚴重に禁止せられてあるにも拘らず、何故に加州が他の州よりもよいのであるか』との疑問は當然起るべきであるが、然し日本人と雖も現行法下に於て或る程度迄は合法的に農業をなし得るのである。況んや日系市民が農をなすに何の故障がある！茲數年後には斯き問題は跡形もなく消え失せるのである。

▽また加州を農業的價値から研究して見ても加州の如き農業的天惠の地を他に見出す事は困難である、恐らく米國廣しと雖も斯の如く美しき天地は他にはあるまい。確に農業的カナンの地である。例へば土質及び温度の點につきては或は他に加州と同様なる處を發見する事が出來得たとしても水利と日照時間の點につきては他に類がない。

▽元來農作物には土質及び温度以外に日照時間と水とが必要なる事は何人も熟知の事である。然るに水の多き處は從つて降雨ありて日照時間甚だ短く、日照時間長き處は降雨少く沙漠の如きであつて、日と水とは反比例するのが常である。然るに加州は二百八十日以上の日照時間を有し無霜期間甚だ長く、水はシーラネバダ山頂に一ケ年中を通して充分に使用し得る積雪を有し、これより水は流れ／＼て北はサクラメント河となりてサクラメント平原を灌し、南はサンオーキン河となりてサンオーキン平原を濕し、恰もこれ等の平原は温室の如く、シラネバダ山頂の雪は溜水の如く、サクラメント河とサンオーキン河とは水を温室に導く鐵管の如く、眞に加州の平原は自然的大温室である。他に斯る天惠の地は無い。

▽『然らば更に飛躍して南米或は墨國の地をトして殖民しては如何？』との考ねも起る。然し南米或は墨國に對する殖民事業は加州日本人特に農業家の仕事ではない、これは日本の日本人に對する問題である。人口過剩の日本人をあのよき地のよき處をトして移住殖民せしめ以て一大天地を開拓せしめんとするにはよき地である、然し加州日本人農業家を導きてあの地に移住せしむる處ではない。

▽『加州の日本人農業家は今後日本より來る事の出來ぬこの天惠の地、加州に根を深く下して千年の計を樹てよと送られたる選民である』特に日系市民はこの地に生れたる地の繼子である、米國の土になる事は當然である。

▽聞く處によれば日系市民の多數は農を嫌ふと、然しこれは必ずしも日系市民のみの特有性ではない、世界人特に所謂現代人の一般は皆農を嫌ふ傾向がある。然るに幸なる哉日系市民中眞面目なるものは決して田園生活を嫌はぬ、現代人の嫌ふ所謂土百姓になつて名實共に深く／＼根柢を農の上に築き上げつゝあるを見る、實に愉快である。更に日系市民に田園生活向上の意氣を鼓吹すべきであると思ふ。

▽然るに茲に一つ悲しむべき現象がある『それは日系市民の本性が田園生活を嫌ふ事である』日系市民の男性が田園に入りて民族的發展の基礎を築き上げんとするも若し女性がこれに從伴せざる時は、事失敗に終るのである。これ重大なる問題の一つであると信ずる。

▽この傾向は米國社會の輕薄なる風潮の感化を受けたると同時に日系市民の將來に對する自覺の無きためならんと推測せらるゝも兎に角重大なる問題なるが故に日系市民の男子に田園生活の必要をその興味を與ふると同時に女性に對して一大運動をなすの必要なる事を切實に感ずるものである。

光陰を無駄にするな

年頭に當り其感を强うす

郵船桑港支店長　山本武雄

甚だ陳腐な言葉であるが一年の計は元日にありといふ以上所感なかるべからずであるが元日のめ所感はまた格別でなくてはならぬ、なぜなれば地球は太陽の周圍を常さに一回轉して新なる年を齎らしたからである言ひ換へれば吾人は一つ年を加へたわけで苟くも人間に生命あるかぎり年を加へるといふことはきはめて貴重なことである。

×古人は吾人に光陰矢の如しと無駄にすべからざるを敎へたことも畢竟人生かぎりあり年の貴重なるを移り行く時々刻々の光陰を解剖していつた迄だ否解剖したのではない、事實光陰の貴重さをそのまゝ體驗しての結果である。

×今でこそ文化の御蔭で晝夜同様に大抵の仕事はできるから光陰といふ觀念は非常に薄い、從つて私初め年を分解して光陰だなどといふけれども之れはむしろ本末を轉倒してゐるのだ、さればこそ斯る自明の理をながらも年頭に際して考へるのである。

×水上を汽船で陸上を自動車、汽車、空中を飛行機で走るのもみな光陰を惜むの結果にして夜間燈火を用ふるのも夫れがためである而して之等は一見光陰を延長せしめしかの感あれども私は斷じて然らずといふ。もしありとするもそは相對的のことで決して絕對的でない果して然らば光陰の絕對的延長とは何ぞ私はいふ惜むの一言で盡く、言ひ換へれば光陰を惜めば惜むだけその絕對的價値を享有し得る更に換言すれば惜みし一年とは長短自ら異り之れを人間一生に換算せば猶更その差を増す。

×一年三百六十五日毎日十分を惜めば六十一時間を延長し同時に一年は三百六十七日と十三時間となり、五十年に積もれば、約百二十七日を延長す、十分なして斯くの如く、之を三十分とせば、一年以上を延長す併も日々三十分の節約は少しく留意せば茶飯事なり

×曾てデイライトセイヴイングなる言葉が各國に流行し標準時と異なる時計を用ひて光陰の節約を計らんとしたり、但し實行するに至らざりしと雖も動もすれば、文化の恩澤に慣れすぎ、光陰の貴重さを忘れんとする吾人に警告を與へたるだけにても蓋し其功績偉大なりと云ふべし

×私は屋外の運動を嗜好するが就中魚釣りを最も好み、渡米以來殆ど日曜を缺かさない。それで朝大抵二時三時に起床し或は前夜より出掛けて完全にデイライトをセーヴし、日の出後は自分の影坊子が水面に移動するのを見て光陰流水の如しを體驗し寸陰をも無駄にせざらん事を努む、豈釣のみならんやと思ふ事極めて切なるのみ（談）

諒闇中に付
年始の禮を缺く
桑港の部

米北佛教團本部
桑港佛教會
佐々木芳照
楠原龍誓
高橋覺惠
沼波義貫
太田敏夫

第一レフオームド教會
牧師　幸田宗平
教會員一同

桑港聖公會
牧師及び
會員一同

シスター幼稚園

日本人キリスト教青年會
富澤清
沼尻長十郎
木庭道雄

金門學園
鈴木孝志
瀧口啓次郎
金子峰子
具志堅政實
河合長子
瀧口ヒサノ

日本人基督教會
泰庄吉
教會員一同

美以教會
津田彌三郎
佐々木養之助
美以青年會

寺澤教館
寺澤久吉

日本英學會
山川俊三

田守治療院
田守吉弘

醫學博士
劉日初

加大醫學士
原田正専

グラー汽船會社
上山三藏

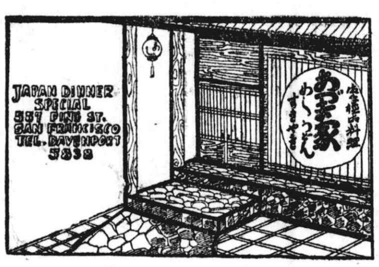
東洋美術商會
▼本店　桑港ミツシヨン街二七三三
▼支店　桑港フイルモア街一四四〇
森田新次郎
外店員一同

富士運送店
桑港ブキヤナン街一六二九
藤井半次郎
外店員一同

諒闇中につき年始の禮を缺く
輸入商
パシフ井ツクドライグーズ商會
桑港グラント街四三四
四四〇
店員一同

諒闇中につき年賀の禮を缺く
美術雑貨商
桑港グラント街五一二
電話ダグラス五五五〇
曲尾兄弟商會

諒闇中に付年始の禮を缺く
すき燒
高等御食事
あづまや
パイン街五五七
電話ダベンポート五八三八



諒闇中に付き年始の禮を廢し申候
高等御食事
萬
桑港グラント街五四六
電話ダグラス五三三六
栗田

米國の農業問題

瀧本爲三

米國の農業問題は久しい間の懸案であつて、其の解決は誠に容易ならぬものである。過去數十年間政府は種々の方面に於け農民の保護援助の方法を講じたのであるが一問題を解決すれば他の問題が發生する云ふ次第で、根本的の解決は殆ど不可能であるが如き觀を呈して居る。

米國の農民は生存上關係者の地位にあり乍ら云ふ事が出來るのである、商人の暴利を制する爲めに有効な法律は零細な取締法であるが農業に從事する法律は農民保護援助を目的として居る點に照らし、米國の農民は生存上關係者の地位に抗して生産從事することの出來ないのである。

シャーマン、アンチ、トラストローがあるが農業者に對しては何ら制限を加へず、寧ろ其の結束を援助する協同販賣組合法の如きがあり、其の過剰生産物を政府が處分してやらねばなるまいと云ふ奥論すら昇まつて居る位だ、現在米國で農業に從事する國人は云はゞ人間の屑で、農業以外の他の産業に生活を試むる能率のない人間が大多數を占めて居る、一例を擧げて云へば假りに今年、ピーチの市價が良好であるとせば直にピーチを植つくる位單純な頭の所有者である、加州なる地に於て、而して其の結果農民に對する租稅の輕減さなり、農業協同販賣組合法の制定、農作物輸出産業に在りては勞銀の增加は農作物市價の下落も同樣に致命的である。

△飼ひ物　マッチ箱、ビール箱、石油箱類ならんでもよく箱を横にして前面に五分目かゝる三分目の網を張り、出來るならば以上述ぶるが如き打擊を緩和する穴をところ〳〵に穿ち、藁を敷いて寳力に乏しいものは片端から飼はいゝ。

△飼料　このくらゐ簡單なものはない。穀類、おから、番茶、ぬか、ぬか、あんかす、豆かすで結構だが、好物は干草、野菜もいゝが水氣の多いのは避けねばならぬ。

△飼ひ場所　軒下、庭先、或ち程度に減じなくては全體の農業者は浮ぶ瀬がないのである。

△種類　今年は卯年、卯ち兎の年である、そこで此年に因んで養兎を左に紹介して見やう。

△繁殖　飼る旺盛でかりに一番を飼ふとする三四ケ月で親になり、一年に少くとも五回多ければ十回くらゐ身ごもり、一回に多ければ七八匹づつ産む、從つて一年後には、完全に行つて百匹近くの大家族となる。

△販路　昔ならいざ知らず、今日では肉は四洋料理店に引つ張り凧で毛はマント襟卷、クッションに他の獸皮の代用してゐる事實を認め、其だ心强く感ずるのである。千九百卅年末農務省の報告する所によれば、常時の組合員の總數は二十五年末農務省の組合員の總數に比べて二十七萬人に達し、二十四億五千萬人の增加を見たと云ふ。

農業者が生産價値の分配上關結の力によらなくては、此の政策はこゝに說明するまでもない事柄で、農務省の報告書に示さるゝ通り戰後は租稅をはじめ、農業者の負擔は最近、クーリッヂ大統領の時代に比べて大體三割減じ或は農作物出荷の便を增し、自分は昨年末新年の紙上において其必要を力說したのである。

米國の農業の現狀に照らし益々その必要を感ずるのである。何れ機會を得ないのであるが、米國の農業問題を關聯して、加州農業問題を中心として見たいと思ふ。

兎の年の養兎

手輕で金儲け

趣味と副業

今年は卯年、卯ち兎の年である、そこで此年に因んで養兎を左に紹介して見やう。

△種類　兎には肉用、毛皮用、愛玩用と大體三つに分れる。

△カンペンシルバー、ペベリン　肉毛兼用できれも飼ひいゝものである。

△ジャパン、イングリッシュ　肉用、毛皮用、ヒマラヤン、ブラックエンドタン、ハバナ、白色改良、白色改良、ルバデアン、フレミッシュ　肉用專門か、肉毛兼用か、肉毛兼用か、適當、ルバデアン、フレミッシュは肉用、愛玩用と大體三つに分れる。

△繁殖　飼る旺盛でかりに一番を飼ふとする三四ケ月で親になり、一年に少くとも五回多ければ十回くらゐ身ごもり、一回に多ければ七八匹づつ産む、從つて一年後には、完全に行つて百匹近くの大家族となる。

△販路　昔ならいざ知らず、今日では肉は四洋料理店に引つ張り凧で毛はマント襟卷、クッションに他の獸皮の代用してゐる

謹迎新年

一月元旦

日本ドライグーズ商會

社員一同

桑港フロント街一〇〇

謹迎新年

一月元旦

須川政次郎

社員一同

ホーム洗染株式會社

桑港ワシントン街九〇九—九一一

【電話】カネー三壹九〇

恭迎新年

一月元旦

桑港日本人食料品卸商組合

〔ABC順〕

中央貿易株式會社

波多江商會

石光商店

陰山商會

共同消費會社

日本商會

北米貿易株式會社

東洋貿易株式會社

太平洋貿易株式會社

日本文壇の諸作家の印象

翁生　六溪

大正十五年六月から、私は大阪の本社から、東京へ廻された。そしてやる仕事が主として文壇、劇壇、評壇方面に交渉のある仕事であるために、その方面の人達と逢つたり交通したりせねばならぬ立場にあつた。そして、それらの人達と逢つたいろんな印象を書くのも、在米同胞諸君には珍しい思ふので、書くのである。日米紙へも久しく御無沙汰してゐたから、新年號に間に合ふやうにと思つて走り書きを奏したのか賣だして大阪毎日、東京日々に長篇もの、國民新聞にも長篇もの、その他新聞に揚げられた『第二の接吻』なんか一回か六十回である、それが百回も續く。すると出版屋へ二萬圓位で賣る。三つの活動寫眞會社では映畫にする。脚色して芝居にする。それらの興行料も大したものである。一つ小說書いても忽ち十萬圓位のところへゆくいふ運命に惠まれた菊池寬は酒とビールとウイスキーをちは、曾ては有島武郎の家であつたものである。今は貧乏書生であつた人が、新内の流しが、下で哀れなつた貧乏人たちの邸宅に傳へて、そちあがり、ポケットの中にある金をつかみだし、つかみだして門前には『初會の人々は面會いたしません、用事のある方は事務所へ傳へて下さい』といふ張紙をしてある。原稿をもつてゐる。新内の三味はそれきり駄目である。所謂お百度。週刊誌の新年號の原稿がほしいのに、いつまでもこないから、その前に打ちあはせしておいたから直に應接室に通された。十五分位またされる。隣の部屋で將棋をさしてゐるのである。勝負がついたらしいので、醜男の菊池寬がのそ〳〵でてくる。いろんな話の後に用件を頼のむと

「書かう。併し、もう小說は駄目だ。みんな書きつくして了つたからな」

と笑ふ。ぢや何でもいいといふと貧乏文を書かうといふ、それで澤山別れる際に、いつ頃できますか？ときくと、いつでも書くといふ。ぢや月末までに。よろしい。

ところが月末に電報うつても特別配達をだしても駄目だ。かけつけゆくと不在だ。三度も不在だ。四度目にゆくと相變らず隣室でばち〳〵將棋をうつてる。まつてると出てくる。編輯に間にあはぬので困つてると訴へる。ぢやあす午前中に書かう。そこへ知りあひの醜がきた。將棋の話しがでる。ぢやあ一番やるかい？、やらうつてんで將棋部屋にゆく。勿論貧乏だ。しかし將棋をやるといふだけで文藝春秋社が存在をなさめたやうな雰囲気で、入口の二疊のところで、入口の二疊のところで、入口の二疊のものゝ大衆文藝誌の編輯者からまきまきすわつて御用は？ときくと、入れさいへば入つてくる。入れさいへば入つてくる。一時間位話しこんで、いろ〳〵の編輯者で、おさまり返つて威張なを話また、自分のいろ〳〵の經驗談でもしやうとおもつて泣きもする、かみつきもする。ある冬の晩だつた。丁度、行つた夜は雪が降つてゐた。四疊半の瀟洒中にこたつをおいて、絹蒲團布をかけて、三人が酒をのみながらいろんな話に耽つたものである。障子をあけると庭に柵がかつて、降つたばかりの雪が庭を眞白くしてゐる。何ともいへない氣分だ。二つ杉の銀屏風には北原白秋の歌が書かれてゐる。床には夏目漱石の南畫がかつてゐる。七時頃から十二時ごろまでのんでゐると二人は可なり酔つ拂つてきた。「寢ていき玉へ、何遠慮は入らぬ」

と床をだして、三人はその床の中で雑魚寝をしたものである。三人といふのは、もう一人はスタクトンになつた佐伯卓造なので、ある彼は三重吉と小學時代の友達であつた。この目から鼻にぬける佐伯卓造さ、センチメンタルな三重吉さは竹馬の友らしい我儘な同郷の言葉で話す中は私が文學的に色さるのである。三重吉は愉快な晩だ、面白い一夜だといつて卓造に接吻したりして泣くのだ。それから二三回、感情のうるはしい人で藝術家としての菊池寬はもはや過去の人となり、事業家として出現してからの日本の文壇は、この好運兒いや苦闘兒を目がけて、他日の成功の目標としてゐる多數の文學青年が輩出した。よつと一枚の原稿を書いても安くて十圓である。あるものは三十圓から五十圓である。つまらない小說でもあつたが朝日新聞に揚げられた『第二の接吻』なんか一回か六十回である、それが百回も續く。すると出版屋へ二萬圓位で賣る。三つの活動寫眞會社では映畫にする。脚色して芝居にする。それらの興行料も大したものである。一つ小說書いても忽ち十萬圓位のところへゆくいふ運命に惠まれた菊池寬は酒とビールとウイスキーをちは、曾ては有島武郎の家であつたものである。今は貧乏書生であつた人が、新内の流しが、下で哀れなつた貧乏人たちの邸宅に傳へて、そちあがり、ポケットの中にある金をつかみだし、つかみだして門前には『初會の人々は面會いたしません、用事のある方は事務所へ傳へて下さい』といふ張紙をしてある。原稿をもつてゐる。新内の三味はそれきり駄目である。所謂お百度。週刊誌の新年號の原稿がほしいのに、いつまでもこないから、その前に打ちあはせしておいたから直に應接室に通された。十五分位またされる。隣の部屋で將棋をさしてゐるのである。勝負がついたらしいので、醜男の菊池寬がのそ〳〵でてくる。いろんな話の後に用件を頼のむと

「書かう。併し、もう小說は駄目だ。みんな書きつくして了つたからな」

と笑ふ。ぢや何でもいいといふと貧乏文を書かうといふ、それで澤山別れる際に、いつ頃できますか？ときくと、いつでも書くといふ。ぢや月末までに。よろしい。

ところが月末に電報うつても特別配達をだしても駄目だ。かけつけゆくと不在だ。三度も不在だ。四度目にゆくと相變らず隣室でばち〳〵將棋をうつてる。まつてると出てくる。編輯に間にあはぬので困つてると訴へる。ぢやあす午前中に書かう。そこへ知りあひの醜がきた。將棋の話しがでる。ぢやあ一番やるかい？、やらうつてんで將棋部屋にゆく。勿論貧乏だ。しかし將棋をやるといふだけで文藝春秋社が存在をなさめたやうな雰囲気で、入口の二疊のところで、入口の二疊のものゝ大衆文藝誌の編輯者からまきまきすわつて御用は？ときくと、入れさいへば入つてくる。入れさいへば入つてくる。一時間位話しこんで、いろ〳〵の編輯者で、おさまり返つて威張なを話また、自分のいろ〳〵の經驗談でもしやうとおもつて泣きもする、かみつきもする。ある冬の晩だつた。丁度、行つた夜は雪が降つてゐた。四疊半の瀟洒中にこたつをおいて、絹蒲團布をかけて、三人が酒をのみながらいろんな話に耽つたものである。障子をあけると庭に柵がかつて、降つたばかりの雪が庭を眞白くしてゐる。何ともいへない氣分だ。二つ杉の銀屏風には北原白秋の歌が書かれてゐる。床には夏目漱石の南畫がかつてゐる。七時頃から十二時ごろまでのんでゐると二人は可なり酔つ拂つてきた。「寢ていき玉へ、何遠慮は入らぬ」

と床をだして、三人はその床の中で雑魚寝をしたものである。三人といふのは、もう一人はスタクトンになつた佐伯卓造なので、ある彼は三重吉と小學時代の友達であつた。この目から鼻にぬける佐伯卓造さ、センチメンタルな三重吉さは竹馬の友らしい我儘な同郷の言葉で話す中は私が文學的に色さるのである。三重吉は愉快な晩だ、面白い一夜だといつて卓造に接吻したりして泣くのだ。それから二三回、感情のうるはしい人で

藤村春樹といふ札があつた。夏が、食後秋聲順子の二人の妾はパーラーに殘らなかつた。そして白秋を中心に第二次會が開かれたのである。

鈴木三重吉

あの「がお〜」とか、「いら〜」とかいふ神經や感情の描寫に巧だつた「返らぬ日」や「小鳥の巣」の著者は今ではすつかり筆を抛つて雑誌『赤い鳥』の編輯者で、おさまり返つてゐる。酒がすきで、呑んだら談論風發、威情が高調に達するさ

藤村春樹といふ札があつた。夏が、食後秋聲順子の二人の妾はパーラーに殘らなかつた。そして白秋を中心に第二次會が開かれたのである。

鈴木三重吉

あの「がお〜」とか、「いら〜」とかいふ神經や感情の描寫に巧だつた「返らぬ日」や「小鳥の巣」の著者は今ではすつかり筆を抛つて雑誌『赤い鳥』の編輯者で、おさまり返つてゐる。酒がすきで、呑んだら談論風發、威情が高調に達するさ

三上於菟吉

「週刊朝日」に敵打月雙紙といふものゝ大衆文藝誌の編輯者からまきまきすわつて御用は？ときくと、入れさいへば入つてくる。入れさいへば入つてくる。一時間位話しこんで、いろ〳〵の編輯者で、おさまり返つて威張なを話また、自分のいろ〳〵の經驗談でもしやうとおもつて泣きもする、かみつきもする。ある冬の晩だつた。丁度、行つた夜は雪が降つてゐた。四疊半の瀟洒中にこたつをおいて、絹蒲團布をかけて、三人が酒をのみながらいろんな話に耽つたものである。障子をあけると庭に柵がかつて、降つたばかりの雪が庭を眞白くしてゐる。何ともいへない氣分だ。二つ杉の銀屏風には北原白秋の歌が書かれてゐる。床には夏目漱石の南畫がかつてゐる。七時頃から十二時ごろまでのんでゐると二人は可なり酔つ拂つてきた。「寢ていき玉へ、何遠慮は入らぬ」

と床をだして、三人はその床の中で雑魚寝をしたものである。三人といふのは、もう一人はスタクトンになつた佐伯卓造なので、ある彼は三重吉と小學時代の友達であつた。この目から鼻にぬける佐伯卓造さ、センチメンタルな三重吉さは竹馬の友らしい我儘な同郷の言葉で話す中は私が文學的に色さるのである。三重吉は愉快な晩だ、面白い一夜だといつて卓造に接吻したりして泣くのだ。それから二三回、感情のうるはしい人で

徳田秋聲

この人にも女流作家をすいせんしてくれさ頼みに行つたら、『行くが、ふさはしい人でないかもしれぬ』といふ。ぢや、山田順子さんのものでも、さいふと、ちよつさ皮肉られてもした人のやうにたゝつて、でも今、ちにゐる人だからな。さいふあいさつだつた。それでも是非遊びにゆかうさいふので出かけた。たしか夏だつた。肥つた眼鏡をかけた白髪の老人になつてゐる。「生」とか「髮」さか、「田舍教師」さかの作者だ。

「へゝ、そんなに長くアメリカにゐたのですか。いつ頃行つたのです」

「明治四十年です」

「ぢや、僕の『蒲團』のでた頃だね？」

「ゝゝ、あれは、あちらにゐて讀みました。大いに感動させられました。」

「移植樹」を一冊拵へて歸つた

田山花袋

花袋は日本人會にゐた時の山崎藤村が、松尾芭蕉を稱して田山花袋の向ひ家にゐた頃である。一度遊びにゆかうさいふので出かけた。たしか夏だつた。肥つた眼鏡をかけた白髪の老人になつてゐる。「生」とか「髮」さか、「田舍教師」さかの作者だ。

「へゝ、そんなに長くアメリカにゐたのですか。いつ頃行つたのです」

「明治四十年です」

「ぢや、僕の『蒲團』のでた頃だね？」

「ゝゝ、あれは、あちらにゐて讀みました。大いに感動させられました。」

「移植樹」を一冊拵へて歸つた

チャンピオンであつた老大家は、あの時代の青年達に與へた自分の影響なさを回想でもしてやうにちよつさ天井の方を仰いで調子でよつ拵ひ演說をはじめたものである。この「がお〜」とか、「いら〜」とかいふ神經や感情の描寫に巧だつた「返らぬ日」や「小鳥の巣」の著者は今ではすつかり筆を抛つて雑誌『赤い鳥』の編輯者で、おさまり返つてゐる。酒がすきで、呑んだら談論風發、威情が高調に達するさ泣きもする、かみつきもする。ある冬の晩だつた。丁度、行つた夜は雪が降つてゐた。四疊半の瀟洒中にこたつをおいて、絹蒲團布をかけて、三人が酒をのみながらいろんな話に耽つたものである。障子をあけると庭に柵がかつて、降つたばかりの雪が庭を眞白くしてゐる。何ともいへない氣分だ。二つ杉の銀屏風には北原白秋の歌が書かれてゐる。床には夏目漱石の南畫がかつてゐる。七時頃から十二時ごろまでのんでゐると二人は可なり酔つ拂つてきた。「寢ていき玉へ、何遠慮は入らぬ」

と床をだして、三人はその床の中で雑魚寝をしたものである。三人といふのは、もう一人はスタクトンになつた佐伯卓造なので、ある彼は三重吉と小學時代の友達であつた。この目から鼻にぬける佐伯卓造さ、センチメンタルな三重吉さは竹馬の友らしい我儘な同郷の言葉で話す中は私が文學的に色さるのである。三重吉は愉快な晩だ、面白い一夜だといつて卓造に接吻したりして泣くのだ。それから二三回、感情のうるはしい人で

諒闇中に付き
年賀缺禮
吾妻屋商店
梶浦政次郎
野中正生
安川秀雄

長商店
長はな
ブキヤナン街一八三六

寶上商店
和洋食料品、雑貨、玩具類卸小賣
ブキヤナン街一七〇七

金門商會
かまぼこ、鮮魚食料品
桑港ゲリー街一五二九

和洋食料品
クラムス商會
中井清次郎
店員一同
ポスト街一五八八

實質本位の店
OK食料店
木下勝太郎

和洋食料品雑貨
萬屋商店
勝浦直太郎
外店員一同

謹迎新年
桑港日本人旅館組合事務所
桑港マーケット街五四九

桑港日本人旅館組合
小川ホテル
帝國ホテル
ミカドホテル
加州館ホテル
防長旅館
田村旅館
紀の國屋旅館
永本旅館
日本ホテル
エビスホテル
南海屋旅館
近江屋旅館
熊本屋旅館
安藝ホテル
井木旅館
北米ホテル
昭和二年一月元旦

謹迎新年
昭和二年一月元旦
桑港ポスト街一七〇一
日米物産商會
店主　龍野鉦次郎
支配人　横澤直人
外店員一同

東京市四谷區舟町五十五番地
龍野歐米裁縫女學院

謹迎新年
鮮魚、肉類、食料品、かまぼこ製造
桑港ポスト街一七四七
桑港魚市場
村井喜一郎
岡島行雄
村井常太郎
村井義之助
星野信一
昭和二年一月元旦

闘ひ行く心

安曇穂明

新しく生行く心、それは闘ひの心である。善悪を超越した闘ひの心である。

△一口に云へば、人間の住む世の中位矛盾に充ち滿ちた物はない。正義と云ひ、平和と云ひ、道徳と云ひ、これを究めれば究める程矛盾に充ち滿ちて來るばかりである。そして究極する所道徳上最も避けねばならぬ人間の爭闘心が、却て行詰まつた人心を新たにし、我々をしてこの世の中に生甲斐を感ぜしめてゐる事である。

△試みに思へ。無抵抗主義を唱へたトルストイの如きは、或る意味に於て、最も大なる抵抗主義者ではなかつたか。更に、平和と正義とを地上に持來たし、そこに天國を築き上げんとしたキリストは、或る意味で亦最も大なる爭闘心の持主ではなかつたか。なる程それ等の聖者達は、形の上でこそ無抵抗主義の如くに見ゐるかも知れない。しかし、心に於ける爭闘心の彼れ等程烈しく燃へ立つた人達はなかつたであらう。不正義に對する、不道徳に對する、地上の平和を紊す者に對する怒りの心は、彼れ等に於て最高潮に達したのだ。

△世の中に平和を持ち來さんとするその心、それは既に烈々たる闘ひの心、叛逆の心を外にして宿る事の出來ぬ矛盾性を持つてゐる。形といふものを超越して観れば、闘ひを外にして新たなる平和はない。

△克己と云ふ事は心と心との闘ひを意味する。けれどもこれが一個人として治まつてゐれば問題はないが、必ずやこの心は對社會的のものとなつて來ずには置かない。それが、正義、若しくは道徳的信念に立脚してゐればゐる程、對社會的に闘ひの心、叛逆の心が熾烈になつて來るのだ。然も世の中に、その各自の立場に於て、不正義、不道徳の信念の下に生活してゐる者のない以上、闘ひの心は必ずや正義と正義、道徳的と道徳的とのものにならずにはゐないのだ。自分の方では、不正義、不道徳なるものに對して闘つてゐると思つても、向ふでもそれと同じやうな心持ちで、不正義不道徳なるものに對して闘つてゐると思つてゐるのだ。

△問題は茲にある。

△悪魔に對する闘ひの心の中に人間の救道が存在する。不正義に對する闘ひの心の中に人間の生き甲斐が存在する。これは云ふまでもなく自明の理である。

△併し、私の云はんとする所はそれのみに止まらず、あらゆる闘ひの心の中に人間の生る道が存在してゐると云ふ事であ。

△怖らく人間は闘ひの心がなかつたら、蛇と退屈でこの世の中に生てはゐられない事と思ふ。或る人はこれは、人間の原始時代に於ける蠻性が殘つてゐて、未だ全く進化し切れないからだと云ふ理由を附けてゐるが、少くとも私には、それはどうしても承認する事の出來ない事である。なぜなら、闘ひの心は何時も人心を新たにし、そして、この稍もすればダラけんとする人に生き甲斐を感ぜしめてゐるからである。そして更に、あらゆる歴史のその一ツ一ツが悉く何等かの形ちに於て、人間の闘ひの心の現れでなかつたものはなかつたからである。然もそこにこそ、人間は興奮仕合ひ、永遠の虚無からまぎれ、その現在の中に生きねばならぬ理由を見出してゐるのである。

△そこに闘ひ行く心に含む合理性がある。

△廣い意味で人間は、必ずや何等かの形ちに於て闘はずにはゐられないものだ。その心の最も洗練されて現れたものが各種のスポート競技ではないか。更に日本の武士道の如きは、この闘ひの心が洗練の極に達してゐると云つても過言ではない。

△啻に人間は自らが闘ふのみならず、他の違つた、あらゆる闘ひに人間位興味を持つものはない。我々が小説、芝居、活動寫眞等を好むのは、そこにあらゆる葛藤が演ぜられるからである。生活上に於ける所謂平和な人間は、それを観て、泣いたり、笑つたり、悲しんだり、喜んだりして、結局は樂むのだ。自分の心が平和であれば、そうしたものゝ上でもその平和を破らずにはゐられないのだ。戰爭がなければ政爭をやり、他人の喧嘩には興味を持ち、喧嘩をやる者同志はお互に興奮仕合つてその日を暮す。それ等は善いとか悪いとか云ふ事を超越して、それがありのまゝの人間社會の姿なのである。

△宗教は人心をして平和に導くと云ふ。嘘の皮だ。若しも本當に宗教が人心をして平和に導いて了ふなら、宗教は決して今日まで存在してはゐなかつたであらう。

△宗教は人心をして闘ひに導くのだ。矛盾ではあるが、これは間違ひのない事實である。そして、そこにこそ宗教が今日まで存在し、これからも存在して行く理由があるのだ。

△正義を求むる心。それは闘ひの心である。宗教が謂ふ所の平和になつて了つた時、そこに宗教の不必要が初まる。若しくは墮落が初まる。今日あらゆる宗教から人心が離れてあるのは、そこに迫害がないからである。迫害なく、闘ひのない所に人心は止まらない。なぜならそれは、新しき時代から置き去りにあつてゐる事を證據立てゝゐるからである。これは今日の宗教家の最も考ふべき所ではなからうか。

△何故に今日人心が社會主義に走るか。思へ。そこにこそ正義が迫害と闘ひの中に包まれてゐるからである。榮へある正義には必ずや迫害と闘ひが附隨する。そして、人間は亦必然にこの闘ひの中に包まれた正義を慕はしく感ずるのだ。なぜなら、そこにはより深き人類愛の信念とその理由とが存在してゐるからである。

△人間は平和を愛すると云ふ。嘘の皮だ。若しもこの世の中が本當に平和になつて了つたとしたら、こんなつまらない退屈な世の中はないのだ。見よ。現在の世の中で如何なる人も、それは何等かの意味に於て、闘ひを持たない人はないにも拘らず、それでもまだ足らずに、色々の違つた闘ひを外に求めて進んでゐる程ではないか。

△講談を好む大衆の心を究めて見よ。彼れ等はせめてもその紙上に於て、岩見重太郎となり、宮本武藏となつて、或る充たされざるものをそこに充たしてゐるではないか。其心が軈て人類愛の闘士ともなり得る心なのだ。

△慾望に悩む人間の心。これ我々の持つ本能である。慾望なくして人間は生きる事は出來ない。然もその慾望は闘ひなくしては得られないのである。

△靜寂を求むる慾望も、心と心との闘ひを意味する。正義を求むる慾望も、社會に對して闘ひを意味する。大願成就の精神も亦闘ひとは不可避のものである。

△平和とはなにか。正義とは何か、愛慾とは何か、利慾とは何か、名誉慾とは何か、然も眞理とは一體何を意味するのか。思へ。これ悉く生活上に於て生き甲斐を感ぜしめる「闘ひの心」ではないか。佛教で云ふ「轉」とは、畢竟するに絶へざる人心の「闘ひ」を意味する。善悪を超越して慾望に悩む闘ひの巷こそありのまゝの世の中の姿である。

△宗教の爭ひを醜ひと云ふ。何が醜ひのだ。闘ひがあつてこそ宗教に生命があるのだ。宗教の常道は闘ひである。闘ひを教へない教義は宗教でない。「轉」に忠實なるものに日蓮上人がある。しかし日蓮の教へに止まつてゐる者は、亦「轉」に忠實でないと共に日蓮にも忠實でない。恁うした意味の事はあらゆるものに對しても當篏まるのだ。

△生き行くありのまゝの世の中は、ケチ臭い道徳や平和や正義を超越して、何ものも抗する事の出來ない力をもつて流れてゐるのだ。

×

大道無門。闘ひ行く心。これ正しく善悪を超越したありのまゝの世の中である。

謹而迎諒闇之新年

貿易商
山手ブラザース
桑港バタリー街五一〇番
山手笹人
山手正男

謹而迎諒闇之新年

山下滊船株式會社
桑港出張所
桑港カリフォルニア街三壹壹

謹而迎諒闇之新年

切花卸商
榎本商會
桑港第五街一五九
電話ガーフ井ルド四五四二

謹而迎諒闇之新年

小川ホテル
栗原貴之助
外一同
カリホルニヤ街六一二

謹而迎諒闇之新年

帝國ホテル
一同
パイン街五五一

諒闇中に付年始の禮を缺く

株式會社 住友銀行
桑港支店　カリフォルニヤ街三一五、三二五
羅府支店　南サンピドロ街二〇〇（東第二街角）
加州住友銀行　櫻府エル街四〇〇

諒闇中に付き
年始の禮を缺く

小野貿易株式會社
桑港カリフォルニヤ街三五一

當選懸賞論文

第一等當選　日本語學校の將來

河村幽川

日本語學校の運命も段々その末期に近づいて來た。今日各地に日本語學校のごん／＼新設され既設學校に於ても約三十パーセントの割で兒童の增加を示してゐるが、これは要するに一時的の現象で蠟燭の灯の滅せんとするやパット明るくなるのと同樣な運命を持つてゐる。

一、日本人の子は日本人時代

「相當の金を貯へたら、日本に歸る」この極めて單純なる希望の下に我々の移民生活は開けて行つた。從つて當時は『日本人の子は日本人である』と云ふ觀念の下に、漸次增加する子女のために、他日父兄が日本へ歸つた場合の日本に於ける子女の教育の不便を慮つて、父兄の希望により建設されたのが即ち日本語學校の濫觴であつた。故に當時の日本人小學校の經營は純然たる日本第一主義の下に故國の教育界の方針を踏襲し、教師は日本人の師範學校出身者を最も歡迎し、彼等を呼寄せた。これに迎合せんと務められた。教授課目は日本の國語、修身、地理、歷史日本の小學校と殆ど同樣のもので、授業も午前と午後と一日二回執つてゐた。後日これ等の事々は排日政治家の惡さわ危まれる結果となつたが日本政府は勿論、日本人小學校の當事者も何等の野心なく只『日本人の子は日本人』との觀念から日本教育界の指針に盲從して漫然と歸國者のために、その子女の歸國準備教育をやつたに過ぎなかつた。

二、日本語學校の危機

然るに、一千九百十七年四月六日、歐洲大戰に米國が參加してから後、米國は國内に於ける適齡者の徵兵に際して、愕然として驚いた事實があつた。それは無學文盲者、即ち英語を解せぬ外國人の多きことであつた。加ふるに、獨逸系米國人の反米運動、種々の祕密結社の活動、陰謀等の隱然として行はれて居るに再驚し、先づ國内に於ける獨逸語學校の閉鎖を命ずると共に、この米國民教育の大病患に對する救濟策として、アメリカニゼーセン（米化）の大運動が猛然として起り、百パーセント、アメリカンの大旆は全米到る處に樹てられたこの大運動の餘波の最も強く及んだのは日本人小學校で、散々に蹴られ、擲られ踏まれ、にじられの悲境に陷つた。キリスト教派の人々を先頭として同胞社會の米化運動も旗揚げをし、日本語學校の廢止、存續の議論が轟然として起つた同時に一方永住土着と云ふことが盛んに唱はれて來て、時勢が次第に進轉し、この危地を脫かれた日本語學校も漸次改革の機運に際會した。

三、『日本人の子』は米國人』時代

米化運動の當然の結果として日本語學校取締法案（一九二一年）が出現した。この取締法案の内容は學校の取締法と云ふより寧ろその教師の取締法案と云ふ方が事實に近い。終局の目的は勿論學校の撲滅に在つたのだ。「日本人の子は日本人」と云ふ日本人小學校創立時代の一般の觀念が、「日本人の子は米國人」と云ふ觀念に變りそれが強く一般同胞の心理を支配して來て、日主米從と云ふ日本語學校の方針が、米主日從主義に顚倒して來た。即ち「日本人小學校」と呼ばれてゐたものが「日本語學校」となり「日本語」が「外國語」と變形して來た。日本小學校國定教科書等はその用をなさなくなり、新に米國教育局の認可の下に教科書が編輯され、日本語教育上、最も經驗あり抱負あり、理解ある師範學校出身の教師は英語を知らざるの故を以て、其の資格を失ひ其の補缺として、無經驗な小學教育に理解も、趣味も、素養もない人々が英語を知つてゐると云ふ一事から、米國側のお氣に入り登用されるといふ奇妙な現象になつた。從つて日本語教授の効果如何と云ふ事も疑はれるやうになつたのも當然であらねばならぬ。

四、存續の眞意義如何

此頃或人々によつて「日語學校存立の根本義は名實共に米化を助けるに在り」など〻唱へられてゐる。日本語學校の存續の理由として表面最も體裁のい〻立派な理由の樣である。しかし試に問ふ。一、日本語學校において米化を助けねばならぬ程米國公立學校の教育的價値を輕視し且疑ふや。二、又日系米國市民は他の外國人の子弟に比し、斯かる機關（日本語學校）の米化教育を必要とせねばならぬほど米化至難の子孫なりや。といふ事である。親と子、即ち第一世と第二世とはその故鄕、境遇、感化、教育、思想の何れの點より見るも相異なれるものである親は日本の風土を愛し、其の國語を愛し、その歷史を愛するが子は米國の風土を好み、アメリカの言語を好み、その歷史を愛する。親は東せんとし、子は西せんとしてゐる。若し其の間に相通ずる所のものがあるとすれば、それは親子の情愛以外には何物もない。殊に多くの同胞家庭の示す如く親と子が家庭を中心に相親む機會が少く、惡い意味の放任教育をやつてゐるにおいておやである。この親と子の間に立つて指導教育の任に當つてゐるのが日本語學校である。即ち現在の總ての點において相異れる親と子を相互に背馳しないやうに同樣の方向に進まし、其の間に相互の利益幸福の增進を計る所に日本語學校の存在意義はあるのである。

五、日本語學校の運命

故に日本語學校は第二世のためといふよりも寧ろ第一世のために經營されてゐるものである從つて第一世の勢力の失墜と共に日本語學校の凋落時代は必然的に來る。日本學校の全盛時代もこゝ五六年を出でまい。今其の理由を左に示す。

A、日本語學校の近時隆盛を極むる原因

1、登校年齡に達したる兒童の激增。
2、米化論者の失望落膽の結果米國崇拜熱の低下。
4、日本語は一つの外國語として將來日系市民必須の科目であること。
5、親と子の關係を密接にするために必要。
6、將來歸國の場合の下準備。
7、就職、嫁入、事業上の不便

これ等の理由は皆父母を中心として起る希望であり、要求である。一つとして第二世自らが未だ特に聲を大にして要求してゐるものはない。從つて日本語學校近年の隆盛は一時的の現象としか考へられぬ。

B、日本語學校が漸次自滅する原因

1、日本語教育に熱心なる人々の漸次歸國。
2、第一世の凋落。日本人社會の消滅。
3、第二世、三世の時代の展開
4、日本人色彩の減退。

即ちAの日本語學校の隆盛に赴く原因の極めて一時的で且薄弱なるに反し、日本語學校を衰滅せしむる原因たり、動力たるものは永久的で、漸次に力強くその根底を造つてゆく性質を持つてゐる。日本語學校の將來は正に蠟燭の火の如くその自滅を待つのみである。

當選第二等賞

在米同胞生活の缺陷とこれが改善策

橋岡俊一

東洋の文化は温かい情的要素を母胎としてゐるが西洋の文化は理知的要素に立脚してゐる。吾れ等の精神生活、物質生活を見ると理知的要素の缺乏と生活の科學化といふことを思念しないことが看取せられるのである譬へば吾等の理想的體軀の持主たる東西洋の相撲力士を對照してみると、西洋力士は競技前に當つて刺激物、脂肪物など飲食の上に萬全の注意と攝制をし、新鮮の空氣、手脚の運動微細なる點にも理智を働かし、體軀を科學的に作り上げるに餘念ないが、日本力士は明日は大事な一番勝負と言ふに、夜を更かし暴飲暴食斗酒敢て辭せずと言ふ不合理の本能的生活をする。西洋力士の筋肉隆々その腕脚は鐵棒の如くなるに對し、吾が力士は水袋的體軀を得意とする。競技に當つても十分か二十分もすれば氣息奄々たりである。そこに體軀の科學化といふことに留意しないことが認識せらる〻のである

【二】

吾等の保健上から筋肉勞働に就て考察しても、勞力の節約、仕事の分量といふことに顧慮しないやうである。吾等はピースウオークに得意である。何故ならば仕事を競爭的に戰鬪氣分でやる。保健の最大要素たる飲食物にも粗末なる物を食ひ、一仙にても最後の勘定に他者より多額ならんことを期待する。夫故に病魔に犯され勞銀は病院費になると言ふ非理知的頭腦の持主である。

西洋人の一代で成就する事業を吾等は二代三代の時間と勞力を要する。吾等の死亡率の高きことはニユーヨーク生命保險會社が證明してゐる。吾等の平均年齡は三十五歲とのことである。

今一つの保健上の問題に關する例證は佛教徒の御通夜である。不（私も佛教徒である）御通夜については佛典上の理由、傳統的慣習、遺族慰安色々なる理屈があらう。然しながらこの傳統的慣習の御通夜は現在生活から考慮するとき不合理にして矛盾たることが頷かれるのである。

この慣習は昔時農村の自作農者など〻の間に行はるべきであつて時世變遷の今日賃金勞働者として時間嚴守の米國に於ては、餘りに慘酷性を帶びてゐる。

御通夜のために睡眠不足、感冒下痢、眼の神經痛病者を生ぜしむることは比々みな然りである。私は保健上からみてこの傳統的慣習を廢止せんことを提唱して止まないのである

【三】

方面をかへて吾等の消費生活を見ても、種々なる決點短所を指摘することができるが、私はその一つを述べてみやう。

吾等の生活にはスタンダード、ラブ、ライフ即ち生活の標準となるべき確立がないことである例へば留送別、歡迎、葬式なり婚禮などの場合斯樣斯樣のことはなすべきなれど、それ以上のことはなすべき必要なしといふ標準を確立すべきである。

日本に於て娘一人嫁入らすために親父の收入の三ケ年分を消費すると統計局から發表してる。吾等の間にも贅澤なる惡風は年と共に魔の手を伸ばしつつあるのである。

【四】

哲人アリストテレスは『人類は社會的動物なり』と言ふた。社會學上、社會生活とは社會各人の共通なる約束の結果である吾等の私的生活に立脚した一行爲も、それが吾等民族の慣習によるときその一行爲は社會的生活の一行爲と言ふべきである。例へば吾等が友人の隣國の節饋別を贈るは共通なる約束である樣に吾等は不知不識の間に、私的生活を通じて社會的生活をなしつ〻あることがわかる

而らば吾等の生活をより善くせんとするには、そこに共通の精神的作用がなくてはならぬ。夫は社會觀念である。抑も社會觀念とは各人の感情に理知の判斷力が働いて制理せられたもので、この觀念の集合體が社會思想となるのである。而して社會思想は具體化して社會狀態を形ち作るのである。それ故に吾等は社會觀念の進步を企圖せなければならぬ。

社會觀念の進步は社會の柱石たる成人を教育することにより、初めて有意義ならしむることを認識せらる〻のである。

然らば成人教育は如何なる方法によるが尤も有利に實績を擧げ得るかと言ふに、各地に「生活改善會」なる團體を創設し、これを統轄する主能機關を置きその直接行動の一部として講演團を組織し必要に應じて各地に講演せしむることを主張するものである。

之等團體の幹部員は第一世のみにては改善の勇氣と實行力がない。故に第二世の間より屹度その半數以上を幹部に据るべきである。第一世は傳統、階級、宿命觀、情實主義の人のみ多く頭腦はあまりに古いのである。この保守姑息思想の中に自由平等進步改革思想の第二世が加はつて討議し輿論を作りこれが實踐的効果を擧ぐるに努力せば、吾等の生活は面目を一新し社會進化の過程に伴ふ所謂文化生活をなし得ることに確實に認識せられるのである。（をはり）

當選三等

日本語學園の將來

麥嶺　西原生

日本語學園の將來に就いて考へんとする時、當然考へねばならぬものは、在留日本人の將來と云ふ問題であります。又在留日本人の將來はどうなるか、と云ふ事を考へんとする時、當然浮び來るものは、在留日本人の今日を成せる過去の歷史であります。歷史と云つても何も茲に紀元何年に誰某が何處で何をした、と云ふ樣な事を詮索するのでなく、只大和民族の流れが、太平洋を越ゑて此岸に移り住むに至つた事實の根本を考へて見たいのであります。

此民族移動の動機が日本政府或は米國政府の奬勵に由つたかと云ふに、其何れでもなかつた事が事實であるのみならず、兩國政府は常に日本移民の渡米に多少の制限又は壓迫を加へて來た事は明かな事實であります、然るにも拘らず半世紀にも足らぬ短い星霜を經たる今日、約二十萬の同胞が先驅者の墳墓と後繼の童幼とを擁して根底深く特殊の社會を形成して居る此實相の奧には膨張し來りし民族をして必然に掉さしめたる經濟的の潮流があつた事を、誰も否定し得ぬであります、然れば此の力強い世界的經濟の潮流が存在する以上在留同胞の將來は區々たる政策を以てしては如何ともす可からざる發展を遂ぐべきものと觀察するを至當とす可きでありませう、併し移民の絕對禁止法案が成立したる今日、數に於ての發展は茲に一期を劃した觀があり、今や僅々二十萬の同胞の存在は、國際間の問題でなくなつたかの觀もあり、氣の弱い人々には、同胞の將來を悲觀するものさへあるを見ますが、之は淺見も甚だしいと云はざるを得ません、何となれば後續移民を絕たれたる在留同胞の生活は單なる經濟的の存在より離れて新なる、且重大なる意義を加へ來りつ〻あるからであります言ふまでもなく夫れは日本と云ふ天惠乏しき國に於て發育を遂げた東洋文化と米國と云ふ天惠豐な國に於て發育したる西洋文化とが太洋を隔て〻奇妙な對象を現じたる現代に於て、少くも二十萬の日本人が米國と云ふ各國人種合成の國土に散在すると云ふ特殊なる事實が有する特殊なる使命であります（以下次號）

懸賞論文撰擇の基準

懸賞論文撰擇の基準は必ずしも應募者の主張が本紙の見解と合致し居るや否や、又は是に近きや否やに置かず。されば當選したる論文筆者の觀察または主張が、全部本紙の是認する所でないのは云ふまでもない、讀者この點を了解せんことを希望する

諒闇中に付年始の禮を缺く
コスモポリタン
貿易商

諒闇中に付年始の禮を缺く
大佛商會
柴田德次郎
店員一同

謹迎諒闇新春
リネンハウス
桑港　山崎章
本田暢
橫濱　高梨貫司

謹迎諒闇新年
松岡商店
松岡與一
外一同

諒闇中に付き年始の禮を缺く
美術商
雜貨
日本貿易商會
桑港グラント街四二〇

謹迎新年
中溝商會
桑港ポーク街一三一九
中溝英次
出口鶴男
外一同

謹迎新年
美術商並に美術修繕
佐藤商店
佐藤夏生
外店員一同

謹迎新年
立本商會
立本官一郎
外一同

諒闇中に付年賀欠禮
舊丸上貿易株式會社改メ
株式會社岩上商店桑港代理店
石原要商店
店員一同

諒闇中に付き
年始の禮を缺く
美術雜貨輸出入商
芙蓉商會
會主　神崎吉三
店員一同
神戸市三ノ宮町一丁目一六〇
藤原兄弟商會

諒闇中に付年始の禮を缺く
秦美術店
本店　グラント街三三五九
支店　グラント街五三三五

恭迎新年
昭和二年一月元旦
桑港ゲリー街一五三三
㊄
麴味噌製造所
桑港ポスト街一五三四　分工場
則尾政一
店員一同

謹迎
諒闇之新年

ポスト街一六五一
安藝ホテル
主人 片岡一郎
支配人 後藤繁藏

防長旅館
館主 有馬時國

忌中に付年始の禮を欠く
ゑびす
ホテル
郷原謙藏 外一同

永本ホテル
㊟ 館主 永本要藏
齋藤廣次
丸山與八
自動車部 ジョー

加州ホテル
館主 中野作太郎
營業主任 倉智佐十郎
外一同

日本ホテル
旅館部
アパートメント
主人 田中米吉
外一同

ゲリー街一五二三
南海屋旅館
主人 福島仙藏
支配人 末弘時義

ス井ートベーカリ
矢崎辰雄
工場員一同

桑港ブキヤナン街
エビス洋食店
小宮山成巳

會席
高等
御食事
おた福
電話フィルモア一〇一九
ポスト街一五四五 小房 小静 米子

野菜、果物、グロサリー類
牛、鳥肉類配達迅速
サン マーケット
四條茂十郎
桑港ポスト街ウエブスター街角

ゲリー街一六〇五
SK家具合資會社
店員一同

ポスト街一六八三
土屋貿易商會
土屋金物商會
店主 土屋亥之助

グラント街六七〇
高澤美術商會
高澤清吉
松井義明

ブッシュ街一九一三
自動車修繕
デューコー
エナメルペント塗替所
湯蓋新一

謹迎新年
一月元旦
魚喜商店
店主 酒井喜多市
谷一民
小島岩松
湯川賢太郎
村上新太郎
吉崎忠七

和洋食料品
鮮魚等一切

恭迎新春
一月元旦
海陸商會
菊井治三郎
鈴川震一
峯間五十二
林愛治

和洋食料品
鮮魚等一切

謹で諒闇の
新年を迎ふ

ヤニルオフリカログンア
行銀トスラト
フ井ルモアア街
支店

日本人部主任
加來藤太

謹で諒闇の新年を迎ふ

正 藤本商會本店
桑港ジヤクソン街二三八
（電話）ダグラス一二二六
店主 藤本源平
藤本觀太 山根貞藏
角田平三郎 麻岡靖正
大村豪男 末永一登
坂田耕作 外一同

藤本商會桑港支店
桑港ポスト街一六四〇
（電話）ウエスト七三五三 七三三
支店長 安永實造
世良田昌一 大野宇一
種村權重郎 寺西鐵藏
大西宗吉 藤井靜夫

諒闇中に付き年賀の
禮を缺き申候

浪花節活動寫眞巡業團
北都齊謙遊
452 Jackson St., Los Angeles, Calif. Tel. Tur. 5425
日吉川秋月
142 Trenton St., San Francisco, Calif Tel. Kearny
桃中軒浪右衛門
1647 Post St., San Francisco, Calif. Tel. West 6524

在米邦人社會にあつて欲しいもの

昭和二年の年頭に當つて　在米邦人諸名士の意見

本社は新年號に掲載する目的にて左の質問狀を在米邦人諸名士に送り意見の發表を乞ふた處、多忙中にも拘らず多數の回答を送られた事は感謝に堪へぬ　【順不同】

一、在米邦人社會にあつてほしいもの、その理由

△桑港　小島久太

ほしいものだらけなれど先づ追々成長の同胞青年のために中學程度又はそれ以上の邦語教育を授くる學校の設立（初めは小規模より出立する事）救はれざる老人および貧困者のため慈惠病院の建設。邦人の醫師あり又邦人の看護婦なき遺憾を何とか致したきこと

△紐育　角田柳作

一、統一團體　二、勞働團體　三、實業團體　四、文化事業　序ながら私の計劃してゐる The Japanese Culture Center は宗教宗派を超越した文化事業で、佛教會の變化でもなければ、其準備でもありません　私が佛教と因緣の深かつたために、かうした噂もたつ事と思ひますが、今ではさう思ひつめて反對した方でも眞相を了解してくれます

△桑港　武富敏彦

統一的指導機關その理由は特に申上ぐるまでもないと思ひます

△シカゴ　田村貞治郎

慾を申せば、はてしなけれど加州のやうに幾萬の邦人居住せる地方にはその土地の一般公共事業に惜氣なく巨財を常に寄附し得るやうな千萬長者がせめて二三人もあらば、年々の「コムミユニチー・チエスト」などにも斯うもすれば白人の好感を得べきかなど、さもしき氣苦勞もゐるまじきかと存じ候ふ

△シャトル　櫻内篤彌

コムミユニテイ・センターたるべき立派な建物、出來ればフイルド・ハウスのやうな設備もあつて第一世も第二世も會社、銀行員も下町で働いてる人たちも一緒に入つて樂める所、　理由　在留邦人の浮腰を落つかし、健全な日本人の社會が發達せしむる第一着手として

△羅府　大橋忠一

今羅府で問題になつてゐるのは、托兒所、二世の運動場、養老院であります、その他當地ほど同胞が多數ゐる場所においては健全なるクラブのやうなものも必要と思ひます、必要なことは多いが、お金が出來たら早く歸るといふ人が多い内は何等有意義の仕事の出來ぬのを殘念に思ひます。

△オークランド　藤賀與一

○精神的の方面から云へば正義を愛する觀念がモツト強くあつて欲しいです物質的方面から云へば鞏固な金融機關です現今在米邦人が頭を惱ましてゐる、二世職業問題の解決に當つても科學的智識や勞力の提供には事を缺かないでせうが、先立つものは何と云つても金錢問題です資金の協調力が邦人間に缺けてゐることは一番心細く二世へも氣の毒です、彼れ等の開拓すべき事業は恐らく農產物の賣買とか之に伴ふ倉庫業、罐詰業、小資本の製造工業、科學的製品賣藥及化粧品の東洋輸出及び行商、何をするにしても資本の援護のないといふ事は彼等に失望を與へ機會を逸するのです、日本でも少し氣の利いた運動すれば百萬圓二十ケ年無利子融通位は出來るでせう、在米邦人間から百圓出資五千口位は困難でないでせう計百萬弗日本の興敗にも關する問題として寧ろ安過ぎる程です？

△フレスノ　奈良靜馬

無くても宜いようなものは澤山あるようですが特にあつてほしいといふようなものは今思ひつきません。

△シアトル　奧田平次

誠意ある、第二世の指導者、各地にあると思ひますが此の上とも多からんことを希望します。

△羅府　高橋昇之助

欲を申せば限りがないが倶樂部、圖書館、興信所其他大抵あると思ひますが現在の機關を確立し協同したる一大勢力

理由は別に申し上げる迄もないと存じまして省く

▽櫻府　津田伊之吉

貴社の有つてほしいものには及第せぬかも知れませんが輿論的に第二世の第一線に立つ青年の間にも少し精神修養上宗教信仰を起す様に輿論を興へてほしいと思ひます

理由第一世の過去を回顧して二世の爲には經濟上にも健康上にも幸福なる生活上にも又は民族の體面上にも宗教的修養は至急中の急務と思ひます

△桑港　東ヶ崎菊松

事實　己の過失と罪惡を神と人の前に告白する勇氣、具體的に申せば、神の前に悔い心碎けたる靈　理由　神に造られ神の支配を受けたる以上何事も神の前より出發せねばなりません

△桑港　佐藤鶴吉

在米同胞間にあつてほしいものは擧げて數ふれば限りがないやうに思はれます、而して具體的に何と記載する事は六ケしいから、抽象的に云へば「在米同胞間にはもつと統一と合同があつてほしい」と考へます。現在に於いて統一がない合同がないと云ふのではありません、もし一層之等の事を吾人は海外萬里の地に邦家のため貴き活動をしてゐる事を思ひます時、兄弟墻に鬩ぐがごとき事を避け益々一致協力する事が必要なる事を切に感ずる次第であります

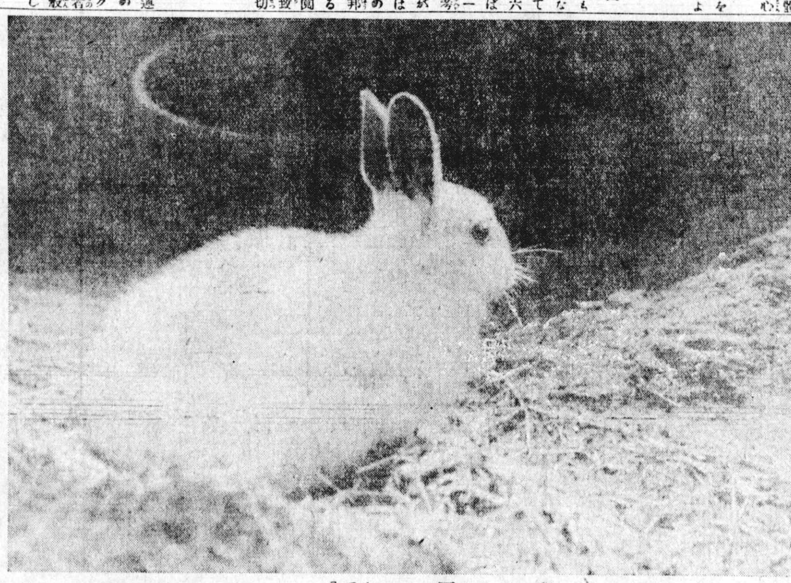
△羅府　藤井整

野球、庭球、ゴルフ、其他運動會が催される位に大仕掛のグラウンドと日本人專用のクラブ、但し、之等は少數の者の獨占的のものでなく、一般に公開する種類のものがほしいと思ひます。

その理由　さういふ機關が同胞社界にないのと、白人間のそれを使用する事は我等日本人に許されないからであります、そしてこれから先々、どうしてもかういつた設備の必要を感ずるからであります

△ベーカスフィルド　下司宇吉

一、土地所有權復活　一、移民法改正（從前通り）　在米邦人社會にあつてほしいものは百種百樣殆ど片つばしからほしいものばかりでありますがしかしこれ等即ち枝葉のことであつてその根本たる土地所有權が從前のごとく移民法復活すればいはゆるあつてほしいものは自然に滿たさるのであります過去及び現在において在米邦人は全く行き詰まつてゐるます全く手も足も出ないのであります斯の悲境に遭遇したのは即ち此の二惡法あるがゆゑでありますから私は是非この惡法が一日も早く改善せられんことを祈るものであります。



卯年に因める『兎』　桑港寫眞倶樂部員　高橋金三氏撮影

△櫻府　辻惣三郎

新聞紙の報ずるところによると妻子を捨てゝ他の女に走つたりまたは可愛い吾が子と夫を省みず他の男に戀したりする事件が近來在留同胞間にチヨイ〳〵發生するやうで甚だ面白くないことだと思ふ、何等かこれ等を未然に防ぐよい方法はないものだらうか眞に信賴するに足る人事相談所のごとき設備があつてこれを適當に運用したなら或は効力がありはしないかと思ふ。

△桑港　萩原五郎

倶樂部　堅實な倶樂部がありまして理屈なしに温い情味のある交際ができましたならば相互にこんなにゆつたりした生活ができて樂くはありますいか。

△王府　竹下靜馬

人格ある第二世の指導者　在米邦人社會にあつてほしいものは隨分澤山あると思ひます。各自異つた要求がありませう。併しながら今日の在米同胞社會において人格ある第二世の指導者ほど必要なるものは他にないと思ひます。これさへあればすべての問題と機關は漸次解決されてゆくと信じます。

△コーテーズ　馬場信良

小生が痛切に感じてやまぬ在米邦人社會において必要なのは第一世と第二世との關係をよりよく温和に締結維持するクラブ或はそれに類した團體の組織です。これをいつもポイントすることは堅苦しいことですが、何時もの青年の會合や種々のアクテビテイには一般からいつた第一世は馬耳東風然としてゐるし、また反對に第一世の行ふ諸事には第二世はあまりに冷視してゐるかの感あり、甚だ遺憾なことです、一番新しい實例としては先日桑港で行はれた「日對支」青年のフツトボールゲームの時のやうです、あの貧弱な後援の仕方はどうしたでせう、後の祭の話ですが、小生のいふこの機關があの時存在してゐたとしたなら、も少し彼等にも滿足に近いバツクアツプが出來たことゝ信じます

△桑港　金子豐治

在米邦人社會特に桑港のごとき都市に群居してゐる邦人間にあつて欲しいものとして、私はまづ第一に、大運動場の開設をあげます。そして此運動場では、「マラソン」競爭でも、砲彈投げでも、高飛でも、又は野球、「フツトボール」「テニス」などの、あらゆる陸上競技が出來るやうに設備しうれば、洵に此上もない結構だと思ひます、健全なる精神は健全なる身體に宿るとは、昔も、今も變らざる金言でありまして、特に今後益々生存競爭の劇しくなるにつれ、身體の弱い人は、到底社會の落伍者たることを免れざるべしと思はれます、況んや在米邦人社會の前途には向後幾多困難なる問題が、ふりかゝつて來ませうし、この困難を切りぬけて行くにはどうしても先づ第一に健全なる身體を養ふて置くに限ると思ひます

△シャトル　竹内幸次郎

子供の給入邦字新聞　理由　各地に國語學校があり第二世に日本語の必要な事は既に完備である以上はその國語で書いた日本人の小供向きの專門新聞（週刊でよい）があつて繪說きで面白いものなら沿岸父兄は大に歡迎しませう國語教育の補習にもなれ沿岸を通じての子供同志の聯絡が取れる事にもなります

△デンバー　國友信彌

從來の日本人會を改造して一般同胞を通じ基礎確固たるミウチユアル・エド・ソサイテー（疾病保險樣の物か）を設くること。

われ〳〵在留同胞が健康のときは各自己が持する不時の疾病アクシデントの際は貧富を問はず餘分の收入あるときは多大の援助たるべし、白人社會に種々の保險會社あるも皆商賣的故加入の際は實に好都合のやうなるもイザといふ場合被保險者の不利となり多大の掛金を甘んじて取らるゝなり、現に小生もその經驗をもつ一人なり。

△桑港　三上英一郎

優良なる有價證券　理由は申上ぐるにも及ばぬ事と存じます

△羅府　伊藤久治

日米兩國人の民情に通じたる德望ある指導者　從來の公共團體の首腦者等は他の所謂有志家なる者の多くは日本的の教育あり相應に手腕を有すれども在留米國の國情民情に通ぜず、排斥の環境にあつて適所に在留民を指導し訓練し、敵に對しては其蒙を啓發し得ずして一々表沙汰を以て對抗したる時吾々今日現狀を招到したる原因理由の一たるを信ずる者なり。

△ワツソンビル　松田午三郎

（一）品性識見を備た眞に一代の師表たるべき指導者。

（二）在米邦人を中心とする銀行の設立（例へばイタリイ銀行の如きもの）

△桑港　柴田市太郎

あつてほしいもの數限りあるまい、だが何はサテ置いて先づ金融機關？農產物出荷販賣機關の設置が必要でしよう

△桑港　津田彌三郎

一、子供の遊戯場と其指導者

二、信用及購賣組合

三、養老院

四、此地に骨を埋める決心、（自然にさうなるのでなく決心すること）

五、信仰　宗教か信仰なくしては安住の地はない

以上五つのほかにほしいものはいくらもあるが、この五つを先づ欲しいと思ふ

▽桑港　永井元

有形には……

一、大人の爲休息所の設備

二、コドモの遊戯場

三、養生園の設置

一、日本人町の適宜の家屋を休息所に用ひ、中に圖書室・娛樂室・休息室には喫茶の設備安樂椅子等、重に旅客の爲、又土地の人も或場合には用ひうること

二、コドモの爲成る可く廣い地面を購ひ、晴天にも雨天にも差し支ない遊戯場

三、養生園は普通のサニタリアムの如く費用かゝらないで、住にして趣味あるルーミングハウスに看護の心得ある者を主任とし、滋養食の供給を初め靜養に適する閑雅の室を設け、病院に入るほどでない病人の靜養場とすること

無形には……

數珠の糸、團子の串の如く個々を通して一貫せるものがほしい、同胞中精神的集合に、智識的、及實業的に、數多の小寄合がある。個々別々に成立して、眞に一貫せるものがない、これらを其種類により打つて一團となし、其粹を取り、缺を補ひ、冗を省き、助長して一大體とする度量と手腕とを有する人がほしい、さなくば、個々生存に苦しんだとても夫等のうちより偉大の思想も、強健な大業も望み得られまい、

△ローダイ　高橋庄三郎

抽象的詞からいひましたなら相當議論も事情もありませうがしかし實際問題として考へますれば差し迫つて同胞間に必要を感じますのは健實なる金融機關の設立だと思ひます我が同胞間に金融が非常に緩漫であるがために種々なる方面からこれが救助の方法を講じても不可能で折角の事業を眼前に控ひてをりながら他人種のために蠶食されるといふ悲慘な有樣で殊に加州土地法制定以來不動產を擔保とすることさへも許されぬ有樣に落ち入つてゐるのです。私は各自がもう少し時代に伴ふた正貨準備の必要を痛切に感じて同胞の集中する中心に、一つの金融機關の設立を切望して止みません、現に私は私の會社で毎月一萬弗餘の取引をいたしてをりますがそれに對しても尠からず不便を感じつゝあるのです

▽桑港　幸田宗平

「職業問題研究所」、現在の儘では同胞の經濟的發展は到底覺束ない、研究所は職業に關するあらゆる問題を科學的に研究して行詰まらんとする同胞の新方面開拓資料を提供すべきである。

△桑港　野田哲男

私は在米邦人間に、邦字なしの純粹な堂々たる英字新聞の生れることを望みます。邦字にて教育されたわれ〳〵第一世が邦字新聞により便宜を得たことは非常なものです、しかしこの邦字新聞に公表されたる社說も記事もその精神が國交上友邦米國人を啓發すべきもの多くあるに拘らずその及ぶ所僅に邦人同志間に止まり幾千萬の他の米人にはその存在すらも知られざる事遺憾の極みです、若しこれが英字新聞であるならば第二世も是を繼承するに難なく又第二世がその新聞に表れたる精神より第一世たる吾人に對する尊敬の念も起ります。而して常に隔靴搔痒の感ありしプロパガンダを此の英字新聞に記載して屈せぬ内には一般米人社會を自然的に敎育する事ができ、今少し我々帝國民を理解さして彼の聞くにいまはしい排斥も土地問題も法廷に表れずして自然に解決が付くかと思ひます。

△マテナス　鳥山平藏

完備せる日本人病院　病を獲て白人病院に搬ばれ、通辯を介してその大切なる生命の治療を托するに不安があります。現金主義の白人看護婦にまもられ英語の不充分なるために何等慰安の談話さへあたへらるゝこともなくつめたき病床に呻吟するは悲哀であります、或る者は病軀を擁して歸國しかへつて氣候風土の變化に禍ひせられて不歸の客となりし者さへあります、かゝる狀態にあれば規模の壯大、輪奐の美等は第二として内容の充實完備せる日本人病院の建設は刻下の急務ならんと考へられます、蓋し在留官民諸氏の努力と故國朝野の援助とにまてばこれが實現の可能性あるを確信するものであります。

▽桑港　瀧本爲三

一、相互信用　在米邦人社會にこれほどほしいものはありますまい而してこれ位必要なものもないかと存じます。

二、職業教育機關　第二世の職業教育獎勵上邦人社會において是非あつてほしい教育機關であります十五年後の在米同胞の經濟關係と生產非生產人口關係を一考せばその理由は何人にも了解ができると存じますタスカギー・インスチチユートの貢獻と效績について彼れ是れ申述ぶる必要はありますまい。

二、在米同胞の現狀に照し、「リーガル、エイド」の仕事程大切なものはありますまい法律的迫害のため苦しんでゐるものに對して法律的援助をあたふることは當然の必要であるまいか？。

△櫻府　井芹改藏

お訊ねの「在米邦人社會にあつてほしいもの」は澤山あります、しかし結局はいづれも人と金との問題になりまして迚もオイソレと今の間借に合いさうなものがありませんので極手輕なものの一つを述べさして頂きます。一般に虛飾の弊風が旺であります、いふまでもなく眞の勢力、眞の人格なるものは壯嚴な家屋、自動車、華美な衣服等驕奢の生活により發揮されるものでなくむしろ之等は一見きはめて華やかではあるけれどその裡には甚だ賤しむべき僻見が潜んでゐるのが常であります。實力の人、眞摯の人は如何に外觀は修飾せなくともその崇高にして光輝ある品性は期せずして四隣を善化し美化するものと信じます。近時しきりに論議されつつある第二世の教導なるものも所詮は第一世が上述の點に留意せずして成しうべきものでないと堅く信じます。

△桑港　小豆澤兵重

一、永住的大方針の下に、日常生活に大改善を施す確固たる精神。

二、第二世の職業研究會を各地におこし、これが中央機關を設けて連絡をはかり研究指導周旋の任にあたる但し第一世を顧問位にとゞめ、物質及精神的の援助をなし實務を主として第二世にあたらしむ

三、諸取引を現金制度に改むる精神、則ち在米同胞の各種事業の振はざるは掛賣によつて無益の資金固定するによる處多し。

▽桑港　小林政助

第二世のため健全なる職業敎育指導機關

在米日本人の第一世は心理的にも經濟的にも故國に執着し過ぎてゐます。

第二世の少數が米國で最高教育を受けるのは必要でありますが、最大多數ーマスーは小學若くはハイスクール程度をその教育の限度とせねばなりませぬ。彼等第二世の最大多數をして健全なる職業（そんなに高位高官に上がる要なし）に從事せしめ二十歲前後よりドシ〳〵獨立自營彼等の生れ故鄉たる米國を本位として發達せしめたならば在米同胞の生活及經濟關係は自然健全順潮となる事疑ひありませぬ。從つて彼等の心靈的生活も亦健全に導かれませう。

△桑港　本阿彌彦六

罹病の際入院する程でもなくさりとて看病者もなく又食事其の他一々外出せねばならぬやうな人々の爲めに療養所を設け尙親達が病氣其他の事故の爲に子供の保育に差支を生じたる場合その期間子供の保護を依賴すべき托兒所の如きものゝ設置

△オークランド　松澤教

一、は金融機關を設けることであります

世界はコムマーシヤリズムに風靡せられ產業的發展の上に競爭せざる何者をも見出し得ざる現狀でありますが今日同胞の事業とその經濟界を見渡して全く能率のない、無勢無力の自滅的現象を續けてゐるのを見て此の分では發展もへチマもあつた者でないと思ひます此の際健實なる金融機關の開設は民族的急務と信じます

二、は東洋文化研究機關の設立であります　金儲けばかりが目的でないとはわかりきつてゐるのだから要は研究機關かなぞこいかめしい文字を使つたからといふて別にそう四角張らなくとも兎に角東洋の象徵化された神祕的背景の間に生れた曲線美を憧憬すると共にその精神文化を玩味するとは吾人の趣味生活の上に確に一つの潤ひを與へてくれます

△桑港　堀莊次郎

（一）日本人經營の完全な病院

フレンチ・ジアーマン・ホスピタルに並ぶやうなものとして日本から斯界の大家を招き是を白人社會に紹介するとともに邦人患者の便宜を圖る事

（二）ドメスチツク・クラブ　多數「ホームレス」の働き人を中心として互に慰藉する場所、（理由）、こんな機關がないため悲觀してか年々米國政府の厄介になるものゝ數がふゑるやうだから。

（三）第二世の爲の職業研究所（目下直面してゐる實際必要問題と思ふから）

△桑港　鈴木孝志

（一）日本書籍の圖書館がほしいと思ひます。

英文の書籍は如何なる方面のことでも公立の圖書館で得られますが日本文の書籍は容易に得られません。

（二）圖書館の附屬として在米同胞發展資料展覽所をほしいと思ひます。

先輩の血と涙と汗の遺跡を後世に傳へたいためであります

△桑港　小川榮一

市民權獲得法令

理由は說明の限りに非ず

△ルーミス　新田長市

在米邦人社會にあつてほしいものは數多ありますが、私は都會でも地方でもそれ相當な奏樂隊（オクストラ）があつてほしいと思ひます

理由の一つを申せば邦人社會には多くの公共團體がありまして又色々な催しがありますが主として吹寄せなどの聽し物で賑やかされるので將來を托する第二世とは趣味の相異があるので是非オクストラなるものが至る所の邦人社會にあつて英和兩曲を奏しともに樂まれたいと思ひます

△桑港　松本萬六

あつて欲しいものは、金持ちだと思ひます。お互ひが衣食住にことを缺くやうでは人の世話も、社會の奉仕も徹底的には出來にくい事ゝ思ひます一體在米邦人社會には有名無實の團體が多過るやうであります。

謹而諒闇の新年を迎ふ
桑港之部

保險業 森川福松
カナダサン生命保險 大森彦太郎
有馬保險事務所 中林小四郎 伊藤龍三郎
日本ドラグストア 有馬登雲 山田初登
御食事 羽衣
ポスト街一六八七 港ずし
壽司源 出野靖一
ハツクス ベーカリー
日本クラブ内 松岡萬之助
ポストン洋食店 柳原福太郎
ABC飯屋
東郷洋食店 花園兼喜
クレー洋食店 福留袈裟熊
ステート洋食店 井上源吉
東洋軒
萬花樓
錦花樓
廣東樓
フォード、シヨボレー レツキング商會 松山篤雄
ポスト街一八〇一 アメリカン ミート店 電話ウエスト六三三六
果物店 中田倉次
桑島煙草店 ウエスト四一九一
煙草、玩具、アイスクリーム 土井稔一

ローラー店 平田友次郎
グリー街一六一〇 門田小鳥店 電話フイルモア三七四八
寫眞師 森山三郎
寫眞師 房木延助
吉里寫眞館
杉野甚松
高橋洋服店 高橋力
山本洋服店
榎本洋服店 榎本峯吉
惠美屋洋服裁縫店 栗原節雄
畑洋服店 畑篤松
川口產院 川口藤子
ポスト街一五八七 坂本產院
小松產院 小松トメ子
東京パーラー 大村末吉
黑川鶴吉
金天狗カルタ製造所
義太夫師匠 竹本氏駒
ポスト街一六七五 大工 深谷清八 電話ウエスト七〇五九
藤浦基
ブラマー業 清木友吉
喪中に付年賀欠禮 森末要次郎 森末正信
桑港 酒卷末治 野々口一誠 稻留正吉

グリー街一五二三 南海屋旅館 主人 福島仙藏 支配人 末弘時義
クレー街九四九 北野ホテル
桑港グラント街五四五 松岡ホテル 主人 小野田彦太郎
ポスト街一六三四 廣島屋旅館 桑子アキ
北米旅館 金銀寶石取次商 吉村榮治
サウスパーク 井木ホテル 井木玄一郎
ポスト街一五八〇 パシフイツクモータ會社 湯川八助
ポスト街一五八〇 パシフイツク バテリー店 山本時藏
桑港運送會社 米津彌吉
ブキヤナン街とポスト街角 中川商品館 主人 中川若楠
子供着物類一切 河内屋商店 辻坂なみ
桑港グリー街一五六二 キヤピタル洗濯所 職員一同
ラグナ街一五四七 青柳 劍持寅吉
ウオール ペーパー、ペインテング 河田又一 ブツシュ街一八六五 電話ウエスト五〇一九
桑港ポスト街一六三五 桑港寫眞倶樂部

青木大成堂 青木道嗣 本阿彌彦六 西川利市 畔取春一
五車堂 支配人 相澤金丸 外店員一同 歸國中に付年賀缺禮 在東京 小野昇六
寫眞器具一切 瑞穗商會
近江屋 商旅館 びわこ湯 店主 森野庄吉 支配人 森野宇三郎
金門 男女 洋服店 羽野芳平
加藤兄弟商會 卸部 桑港セントアネ街五五 小賣部 サクラメント市 同 オークランド市 同 スタクトン市
井原商會 電話フ井ルモア七〇九〇 井原金次
クリフハウス井原支店 電話エバグリン四八五五 支配人 井原定吉郎
SABURO KIDO ATTORNEY of LAW
ウエブスター街一六二一 城戸三郎 法律事務所 電話ウオルナツ七四四

忌中に付年賀の禮を缺く パイン街壹八三七 日本病院 ドクトル 田中政次
ブキヤナン街一七二五 北米病院 原昌親
調劑の御依賴に應ず 日本ドラグストア 桑港ポスト街千六百九十番 電話ウエスト一八六
桑港日本人藥種業組合 北米藥舗 大阪藥舗 正藥舗 大藥舗
迅速丁寧 東海活版所 桑港ポスト街一八二四 電話ウエスト七九七四
シンガーミシン、蓄音機 みとま
杵屋彌曾代 長唄彌生會 グリー街一五一八
桑港 松尾愛治

謹迎諒闇新年 木村活動寫眞巡業部 木村宗雄 外一同 桑港グラント街五四五 電話ドグラス一六五六

諒闇中年賀欠禮
ブキヤナン街一六三一 電話フ井ルモア二〇二〇 パナマ自動車會社 西村音之助 外社員一同

諒闇の新年を迎ふ
直輸入卸小賣商 桑港グリー街一五〇三 デユポント商會 鷲塚粂吉 外店員一同

諒闇の新年を迎ふ
アングロカリホルニヤ トラスト銀行 フイルモア街支店 日本人部主任 加來藤太

謹デ諒闇ノ新年ヲ迎フ
桑港菓子業組合
勉強堂 花月堂 松屋 春月堂 しなのや
武田菓子店
細田慎次郎 武田德太郎 岡村末市 北岡彌市 石井安太郎 猪熊彌平

コドモノペーチ

お友達の作文

お正月

高橋　清子

御正月は新年の始めの公休日で有ります。昔は白人もお年始に廻りましたが近年此の習慣は殆ぎすたりました。けれども日本人だけは白人のクリスマスの樣に廻り歩いたり致します。色々な御馳走をして祝つていつも忙しい人でも御正月だけはゆつくり休みます。

◇

武富　あさ子

私は一昨年前のお正月には日本に居りました。こちらはクリスマスは面白いけれども日本では元日は皆さんの所にいつてこつちではお正月は面白くありません。お正月が面白いのです。私は一昨年前のお正月は、色々のことをして遊んだりかるたをしたりしました。

◇

各尾　環

一月一日はお正月です。皆樣は日本語で新年明けましておめでとうございますともうします。日本では正月に色々なプレゼントをあげます。アメリカではクリスマスにいつてあちらこちらにまはつて色々なプレゼントをあげます。日本人達はお正月にごちそうをたべます。

◇

杉山　正夫

お正月ハ新シイ年ヲムカヘルノデオ出度ウゴザイマス。ソレデスカラミンナウシロトヲ休ンデドチラノ家デモゴチソウヲコシラヘタリオ餅ヲ食ベタリシテオ祝ヒマス私共モ學校ガオ休ミデオ正月ノ來ルノヲ樂シンデ待ツテ居マス。

◇

今井　あや子

一九二七年ハ鬼ノ年ノオ正月申シマス。正月ニハ餅ヤオ雜煮ヲ食ベタリシテ大ミソカノ晩ニハ、ミンナガヨウちで一ばんたいせつにしなければなりません。

◇

藤田　幸

御正月は年の一ばん始めの月になりますから一ばんたいせつです。正月の元日は皆家で祝ひます。日本人はクリスマスよりも御正月の方をもつと祝ひます。御正月にはみなお友達の家におで御馳走に行きます。或る人は内で御馳走を致します。今年は鬼の年です。それですから日本の年始狀には、大抵鬼の繪がかいてあります。

◇

若江　清野

一九二七年、お正月近くになりました。こゝしのおしまいの日になりますと皆そこにでてかみをなげたります。十二時になるとかねがなります、かねがなりてしまうともう正月です。お正月の朝は皆んなきれいなきものをきます。

◇

壇田　文子

私はうさぎがほしいです。うさぎのかごをこしらへてもらいます。しいろうさぎがほしいです。うさぎさあそんでおあまれて行きます。それからねるときます、うさぎをほうほうにつころもつくつていただきます。うさぎはだいすきです。

◇

武田　得子

兎は足が短いですが大變に走るのが速いです。兎の耳は足と言よのでありました。

「そこらから象の王よ、私の言ふことをよくお聽き、其方たちはたいへん惡い奴等ちや、さうして其方たちは、あの月の湖に行くやうな惡いことを思ひつゝ、以後其方たちは、あの湖に近よつてはならぬぞ、あそこは、私の家來たちの住むところちや」

◇

これを聞いた象の王樣は、びつくりして尋ねたのであります

「これは不思議ーいつたい、お前たちは誰なんだ」

「私は、お月樣のうちに住んでる兎ちや、私はお月さまのお使としてそのお言葉を傳へに來たのぢや」

しかし、象の王さまは、なかゝ兎の言つたことを信じませんでした

「そうですか、ぢやお月さまのおつしやつたことをよく聞かせて下さい」

と、象の王さまは言ひました

「聞かせてやらう、よくおきき、其方は、昨日家來たちと一緒に、私の湖に行つて、澤山の兎を怪我させてしまつた、ださいふことを知らないのか、あの兎たちは、みんな私の家來、もし生命が惜しいなら、以後さんなことがあつても、必ず、あの湖へ行つてはならぬぞ、さおつしやつたのぢや」

と、兎も一生懸命でありました。

「なるほどそのお月さまは何處においでしやす？」

象の王さまは、あひ變らず偉じようさはしませんでした。

「のんさうな奴ちや、お月さまは、湖においでになつて、其方たちの家來たちに、ひどい目にあはされた兎たちをお慰めになつてゐらつしやるのぢや」

と、兎は答へました。

「そうですか、そんなら、わしをお月さまに逢はせて下さい」

象の王さまは、又云ひました

「ではそち一人で來るのぢやぞ」

かういつて兎は、王さまを、湖のほとりへつれて行きました。丁度その時は夜でありましたから、湖に、美しい月光が、はつきりと、うつつてゐました。

「こらん、お月樣は悲しさうに何か物思ひに沈んでゐらつしやるではないか、そちはそつと御前に行つて、御挨拶をすませたらどうぢや」

「そうですか、そんなら、さつさと去つたがいゝぞ、もしもお月樣のお考へごさのお邪魔でもしようものなら、お月さまは、怒りなさいましたのぢや」

と、兎はひどくおこりつけたのであります。

「さうぞおゆるし下さいまし。わしが悪うございました。では早速立ち退きますから……」

象の王さまは、ぷる〜〜ふるひながら湖にうつるお月樣の影に、大急ぎで家來たちを、つれて、ここもなくたち去つてしまひました。（おはり）

兎のお話

神崎　俊子

今年は兎の年です。兎は月の上でお餅をついていました。そして兎がおもちをつくのがすんだら馬としかさ羊と山羊や色々の動物をよびました。動物なんか月の上にいかれませんでしたそれだから兎がひもをおろしまして、その生命はおろか、恐れながら大王陛下の身に……」

と、悲痛な言上をしたのであります。

王樣象は、家來象の、容易ならん訴へを聞かれ、早速ここから引越さねばならぬと考へました。

そこで、大勢の家來象達を集めて、

「さて、皆の者、私はこれからこの國の南の方へ引越すことにする其處には、大きな湖が、象の奴等をおさしつけて、二度と、こんな酷い目にあはないようするさまた他の一匹が、

「何かい〜工夫でもあるかね」

「あゝある、かうしたらどうだ」

先づ一匹の兎が、

「さうだね、君たち、毎日こんな具合ではさても怖くて、こんな所に長く住んでをれないぞ」

すると他の一匹が

「しかし、親代々住みなれたところを、そんなにやす〜〜と立ちのくわけにはいかない。それよりも、何かい〜工夫をして、象の奴等をおさしつけて、二度と、こんな酷い目にあはないようにしやうぢやないか」

「こらん、お月樣は悲しさうに何か物思ひに沈んでゐらつしやるではないか、そちはそつと御前に行つて、御挨拶をすませたらどうぢや、さつさと去つたがいゝぞ、もしもお月樣のお考へごさのお邪魔でもしようものなら、お月さまは、怒りなさいましたのぢや」

と、兎はひどくおこりつけたのであります。

「さうぞおゆるし下さいまし。わしが悪うございました。では早速立ち退きますから……」

象の王さまは、ぷる〜〜ふるひながら湖にうつるお月樣の影に、大急ぎで家來たちを、つれて、ここもなくたち去つてしまひました。（おはり）

童話　兎の智惠

象退治の幕

森の中に、一匹の大きな象が澤山の象の王樣となつて住んでをりました。

ところが、幾年も幾年も、早くなりました。

さ、申しますのは、近頃引越して來た象たちのために、兎共の方では象共の大きな足に踏まれて、頸骨を折つたものや、足をくじいたものがたくさん出來たのでした

「さうも困つたことになつた、こんな具合では、長くこゝにゐられない、早く、こゝより、所を見つけて、引き越さねばなるまいほんとうに惜らしい象共だ」

兎共の方では、毎日悲しい日ばかりでくらしました。

ほとりには、澤山の兎が住んでをつたのであります。こゝに一匹の大きな足に踏まれて、頸骨を折つたものや、足をくじいたものがたくさん出來たのでした

「さうも困つたことになつた、こんな具合では、長くこゝにゐられない、早く、こゝより、所を見つけて、引き越さねばなるまいほんとうに惜らしい象共だ」

兎共の方では、毎日悲しい日ばかりでくらしました。

その日も、大勢の兎が集まつて相談をはじめたのであります

「さうだね、君たち、毎日こんな具合ではさても怖くて、こんな所に長く住んでをれないぞ」

すると他の一匹が

「しかし、親代々住みなれたところを、そんなにやす〜〜と立ちのくわけにはいかない。それよりも、何かい〜工夫をして、象の奴等をおさしつけて、二度と、こんな酷い目にあはないようにしやうぢやないか」

「こらん、お月樣は悲しさうに何か物思ひに沈んでゐらつしやるではないか、そちはそつと御前に行つて、御挨拶をすませたらどうぢや、さつさと去つたがいゝぞ、もしもお月樣のお考へごさのお邪魔でもしようものなら、お月さまは、怒りなさいましたのぢや」

と、兎はひどくおこりつけたのであります。

「さうぞおゆるし下さいまし。わしが悪うございました。では早速立ち退きますから……」

象の王さまは、ぷる〜〜ふるひながら湖にうつるお月樣の影に、大急ぎで家來たちを、つれて、ここもなくたち去つてしまひました。（おはり）

謹迎諒闇新年
桑港之部

桑港日本人商業會議所 日本商品陳列所
渡邊久克
田島安太郎
奥野庸太郎
エムカラドレー
長谷川徹

横濱正金銀行 桑港支店
小島久太
長松宗一
本村良則

北米貿易株式會社
社員一同

在米日本人會
瀧本爲三
尾崎善藏
エム・エー・ミツチエル

桑港日本人會
二宮利作
齊藤重光
片山倫
市橋倭

東洋貿易株式會社
宮本孔信
吉岡金太郎
辻坂震三
白井和三郎
中村儀一
古屋都治
野上清一郎
瀨古音松
藤井平次郎

共同消費會社
東ケ崎菊松
東ケ崎潔
金澤芳太郎
岡本春三
福留與之丞
長崎興仁
加藤眞樹
吉岡彌之助
山城三郎
大川福松

淺野物産株式會社 桑港出張所
大河薫
津山昇
マーサーアンダソン

野中商店
野中正一
長森富太郎
松野寶樹

太平洋貿易株式會社
日本支店
杉原軍造
新納吉太郎
小林武平

本店（ABC順）
小豆澤兵重
藤本百太郎
藤岡孝一
濱井隆登
原田泰
星文太郎
石田四郎
甲斐龜八
片峯健造
萱原清一
松藤しげの
本谷權六
中西村市
野村勝太郎
大岩松吉
坂倉憲治
里田直機
里田依三
鈴川玻璃
高木夏子
土屋澤子
山崎孫一

櫻府精米所
藤本幹一
濱武一郎
平島音松
小林茂
松本長次郎
三浦パーシー
西政市
野村堅司
太田英一郎
小野誠一
津森安次
吉田芳太郎

中央貿易株式會社
瀧井千尋
野田哲男
福井常次郎
中嶋醇
竹森松太郎
窓原鷹治
外店員一同

在大阪
香川常吉

萬藏貿易商會
柴田勝助

貿易商
望月滋司

内外貿易商會
宮川金太郎

宮嶋貿易商會

ドラゴン商會

源商會
笠井繁治

歌崎商會

陰山鐵次郎

山崎友光

片瀨太門

關口新太郎

三協ライスミール
石崎豐作

澤田文治

カナダサン保險
谷勇

東洋種物會社

エス佐藤美術店

謹迎
諒闇之新年
勸業金融
株式會社
桑港
フラットアイオン
ビルディング

グリー街一五三四
吾妻洋食店
白川覺七

グラント街五四二
竹の家
電話ダグラス八四八

日の本商會
石井金治

フサルモア街一六二四
岡田輸入商會

大和商會
黑川松三

日本商會
加古得哉
富田勝重

ウエスタンステート
輸入商會
有賀子之吉
林房雄

杉原商會
小林與四郎

東洋バサー
薩山修三

スター貿易商會
桑港グラント街三一一

ミカド商會
岡本新吉

遠藤商會
遠藤新之助
糟谷好治
山地四郎

藤井肥料スプレー商會
藤井澄人

小田運送所
山本明
小田勝兵衛

諒闇中に付年始の禮を缺ぐ

【メリスビル】

アイデヤ商會　琴浦朝楠　第二街オーク街角
ホーム グロサリー　山崎稔　シー街二〇七
コーナー魚店　横飛國光　第二街シー街角
中村商店　中村文太郎　オーク街二〇八
エコノミグラージ　西原正市　第二街二一四
エキスプレス　永尾嘉市　シー街一一四
タイヤ・バタリー　中村信次郎　第二街二一六
メリスビル・マーケット　井手林　第二街オーク街角
コルサ魚市場　濱橋誠二郎
エフ・ピー洋食店　福田義臣　福田義範　吉川、渡邊　店員一同　第二街ミシー街角
檜木洋服洗濯所　檜木才次郎　東洋ホテル　佐々木三郎　シー街一一四
歯科醫　永井正登　エルム街一二〇
東洋商會　假家、小田部
沖本商店　沖本象吉　店員、齋藤四三
熊野週造　第一街三二四
山本又市　第一街三二〇

ホワイトスター洗濯所　天川弧　第二街二一八
平岡才次郎
内藤嘉記
矢野貞彌
島崎雄三
吉村貞次
ユバー・シター　橋本會一
產婆　橋本ヤスノ
日米新聞支局　中村信次郎
藤本芳太郎
濱本友一
楠巧太郎
大田富太郎

【コルサ】

安部平三
木下善三郎
林小太郎
岡本秀雄
妹尾權史郎
大野幸四郎

【チーコー】

石川種男

【コートランド】

コートランド日本人會　會長　坂田龜喜
コートランド日本人會　副會長　松穗馬太郎
農事部長　坂田辰喜　郵函三五八
學務部長　岩倉貞淨
幹部　橋津甚一
橋岡床　橋岡停一　同のぶ
太陽館　木庭末七
日本商會　上杉作一
サン洗濯所　大木勝太郎
郵函二九六　あさひ商店　店主　山根信藏
肥後屋旅館　星津商店　星津常喜　郵函三五二
日本旅館　稻葉鐵造

佐藤信元
東洋商會　鳥海才助
高松三郎
同　たまの
東西洗濯所　大空形次郎　今本初太
郵函三四六　藤居商店　藤居平吉
郵函三三六　日の出商店　白石市太郎
郵函三七八　佐々木商店　佐々木新藏
郵函三四一　浮島亭　甲斐原彌三郎
長堤支那料理　支那人經營
フード郵函八一　井神信隆
フード郵函八一　信開幾次郎

宮川壽吉

【バカビル】

戸神椿市
野口榮治郎
古屋泰治
小村小太郎
南出常楠
林德太郎
東山吉次郎
齊藤長造
間佐古虎松
見田宗二
篠崎新
塩崎啓三
巽一夫
山中茂一

中村一
守谷峻
吉村松太郎
久岡寅之助
佐野增造
福田保　郵函一二四
松尾熊一
佛教會開教師　官田道朗
同　泰子
美貝教會牧師　丹羽成一
松田ステージ　松田源一郎
市本ステージ　市本利一
西本ステージ　西本太郎左工門
和歌山旅館　中村兄弟
木本旅館　江崎佐太郎
バカビル旅館　奥村政楠
バカビル魚店　松尾儀三
ミカド魚店　島田權藏
同　清
同　勇
大久保卯之助
同　進
藤本床　藤本常吉

増田勇吉
外一同
中村竹楠
キャンプ一同
エー・ビー・シー商會
店員一同
中村商會
中村八重楠
中村勘之助
中村勘之右工門
林長之助
日本料理　浪花亭
南出磐雄
同　キク
日米新聞　バカビル支社　小畑鐵五郎

【ウインタース】

蓬萊商會　店員一同
瀬田旅館及貸自動車　瀬田由松　瀬田重吉
和歌松旅館　上野卯吉　同　儀三
西川丈八
川本若一郎
磯村助一
市川龜一郎
安井兄弟
藤井正男

山本由助
高橋岩楠
川本森楠
辻善七
相良嘉吉
藤本仲右衛門
下村伊太郎
キャンプ一同

【エスパート】

追野銀次
吉美彌十郎
市川莊吉
鈴木永治
松本寅吉　松本土地株式會社
鈴木周五郎
平野文太郎　ウサリート市
松村安松
相良秀三　クーベー

【キャリナス】

室谷卯之助
室谷政太郎
宮崎市次郎
出口司馬大

【モントレー】

明渡柳助
馬場岡政雄
松谷留楠

【ゲインダ】

二間瀬宇助
松谷常吉
增田喜平治
古田宗右衛門
畑中寅造

【ラムジー】

一民菊次郎
入江眞澄
松下春吉
一ノ口長作
中川健三
川守田英二
新崎平三郎
上河内德一
堤常太郎
小宮柳太郎
辻本房之丞
三浦辰次郎

【スースン】

增田多一郎
山畑信太郎
湊谷三郎

吉野秀造
小島忠鄕
宮井武雄
堤本善之助
內本善之助
貴志喜一郎
江田市郎
樋口彦七
江田善次郎
服部關三郎
一民菊次郎
川守田英二
一ノ口長作
小宮柳太郎
三浦辰次郎
增田多一郎
湊谷三郎

眞中留吉
眞中安松
宮本熊彦
中谷寅太郎
中井仲右工門
尾田善次郎
尾田惇一
小澤勇吉
菅野定之助
角貞次郎

魚類鑵詰業
シイプライド鑵詰會社
新納吉太郎
尾田常太郎

モントレー市營埠頭　パシフ井ツク　共同魚市場　郵函T　電話三六八

高等旅館　東ホテル　フダムス街四三八　東卯之助

瀧川幾太郎

モ半島建築貸金協會　Monterey Peninsula Bldg. & Loan Ass'n.
ヒヤースントウル鐵物店　Peirce & Towle Hardware Co. Alvarado St., Monterey, Calif.
ゴールドステイン吳服店　GOLDSTINE'S, Monterey, Calif.
パレスドラグ雜貨店　PALACE DRUG CO., Monterey, Calif.
ハイドリツク寫眞師　Heidrick & Heidrick Monterey, Calif.
モントレー青年會
支那料理　廣東樓　ワシントン街

沿岸アブロニー會社　江崎藥之助　瀧川幾太郎
アーケード百貨店　The Arcade Department Store　Blum & Schwartz, Props.
フオード代理人　ダブルユー・イー・スプーン　MONTEREY GARAGE　W. E. Spoon, Prop
ホルマン百貨店　HOLMAN'S DEPARTMENT STORE　Pacific Grove, Calif.
塩崎清吉
崎野良介
瀧川藤一郎
土山さと
土屋敏太
高本市太郎
高田梅樹
內田角太郎
植中武人
渡邊太重郎
三浦常太郎　【伊藤貫一事】
田端虎吉
奥村彌五市
日會學園　三宅光次郎
小野六松
小谷源之助
兒玉節二
安田甚內
小川金治

【ロスアンゼルス】

羅府ユニオンパシフ井ツク　猪俣宗敏
忌中に付年始の禮を缺き申候　武智一馬
松浦洋服店　松浦毛佐次郎
低加州エンセナダミツシヨン牧師　小林彦次郎

小生歸國中の處大正十五年十二月廿四日歸米致しました舊に倍し御引立の程願ひます
一月一日
加奈陀サン生命保險會社
永森清一郎
427 N. Westmoreland Ave., Los Angeles, Calif.
Phone. Wa. 8567

短篇小說に就て

紀一郎

所謂、短篇小說といふものを定義すれば「最大のエンファセスを用ひ、最高限度の知さに於いて、一つのナレーティブ、エフェクトを現す物語彼である」といふことになる。

■ナレーティブ、エフェクトには三つの要求がある。(一)動作(二)人物、(三)場所、故に一つの事件を表す物語彼としての短篇は、此れ等三要素の何れかを内に果される。(三)シーンの變化は殆どない。(四)其中に唯一つのインプレッション又は強いエモーションを含む。(五)省き得る限り省く。(六)人生途上只一つの經驗だけが盛られる。(七)構想は複雑でない。(八)短時間に讀了し得るから感銘が強い。(九)冒頭の一句が凡てを支配する程力強い。(十)目的が方向に向はんとするかを示す。

■是れに依れば、長篇と短篇との間には、質の問題ではなく、量の問題である事が分る。世には短い長篇もあれば短篇もある。「短篇」といふ特異の型を創造した云はれるポーに從へば、「短篇はワン、ストロークでトータライティを現すもの」であるとし、我々の多くの經驗の中の只一つの經驗、それも切放したものでなければいけない。

■故に短篇は、長篇の一節であつてはいけない。續きものゝ單なるエピソードではいけない。短篇を續けるものとして、「引延ばしてもなほ」の感を起すものは、他のものにまへて、「引延ばしてもなほ」の感を起させなければいけない。

■長篇は人生の種々なる經驗を盛り、是れに系統的なる關係を與へたものである。長篇は、同時に大因果を一作家は故に人間としての眼き經驗と深き思考力を必要とする。

■短篇は人生の一部を切り取り、是れに系統的なる關係を與へたものである。長篇は故に人間としての眼き經驗と深き思考力を必要とする。

■是れに反し短篇作家には若くして名をなしたものが多い、ポは四十一で死に、キップリングが二十で「小山から」を發表し、龍之助は廿一位で、「羅生門」によつて一躍名を成した。其代り年寄りには短篇は不向きだ。さきへ云はれつゝある。

■若者は人生を纏めて眺める事が出來ない。唯その前を、のやうにテンポ腹をやぶり刺される部つれば紙けを、あの眞理を晴れて最後の策をする。

■此の三要素を具備せるとは長篇又は中篇とは、同一であるが、形に於いて此三つが獨立の形に於いて運むとが多い。然るに短篇に於ては三要素の一つに重心を置き、他の二つは是を生かさんが爲めの附隨物たるの形をとるを以て特色とする。

■故に先づ眼をさる前に、一つのナレーティブ、エフェクトを表すに最も適當なる要素の一つを強調し、力をそれに傾倒して、此の浪費を省き、目標が達した瞬間に筆を擱かなければ効果が薄くなる。言葉を替れば、フォーカスを決めると同時にタイミングにも注意しなければポカしたものが出來る。

■「最高限度の知さ」の爲めに、出來るだけ少い人物と出來る事を、出來るだけ狹い範圍に取扱ふことを要する。一つの焦點を表すに二人で足りれば無理に、それ以上の人物を煩はす必要がない。彼の人物が同じ場所を一度通つて用足りれば二度通らず必要かない。「目標」を現すに必要な爲以上の念入り物であつてはいけない。

■同時に「最大のエンファセス」も「知さ」と同程度に必要である事を忘れてはいけない。「部屋が汚い」「景色はきれいだ」「飯は美しい」だけでは、知いだけでは好いかも知れないが、其處にエンファセスがない。大事の目標を失する危險が伴ふ。其處に加減は、我作者が絶大の苦心を要する所だ。

■此の星本年の運氣は大吉であつて、種々雜多な不幸が重ねて襲來する。即ち、一難又一難の年である。故に百折不屈の精神を持ち、仕業主義を奉じて奮闘をつゞけなければ、遂に成功を要する。猪突は何より張るとそれこそ滑來の幸福をも逃して了ふ。兎に角本年は精一杯汗を流して働くべし。

■此の兩三年吉運に惠まれた此の年の人は、今年から一轉して逆境に泣かなければならない。三進も行かず躓く中大いに悩み、二進も行かず躓く中一大の油斷もなりません。萬事を遂ぐる事であらう、が、然し中一大の油斷をすると夫こそ大變、忽ち逆で短氣を出しては不可ない。

■此の星本年の運氣は衰運で、あつて、種々雜多な不幸が重ねて襲來する。即ち、一難又一難の年である。故に百折不屈の精神を持ち、仕業主義を奉じて奮闘をつゞけなければ、遂に成功を要する。猪突は何より張るとそれこそ滑來の幸福をも逃して了ふ。兎に角本年は精一杯汗を流して働くべし。

■此の星今年の運氣は吉七分、凶三分といつた形で外見は非常に盛大であるが內實はしばしば暗礁に乘上げて苦しむ事であらう。即ち內輪に不快な出來事があり勤人は勤務先で同僚と衝突してくびになり、番頭さんは多年の功を我から捨てゝ主家を飛出すと云つたやうな變化がある。

■昨年同樣此の星の人は本年も大いに幸運で、萬事わが意の如く、從來樣の下の力持をしてゐた者は今年はじめて明るい天地に乘出し、更にトン〳〵拍子に成功する、家庭は極めて好評嘖々、それは素晴らしい人氣に包まれる、實に羨ましい大吉の年だ。

■此の星今年の運氣は大吉であるが內實は苦しい事であらう。即ち內輪に不快な出來事があり勤人は勤務先で同僚と衝突してくびになり、番頭さんは多年の功を我から捨てゝ主家を飛出すと云つたやうな變化がある。

■此の星今年の運氣は吉七分、凶三分といつた形で外見は非常に盛大であるが內實はしばしば暗礁に乘上げて苦しむ事であらう。即ち內輪に不快な出來事があり勤人は勤務先で同僚と衝突してくびになり、番頭さんは多年の功を我から捨てゝ主家を飛出すと云つたやうな變化がある。

■此の星本年の運氣は大吉であるが內實は苦しい

諒闇中に付き年始の禮を欠く

フレスノ市（申込順）

弁護士 大河原富太郎
富田勘三郎
坂本節吾
野津佶
小澤周
村谷礒三郎
上丸子三二
白山紀一
掛部祐一
山本孝夫
パナマ洋服洗濯所
光原玉場
大野たか
フレスノ肉店
片山壽太
ホーム藥店 尾澤寛次 水上善吉
香本貫一（フレスノ書店）
池田杉松（湖月堂）
新井珈琲店
荒木直次
山田秀雄
伊藤吳服店
寺前清四郎
スター靴修繕所
柏屋菓子舗
谷川清
大春堂
三浦恭助

結城珈琲店
中井勝次郎
田中洋食店
平智山
濱住玉場
フレスノ肉店
中元珈琲店
田村政一
名取久明
毛保健作
竹本政市
桝田復一郎
南海屋旅館
富士洗濯所
坪田壽郎
河合伊三太
みかどホテル
やまとホテル
百瀬眞澄
玉屋時計店
大野信吉
陳川喜市（ライオンホテル）
西田市次郎
陳川喜市
隅田寶一

高田洋食店
内山義則
小林富三郎（オペラホテル）
吉田眞作
みかど洗濯所
山根岩吉
横田唯一
山本吉太郎
小松三之助
白井順一
鳥井賴業
加藤安太郎
福島雷次郎
安孫子博
河府隆治
村上七郎
西村完一（帝國ホテル）
原田權四郎
濱中洋食店
逸見商店
大草自轉車店 佐伯六郎
福田珈琲店
河本兼吉
長谷川角藏
山見坂勇三郎
活動寫眞館（ライアン）
中村善平
高山友一
有江正次
馬場林次

安平產院
關舍武一
荒田商店 荒田宇吉
荒田吾市
東海林民次
町田保
安藝商會 桑本直一
店員一同
福島熊藏
濱本富太郎
旭旅館 高木朝信
長岡重彥
五大院正行
江田產院
宮尾タイヤ店
佐古幹三郎
三本木喜藏
安保亭
深川吉十郎
加田縫裁女學校
日下生廣兵衛
フレスノ縫裁女學校
増田呉服店 増田德次郎 矢倉忠夫 石瓶武一
神山寫眞館
歯科醫 谷田部保
中加歯科醫院 吉田壽

布市佛教青年會
布市 三島球場
花月亭
布市 林病院 林哲
布市 小此木病院 小此木文九郎 安藝龜三郎
リバテー グラージ 布市ジー街八壹壹

村島代次郎
フレスノ印刷所 松本弘整
大野又一
ユー・エス洋食店 松山友藏 佐原利助
丸○亭 主人 江後
大和亭 山田才吉 廣川浦助
布市支那エフ街九二五 大日娯樂場並に玉場 河沼

市場丑象
逸見商店 逸見莊一 同 梅一
オー・ケー・レストラント 日下芳藏 日下鐵太
日米フレスノ支社 龜野景治
大正軒 布市支那アレー街 國吉
謹迎新年 神川商店 神川理一 神川益一 神川幸一 神川馨 刀納友次郎 外店員一同

謹迎新年
ドイサトスエウ
ジーラグ
カーン街五一〇〇
電話二一五〇
筒井 溝手 宮戸 竹三 城口 吉川 辻本

謹迎新年
フレスノ市 天賞堂本店 東京藥店 店主 利行泰藏 利行とみ子

新年
布市佛教會 京極逸藏 沼田智圓
同學園 奈良靜馬 藤井龍智 中新井康 小倉康性

ローズ曹達水製造所 木村久太郎 森本馨
▲フレスノ附近 中央旅館 江本虎次 奥田芳三郎 中川久太郎 星子寅太 荒川庄六 中田重太郎 宮本軍造 松原澤一 遊佐敬三 風戸治作 服部元次郎 三上壽一 谷口久松 神塚完一 石井耕四郎 川口完吾
▲クロービス 粟屋義雄 高田虎三郎 宮本愼次
▲カーマン 森田德顯 小川幸内
▲マデラ 望月商店 竹野儀次郎
▲デルレー 酒井商店

上瀨野商店 岩本一三
木村旅館 木村春藏
藤原靜夫 渡邊豆腐店 伊井鋪一
太知兄弟 小田貞彥 白川時夫
ファラーグラージ 平砂光次
二宮音松 本田彌吉
▲セルマ 松井長三郎 伊藤半七 田上千五郎 井手床 もみぢ屋 小山丈藏 鳥井只喜 北谷健太郎 上村重太郎
▲キングスバーグ 水谷商店 水谷京次郎
古橋商店 古橋高一 古橋敏雄
加藤商店 加藤孝一
森長作
近藤商店 近藤友一
金永旅館 金永軍一
▲フワラー 林田旅館 林田吾市

諒闇中に付年賀缺禮
中加地方

【パレア】
仁田米藏　北原市藏　宮本笹一

【レモンコーブ】
末廣長助　米村新太郎　坂本政平　眞砂勝吉　橋本伴藏　芥川繁太郎　廣珍樓　小山忠次郎　永井仁五郎　梅月　松本宇一郎（エキスター）　梅谷經太郎（エキスター）　光岡旅館（光岡豐太郎）　野澤商店

太田床　小田喜三郎　藤井茂美　新谷吉藏　流玉次郎　福岡屋旅館（吉岡千代吉）　高野石助　田中商店　大成旅館　田中長藏　松重床　高庄三郎　池本球場　胡田信太　茶森民五郎　熊高竹市　堺商店

【ダイニューバ】
山本寬次

【アイバンホー】
畠田澤次郎　津森文太郎　高尾種一郎　青木一郎　上野惣一　白澤才吉　大石繁治　山口壽平　三笠仁平　福島群一　渡邊商店　前田寬次郎　生島伊永助　石丸床

【バイセリア】
吉田清喜

【リードレー】
ローズ洋食店（吉嶺カ）　石田商店　兒玉次太郎　泉五郎　嘉戸治太郎　和氣圓平　佐々木傳六　井原孫三　中島擴

【リンゼー市】
加來商店　ミカド洋食店　山本支那料理　鈴木安之助　中村比太郎　坪井幸次郎　園田竹次　赤木音右衛門　平山徳藏（エキスター）

ビヂヨー活動寫眞館（福田・中道）　渡邊峯太郎（Rt. B. Box 37-A.）　一山旅館　中村愛藏（バイセリア・ホテル）　重富留次郎（アメリカン洋食店）　鈴木・茂（ガーデン洋食店）　白澤才吉

【ハンホード】
兒玉旅館（品川美之吉）　信定商店　吉田旅館（吉田文吾）　高橋旅館（高橋源一）

【アモナー】
安齋龜藏（ストラモーア）　廣珍樓　芥川繁太郎　小山忠次郎　永井仁五郎　梅月　野澤商店

加米屋旅館（電話六八四丁・下迫）　OK洋食店（小橋・本野）　大谷商店　宮島ホテル　宮島球場　大谷甚太郎　中村德一

歡迎　北京樓（電話七六九）　田川作太郎　政井時計店

羽原末吉　松井秋登　肥和野佐太郎　藤田與四郎　竹井金次郎　石坂三平　和田商店　能田富貴　中内佐儀　片岡裁縫所

謹迎新年
ハンホード市
大亦商店
店員一同

【デラノ】
味園榮之助　河田市太郎　河野吾八　酒井金一　上原藤二　藤澤周作　瀬戸口勇作　吉村謙作　上田商店（デラノ町）　上田勝藏　有田小二郎（ミートマーケット並に洋食店・デラノ町・【郵函】六二七）　坪井佐一郎　矢野秀太郎（デラノ旅館並に魚店・デラノ町・【郵函】五一七）

キングス郡日本學校　アモナ補習學校　平澤俊一郎
デラノ町　新田旅館　新田一郎
デラノ町　農産物仲買商　尾形正
デラノ町　ダン・ホテル　鈴木宗三
デラノ町　球場並に雜貨　河田武士
デラノ町　支那料理　東京樓　古内佐助
デラノ町　球場ランチカウンター　片野隆造
セルベスタ・ランチ　田川藤人

△ウエスト・サイド・グロサリー並にミート・マーケット
安部麟平　堤庄平　鈴木宗三（デラノ町・【郵函】A・A）

【ベカスフィルド】
實藤協　富狹只市　田村芳太郎　大熊範一　加藤みよ　紺野進　松浦八十吉　西川三次郎　池元忠次郎　土山米次　高見甚吾　柏木平三郎　天野豆腐店　由谷作藏　三輪惣三郎　下野才吉　皆本喜一　高田彦一　福田榮次郎　田中サメ　堀源兵衛　越智與一　田中嘉太郎　藤本光藏　上岡秋太郎　釜賀晴義　新谷魚店　西村賢市　藤貞和市　米村德松　津山彌三郎　木下友一　東隣元　伊藤宗太郎　松田勝江

三輪改次郎（タフト）　高田桂助（タフト）　脇田直次（タフト）　妹尾瀧衛門（タフト）　福島直吉（タフト）　廣島屋旅館（ベカスフィルド市ケイ街二二二九番・館主藤井助次郎）　丸金球場（ベカスフィルド市二十街一三〇四番）　木谷房次郎　木谷一馬　旭商店（ベカスフィルド市エム街一九二八番）　岡原要助　藤貞美髮館（ベカスフィルド市二〇一九番）　奥本旅館（ベカスフィルド市二十一街一四一〇番）　奥本谷吉　坂本竹吉　橋本喜之助（ベカスフィルド市エル街一九〇五番・ベ市洋食店）　橋本貝之助　東彦太郎　寺本由松　石山商店（ベカスフィルド市エル街一九一九番）　石山安次郎　川俣芳太郎　外店員一同（電話一〇八三W　自宅二二七五）

謹迎新年

桑原龜太郎（フエロース）　加藤文武（フエロース）　山本吉五郎（フエロース）　松浦十吉（ワスコ）　久保山寅藏（ワスコ）　間野秀千代（ワスコ）　中原幾平（タフト）　石川政夫（タフト）　片山柳吉（タフト）

謹迎新年

【オグデン市】
下前松太郎　松末和吉　松末九一　井芹順藏　向井健次郎　小野幸太郎　高橋猛（ローヤルクリニング主人）　ローヤル洗濯所　小田醫院　岡本萬六　岡本正策　鹿嶋米藏　高橋儀市　村上甚吉　櫻田治作　高橋爲吉　大石光二　佐木勘太郎

諒闇中年賀缺禮
州外の部

【ソートレーキ】
飯田四郎　絡機時報社　日米新聞　塘湖支社　田々井昌　井上床　井上友作　仝琴代　關邦人　山口清次　芝竹次郎　平澤邦時　中野平次郎　藤井肇（アイダホ・ナンバ）

田原耕（西第一南街一三六）

城島豐吉

▽ニユー・エラ自動車修繕所並に附屬品販賣店
井原三郎　吉田嘉七（南テンプル街三七・電話【ワサッチ】七二一〇）

謹んで新年を迎ふ
昭和二年正月元旦
ユタ州奥殿市
伴假家商店々員
假家卯太郎　仝千里　杭田龜一
宇野八郎　沼本友一　坂田德一
沼本千年　坂久五郎　宮城嶋榮作
畑平太郎　矢野繁則　明德林太郎
ミセスロー　山内義雄　榮盛清
菅野アイダ

諒闇中に付年賀缺禮
サクラメント

佐藤力太郎　稲垣保險事務所
宮川常三郎　竹本藥店
池田喜平　第四街 佐藤靴店
田口高明　花田長一郎
池田益太郎　小林產院
東西商會　伊達裁縫所
崎山商店 店員一同　高橋市之進
東京泉照店 大河内光行　御菓子司 玉川堂 岡賢之進 岡日吉
ウエスタン・グロサリー 林甚之助　第三街 リバティ洋食店
德永ソーダ水製造所　三浦花店
シンガー・ミシン店 備後三郎　時計店 梶田德市
岩鶴一雄　中田洋服店
關東旅館 瀨戸辰五郎　山陽自轉車店 柿並岩吉
中谷十一　キャンデー製造所 飯島善太郎
神原茂音武　板野雅夫
末本勤　櫻府野菜耕作者組合 三戸川禮太郎
紙育生命保險 片岡貫一　原グラージ
阿部兄弟商會　第五街一五一二 西村アパートメント 電話メーン三三二六W
原本治作　丸三商會 鷲野〆太
尾崎兄弟商會　船橋商店 店員一同
酒井藥店 店員一同　永山蒔九郎
大町正男　ときは商會 人見兄弟
アメリカン 鳥類店　特選種物取次業 中山巖
日本鳥店 南伊八　メーン藥店 店員一同 電話メーン三八五
松月堂 吉田信一
スター・クリニング所 一同
丹原柾夫　時計師 府川敬介
砂原音吉

アメリカン床 須賀和市　和才政治
森本靴店 森本鉞　須藤アパートメント
第四街 中央靴店　日米商會 林眞
吉田寫眞館 井上健二郎　坂本タイヤー修繕所
四條貸間 四條由平　第三街 原田靴店
櫻屋菓子司 中村金次郎　株式會社 OK家具商會 店員一同
時計店 降矢甚之助　青木樂器店 店員一同
リバテーグラージ 中田寅松　株式會社よろづ商店 店員一同
OKルーム 家始許藏　仙臺館 伊藤たきを 電話メーン二七三八M
第三街 鈴木床　朝日時計店 一同
第三街一二一三 川崎靴店　K街三二六 大陽商會
蟹江產院 助手 中島キミ　K街五二七 ワシン洋食店
星崎產院　キースター裁縫學校 末川金一 同 藤技
猿渡產院　鈴木賢市
クレセント洋食店 林勇治　大橋廓道
富士見館 北裏　山平正人
サクラ藥店 赤星善吉　横濱床 西山藤一
コルサ・ハウス　木村床 木村圓太
バタリー商會 橋坂兄弟　フリスコ洋食店 山本龜太郎
ステート洋服店 加藤光一　櫻府味噌醬油製造所 富田登
石井一郎　第四街 吉村菊之亟
ダイヤモンド・ホテル 寺本・德成　スター洋食店 森光眷一
ダイヤモンド・ホテル 西村爲次郎　ユー・エス洋食店 桝田利吉
サン洗濯所 一同
サクラメントバレー日本人會 唐川鐵次　エス・エム洋食店 新井重平
キヤピタル農產 株式會社 社員一同　K街三二九 齊藤正勝
櫻會 清水碩山　K街三二八半 森脇德市
今西實定　床屋 光原與八
谷口信隆　ゼー街コーヒー・ハウス 增田永藏
增永大見　第三街一三〇 久保田到
フランク・バーグ 山田環　大北商店 木村茂
ライオン藥店 三木雄造
フォード たなべ
株式會社 サクラメント 製氷會社 社員一同　株式會社 サクラメントグローアマーケット 社員一同
野尻農產會社 社員一同
ダイヤモンドグラージ グラージ員一同
第三街 菊本新太郎
ステート洋服店 加藤光一　防州館 安村龜吉
石井一郎　ニューヨーク・クリニング店 高澤一男
コルサ・ハウス　パナマ洋食店 廣田
バタリー商會 橋坂兄弟　サン洋食店 山際展常
ワシン洋食店 店員一同
大陽商會　大山化粧品製造所 大山勝次 電話メーン四〇〇九
鈴木賢市　第三街二〇九 森花店 電話メーン二八六二W
富田登　第三街床屋湯屋 賀中見次郎
西山藤一　ラデオの魁 エル・エム自轉車店 西島修造
木村圓太　イースト・サクラメント 宮井楠之助
山本龜太郎
山平正人
吉村菊之亟
新井重平
齊藤正勝
森脇德市
光原與八
增田永藏
久保田到
櫻府洋食店 一同
櫻府醫師會
林兄弟齒科醫
石井銀佐
井木繁喜
橘田慶通
宮崎秀太郎
柴太郎
佐藤留次郎
エイグル・クリニング店 中村
エムパイヤグロサリー 樋川豐
今田ヲカ
エイグル・グラージ 岩田一郎
エス街三〇四 黑河寫眞館
センター洋食店 一同
アメリカン・クリニング 店員一同
エム街二〇六 野村兄弟グラージ
井芹改藏

▲パーキニス
井上豐次
小林雄太郎
出本渡
光原與八
森脇德市
先原郁餘
加藤商店 加藤平三郎
▲エルグローブ
川田勇
三好盛太郎
三島鬼一
▲フロリン
秋山魚店 秋山道春
羽山涉
池田貞藏
田邊爲三
前田產院 前田夏子
オークパーク 瀧口岩輔
野田旅館 野田德三郎
ミルス 廣田爲夫
佐野森太郎
リバーサイドロード 熊谷郁次　安井高市　山崎萬七　吉原佐市　藤本儀一
諒闇中年始の禮を欠く
櫻府日本町三二八 世良又五郎　世良勝太郎
諒闇中に付年賀欠禮
第六街エム街角 メーンホテル 中國村司 メーンカフエー 平井元輔 電話メーン八六一〇
第三街一二〇七半 グランドホテル 土手兄弟 電話メーン七四七七
櫻府貸自動車組合 組合員一同
加州魚店　小林魚店　みかど魚店　新キヤピタル魚店　エム・エム魚店　サクラメント魚店　メーン魚店
諒闇中に付年賀欠禮
MORRIS S. DAGGETT
サクラメント市オー街五〇六 モーリス・エス・ダゲット 電話メーン二一七六

仁紫彌一
仁紫靜雄
田中友吉
谷川商店 谷川玉藏 店員一同
植木照一
諒闇中に付 年始の禮を欠く 日米新聞支社 竹田文治郎　太田辰次

諒闇中に付年賀欠禮
櫻面都食料品商組合
安藝商會　山陽商會
有明商會　谷本商店
いなか商會　井上商會
紀伊商會　神保商店

櫻府旅館組合
安藝旅館　本田旅館
備州ホテル　岩國屋
千歲旅館　川村旅館
圓光寺　岡山旅館
福岡屋　細川旅館
富士館　藝備旅館
肥後屋　武田旅館
日の本　浪花ホテル
廣島旅館　ちくご旅館
蛇の目ホテル
甲佐屋
九州屋
益城屋
富永旅館
大島屋
敷島旅館
竹本旅館
宇土屋

諒闇中年始の禮を欠く
櫻府　加州住友銀行員
辻惣三郎
小笠原雄二郎
杉山航三
辻一夫
町田貞三郎

謹迎新年

櫻府飲食店組合
いろは亭　更科
金華樓　松葉
眞砂樓　丸善
丸萬　千鳥
すし勢　月
彌生　吐月
橘ずし　和歌の浦
○一亭　ふじや
千代志　便利食堂
日の丸　こぶき
浪花食堂　エム支那料理
三日月　不知火亭

日米
新年號
第四

婦人と家庭のページ

子供に活畫を見せるの可否に就て

在米有力婦人方の意見

本社は新年號に掲げる目的で在米邦人有力婦人方に左の質問状を送り御意見を求めました處多忙中にも拘らず多數の回答を得ましたことは感謝に堪ゐません。（順序不同）

一、子供に映畫を見せるの可否、その理由。

以上のやうな効果のあるものであるだけ俗悪な映畫は子供に害毒を及ぼすことも大きいのであります。要は映畫選擇にあると思ひます

▽ 桑港　小島久太氏夫人　小島好子

私は映畫を見てをりませんし子供たちにも、止むを得ない時の外は見せてをりませんから可否を申あける程はつきりした意見をのべられませんけれども子供のためにわたくし話や、童謡があつていゝものならば、映畫にも特に子供本位でつくられたものがあつてよろしかろうと存じます（多分有るんでせうが）今の普通の興行物としての映畫ならば見せたくはございません。

▽ 桑港　松隈義子

折角のお問合せではございますが子供の年齢、映畫の種類、映寫の時間及場所等によりまして可、否何れともお答へ申しかねます。

▽ フレスノ　川島伊佐美氏夫人　川島つや子

可否は見せる映畫その物の種類によつて決しますが大體において私は勸善懲悪物や英雄の大事業を成す物語りものや活潑にしてヤンキー氣質をよく現したデーセントの仕組みのカウボイイ物は子供に見せた方がよいかと思ひます。御承知の通りこの國では日本のやうにあまり子供に英雄崇拜のことを鼓吹したり勸善懲悪を教へませぬのでこうも子供が平凡になりすぎはせぬかと思ひます。この考へで私共では映畫の出た時は時々子供に活動を見せにやります。尤も是れは男の子だけを持ちました私の考へを申上げたまでゝございます。

▽ アイルトン　成田佳太郎氏夫人　成田佳子

子供に映畫を見せますのは私としてはよろしいと思ひますが子供は成人者ではありませんから子供が見て智慧のつくなるべく子供のためになるように撮影した寫眞をみせるやうにしたいと思ひます。あまり物事に理解のない子供に成人者がみて喜びますやうな寫眞はこのみません私共では子供をつれてゆきます時は子供につれられてゆくやうな主意でをります。

▽ オークランド　曲尾衛一氏夫人　曲尾花子

子供には子供相當のものを見せるがよいと存じます

▽ ニューヨーク　角田柳作

愚妻は歸國中で失禮させていたゞきます。

▽ バークレー　東ケ崎菊松氏夫人　東ケ崎シゲ

否。理由　益よりも害多し。

▽ 桑港　齊藤重光氏夫人　齊藤春子

映畫は最近教育上最も重要な機關の一つになりましたが、映畫は一種の實物教授で鋭感な兒童の腦裡に深い印象を殘しますから教育乃至教訓的のものは子供に見せて至極結構でありますが、それと同時に普通の興行物はその内容に注意しないと、一方において善良なる効果の偉大なると正反對の程度の悪影響があります然し映畫の内容を一々調べることは至難のことでありますが出來得ることならば、第一新聞か雜誌に現れたる批評若しくは梗概で筋の大要を知るか、または先に見てきた方に大要を伺ふかして、よろしいと認めたものを見せるやうに致したいものであります。それからまた俳優にはそれ〳〵特有の氣風があつて大よそ勸善的教訓的の藝題を擇び好んで演ずる男女のスターが幾人もありますから、不完全ではありますがスターを撰擇するのも一便法かと存ぜんじます。

▽ パイセリア　白澤才吉氏夫人　白澤秀子

若しき得るならば子供には普通一般的の映畫は見せない方がよいと存じますその理由は一般的映畫より子供がうける感化は善よりも悪の方が多いと想ひます但し教育的映畫は見せても何等差し支なくむしろ子供の教育上必要と存じます

▽ 桑港　小川榮一氏夫人　小川美江子

理解力のできるまで見せない方がいゝと思ひます。勿論特種の教育的映畫などは別であります。が普通一般のムーヴィは親が見て子供に何等の弊害をあたへないとおもつたら、時には見せても差しつかへはありません。さもなければ子供を單獨で放任して見せることは絶對に否とおもひます。その理由は、理解力のない子供は是も非も區別なしに感受するからであります。殊に靜寂な最も敏感に神經の統一を計る場合ですから極めて深刻なインプレッションは、子供の無邪氣なそして圓滑な心的發達に、阻害を來しはしないかと恐るゝものであります。

▽ 王府　竹下靜馬氏夫人　竹下ちよの

絶對に可否お答へいたし兼ねます、子供の年齢や映畫の種類により可否を申上げねばならぬと思ひます。大體に於て一に映畫の種類によることに子供向き教育映畫や上品なもの時事映畫等をみせるものは害なきものみか大遠よきことをみ撰んで見せるがよいでせう

▽ シャートル　竹内幸次郎氏夫人　竹内こさと

可とも否とも一概にはいへません私の宅ではよい映畫かくれば一家擧つて見に參ります併し普通は決して子供の隨意に活動寫眞を見にゆくことに同意致しません。

▽ 桑港　萩原五郎氏夫人　萩原たかの

子供の教育は、芝居かぶりにするのが一番効果があると聞いてをります。映畫から影響をうけて不良少年少女になつた實例は澤山あります。それほど映畫は教育上力あるものではありますまいか。

▽ 桑港　永井元氏夫人　永井ゑい子

若しストリクトに云へば、子供に映畫を見せることは餘り賛成しません。見せるとすれば、見せるとすれば、その畫の中心人物と夫を演ずるスターの如何を能く調べてからがよいでせうか、其の結果は如何がでせう

▽ 櫻　府　井芹敬藏氏夫人　井芹セキ子

若試みに世の多くの子供方に各、その好む所のものを幾つかあげさせてみましたならば恐らく總ての子供たちが、その數の中に必ず活動寫眞だけは忘れはいたしますまいと存じます。それほど子供たちは映畫を好んでをりますのに弊害がある至しましても全然觀覽せしめないことは、むしろ可憐さうでもあり又無理なことかと存じます。要は父母兄姉の理解ある監督の下に觀覽せしめて、その都度映寫されたフィルムに關して正しい判斷を下すやうに心掛へてやることができましたら却て益あることが多いかと存じます。尚子供たちが一人で彼の寫眞館に揭げられてあります表看板を見歩く途中や又は場内殊に夕分の行き戻りに不良から被ります悪影響も又映畫同樣に考慮せねばならぬことかと存じます。

▽ 羅　府　高橋昇之助氏夫人　失禮させて戴きます

▽ 櫻　府　辻忠三郎氏夫人　辻春野

子供に映畫を見せることの善悪はその映畫の筋そのものによると思ひます一概に弊害ばかり伴ふものとおもへませんみ撰んで見せるがよいでせう

▽ シャートル　竹内幸次郎氏夫人　竹内こさと

可とも否とも一概にはいへません私の宅ではよい映畫かくれば一家擧つて見に參ります併し普通は決して子供の隨意に活動寫眞を見にゆくことに同意致しません。

▽ 桑港　萩原五郎氏夫人　萩原たかの

子供の教育は、芝居かぶりにするのが一番効果があると聞いてをります。映畫から影響をうけて不良少年少女になつた實例は澤山あります。それほど映畫は教育上力あるものではありますまいか。

▽ 桑港　永井元氏夫人　永井ゑい子

若しストリクトに云へば、子供に映畫を見せることは餘り賛成しません。見せるとすれば、見せるとすれば、その畫の中心人物と夫を演ずるスターの如何を能く調べてからがよいでせうか、其の結果は如何がでせう

▽ 櫻　府　辻忠三郎氏夫人　辻春野

子供に映畫を見せることの善悪はその映畫の筋そのものによると思ひます一概に弊害ばかり伴ふものとおもへませんが、それと同時に普通の興行物はその内容に注意しないと、一方において善良なる効果の偉大なると正反對の程度の悪影響があります然し映畫の内容を一々調べることは至難のことでありますが出來得ることならば、第一新聞か雜誌に現れたる批評若しくは梗概で筋の大要を知るか、または先に見てきた方に大要を伺ふかして、よろしいと認めたものを見せるやうに致したいものであります。それからまた俳優にはそれ〳〵特有の氣風があつて大よそ勸善的教訓的の藝題を擇び好んで演ずる男女のスターが幾人もありますから、不完全ではありますがスターを撰擇するのも一便法かと存ぜんじます。

▽ パイセリア　白澤才吉氏夫人　白澤秀子

若しき得るならば子供には普通一般的の映畫は見せない方がよいと存じますその理由は一般的映畫より子供がうける感化は善よりも悪の方が多いと想ひます但し教育的映畫は見せても何等差し支なくむしろ子供の教育上必要と存じます

▽ 桑港　小川榮一氏夫人　小川美江子

理解力のできるまで見せない方がいゝと思ひます。勿論特種の教育的映畫などは別であります。が普通一般のムーヴィは親が見て子供に何等の弊害をあたへないとおもつたら、時には見せても差しつかへはありません。さもなければ子供を單獨で放任して見せることは絶對に否とおもひます。その理由は、理解力のない子供は是も非も區別なしに感受するからであります。殊に靜寂な最も敏感に神經の統一を計る場合ですから極めて深刻なインプレッションは、子供の無邪氣なそして圓滑な心的發達に、阻害を來しはしないかと恐るゝものであります。

▽ 王府　竹下靜馬氏夫人　竹下ちよの

絶對に可否お答へいたし兼ねます、子供の年齢や映畫の種類により可否を申上げねばならぬと思ひます。大體に於て一に映畫の種類によることに子供向き教育映畫や上品なもの時事映畫等をみせるものは害なきものみか大遠よきことを

諒闇中に付年賀缺禮
スタクトンの部

須藤和四郎
平原武丸
上田豐
門池義民
平野周平
錦帶堂藥舗 店員一同
鈴木天眞堂
須市興行會社
鈴木良太郎
鈴木良章
吉田美奈良
崎山商店
鈴木惣之助
田淵光三
松本幸一
赤羽一雄
田淵政次郎 店主
宮田商店
宮田竹市
同 忠雄
藤本寶一
矢田一雄
塚原正美 日本病院
宮坂磐
津玉 津玉商店
外店員一同
藤森壽一 藤森商店
外店員一同
長谷川辰次郎 長谷川商店
店員一同
中島商店 旅館
高橋商店 高橋精二郎
東洋商會 梶田
堺商店 堺八郎

須市洗濯並洗染業組合
青木關三郎
秀島秀治
井上俊男
鎌田養八
草場新四郎
緒方才一
日本ドラッグ
松本德太郎
店員一同

須市旅館組合
肥後屋旅館
福島屋旅館
廣島屋旅館
錦帶旅館
紀州館
南海屋旅館
日本旅館
（ABC順）

須市佛教會並に學園
東福義雄
藤本龍曉
高尾新平
星野傳三郎
加來智藏
大島文
荒木松枝

服部孝俊
ABマーケット 寺下五郎
藤田先一
伊集院哲夫
上利與一 須市大飼商會
國森熊吉
三輪肅晴 リンコルン活動寫眞館
村木半造
鍋嶋和助
富士印刷所 藤岡
鬼塚勝太郎 齒科醫院
渡邊齒科醫院
伊藤富吉
耕進舍 小村峯太郎
柴田庄三郎 柴田商店
木村商店 木村孝藏
青木愛一
山岸清作 フエボリット洗濯所
寺西豆腐店
豆腐店 ラフエット
富田諭 代理業
關森薫
磯田虎象
大島幾太郎

諒闇年賀缺禮

新藤商店並に商船部
新藤德松
同 軍治
田淵源六
掛部淳一
海田高次
佐藤時春
中村重太郎
鈴川勇
バ子ーチヤルデス

日本寫眞館
大井寫眞館
井上勇太郎
農園一同
山下裁縫學校 山下
須市裁縫學校 篠歌子
清水裁縫學校 清水久子
井本裁縫學校 井本キミ
北原產院
西岡產院
大塚產院
吉田重太郎
渡邊均 サンライス貴達
國井時計店 國井光太郎
岡本自轉車店
岩田タイヤー商會 岩田七藏
從業員一同 リンコルングラージ

アダムス花店 恒川繁太郎
石田家具店
大島幾太郎
荒尾靴店
今岡究師 名灸師
鶴屋菓子店
大阪屋菓子店 中西謙次
福山仙吉 ワシントン
魚店 竹本政雄
寺西豆腐店
山岸清作 フエボリット洗濯所
青木愛一
柴田庄三郎 柴田商店
木村商店 木村孝藏
耕進舍 小村峯太郎
伊藤富吉
深之木水右衛門 運送業
佐藤龜八 豐明館
坂梨健三 ヨセミテホテル
加藤鐵三郎 スターホテル
天野正太郎 櫻館
山田傳次郎 ウエンホテル
福山仙吉 東洋ホテル
麻生德三郎 タフトホテル
安部永三郎 東紀ホテル
佐藤熊太郎 フランクリンホテル
横井守之 グランドホテル
久家緝
大原絹 パレス洋食店
ソノ洋食店 川口幸造 大鹿平一郎
久保田喜一 ラツキー洋食店
森田市太郎 アイエム洋食店
木場武雄 TK洋食店
加藤英治
栗野幸一郎
伊藤泰五郎 伊藤洋食店
花村融 ホワイト洋食店
水間作之丞 ウエスタン洋食店
鈴木福太郎 エビシー洋食店
遠藤喜一郎 OK洋食店
鍬田美則 スタクトン玉場
安樂心
太田國平 フレンチキヤンプ
村岡久吉 レストツラク
廣東樓
尾形忠三郎
中小路藤楠
藤本伊之助
太白樓
新中華 電話三三七三
富田佐太郎 フレンチキヤンプ
小室昌一 スタクトンタイムス
大橋貫造 新世界支社
▲須市附近
鶴本子之八 鶴本玉場
原田仁一郎 ネバタ州
大村文治 櫻府日報社
遠藤照治 日米支社
宍戸泰藏 日米新聞取次
中村孫助 中村菓物店
津田善太郎 フラッパラー
服部歌之助 コーン島
川崎昇 タンナス
稲垣玉場 稲垣要
江嶋玉場 江嶋琢郎
河本政一 河本玉場
松井水靴店
中森床
三力谷小市
藤井榮 藤井玉場床 南エルドラド二三一
中尾義住 東郷床
高露耕作 スタクトン床
佐々木床 佐々木繁義
武智壽男 ベーコン島
阿部周藏 マンダビール二十三
北嶋清 ユニオン島
北嶋重太郎
田所達吉 スミスツラクト
砥綿彌太郎 ボールデン三十一
後藤金之助 キング四番
戴民雄 タンナス
佐藤時春 日米新聞取次
田淵源六
桝宮仙太郎 ブレーシー郵便百五十七
▲ターラツク 地方
相原仁三郎
朝比奈直次
下舞嘉三次
堂原美義
古川義一 忌中に付年始の禮を缺く
丸木重太郎 歸國中に付年始の禮を缺く
町並乙次郎
山代德一 ブレントウード
三上信雄 ブレントウード
谷田勇 ブレントウード
森田庄次郎 オクランド玉場
山中玉場 山中德太郎
石丸正吉 ベーコン
岡崎八三郎 ブレントウード
BAC玉場 山口類市
福嶋森吉 福島玉場
月見亭 本田
港ずし 中村
田中熊吉 リンデン
近藤留吉 リンデン
近江虎藏 リンデン
柏屋 水野
安藤莊吉 リンデン
かしく 加藤井下
竹亭 竹村
山口經雄 リンデン
丸一亭 弘中
上久保九一 キング五
迫田兄弟 ローダイ
ゑび壽 本田
八千一久 矢野
鐘ケ江善助
富貴寄 稲益
江嶋雷八
三福亭 稲益永山
板屋保太郎 フレンチキヤンプ
安田新五郎
芳野喜太郎 忌中に付年始の禮を缺く
安宅猛男 アツトワター
秋山英藏
藤田都太郎 キヤリフオルニヤランチ
阿久根商店 阿久根利三郎
清野市之助 清野球場
▲セリス地方
池田嘉藏
川上武助
住田吾平
富江豊次郎
武田三彦
馬場信良 ▲コーテズ村
伊藤忠吉
宮嶋清太郎
久條三郎
清井篤之助
石田磊二
稻葉源吉
板野春太
星崎雄三郎
古山政一
赤木平太郎
福田幸太郎
▲モデスト地方
山本六太郎
米山清太郎
村野商店 店主 村野唯記
中野商店 店主 中野樵吉
村上球場並に豆腐店 店主 村上登一郎
志賀球場 店主 志賀
志鶴ルーミング 志鶴三作
富樫旅館 富樫新三郎
永井トラ 九街八二四半 パークルーミング
帝國旅館 山崎繁造
相變らず御引を立願ひます
諸藤子之吉
森本正吉
杉浦虎吉
清水篤逸
吉田米藏
米山清太郎
山崎繁一
武田次三郎
田近外次郎
吉村半四郎
吉畑九之助
上村安太
村野商店 店主 村野唯記
中野商店 店主 中野樵吉
村上球場並に豆腐店 店主 村上登一郎
志賀球場 店主 志賀
志鶴ルーミング 志鶴三作
富樫旅館 富樫新三郎
帝國旅館 山崎繁造
相變らず御引を立願ひます
田淵源六
桝宮仙太郎
相原仁三郎
朝比奈直次
下舞嘉三次
堂原美義
古川義一
日野田德一
野田德次
町並乙次郎
岡本吾市
大畠鎭磨
細末若次郎
白石良介
坂田學
津田信次
田代改藏
横井丈太郎
山本安一
梶原準次郎
梶岡八藏
梶岡音吉
川村益井
石垣太郎
伊藤忠吉
馬場信良
武田三彦
富江豊次郎
住田吾平
川上武助
池田嘉藏
清野市之助
阿久根商店
藤田都太郎
秋山英藏
芳野喜太郎
安宅猛男
清水篤逸
吉田米藏
上村安太
山崎繁一
武田次三郎
田近外次郎
吉村半四郎
吉畑九之助
清井篤之助
久條三郎
宮嶋清太郎
永井トラ
中嶋吉五郎
野田床
品川角次
瀬戸兼吉
辻村良平
石田三彦
稻葉源吉
赤木平太郎
福田幸太郎
古山政一
星崎雄三郎
中渡瀬英吉
岡本吾市
細末若次郎
白石良介
坂田學
田代改藏
横井丈太郎
山本安一
梶岡八藏
梶原準次郎
清野球場
阿久根商店 阿久根利三郎
藤田都太郎 キヤリフオルニヤランチ
秋山英藏
芳野喜太郎 忌中に付年始の禮を缺く
安宅猛男 アツトワター
清水篤逸
杉浦虎吉
吉田米藏
米山清太郎
山崎繁一
武田次三郎
田近外次郎
吉村半四郎
吉畑九之助
上村安太
村野商店 店主 村野唯記
中野商店 店主 中野樵吉
村上球場並に豆腐店 店主 村上登一郎
志賀球場 店主 志賀
志鶴ルーミング 志鶴三作
富樫旅館 富樫新三郎
帝國旅館 山崎繁造
相變らず御引を立願ひます

謹迎諒闇之新春

莓生產者が組合を組織し事業繼續して以來滿十週年の新春を迎へまして
衷心より組合員及び凡ての莓生產者が改年と共に益健全に發展され多幸ならん事を祈ります
希くは組合と共に力を合せ將來の發展を計り最善の結果を收められ度く御勸めする次第です

桑港バタリー街五一〇番
中加莓生產者組合
支配人 イー・エーチ・ハツク

當選懸賞小説

第一等當選　戀愛地獄

ときを

加州の空は白い。それにも係はらず、Kはジッと動かずにゐた。眞年だ！時代錯誤の午の月が、白眼に大空を彷徨しようと、白樺が百年あの思ひ嘆を閉ざしてゐたが、故に、また彼の知るところで足を、うんと踏ん張つてゐた。

はないのである。彼は、今日總身の硬直した幾條もの線は、曜日朝の雰囲氣に、ぐんぐんゐるのである。多角的直線の亂舞は繁然として重心を守り、また、その命を抱いて同心圓に、うなづくのである。それであるから自ら思ふやうに、しんねりむつちりと酬いず彼れは、また動かなかつたのである。それに不思議はないにしても、彼れは時々横様にS子を何ふのであつた。

彼れはさつきからS子と自分との間に懸まれた戀を考へてゐたのであつた。

と、突然、さん！—と彼れを圍繞してゐた雰囲氣が、ゆら！—と虚空に泳いで亂れた。物の氣配が四圍を占して居つた。會衆は立つた。彼れは、けものゝ一匂ひを感じた。彼れは覺の内に生活は、ものゝ美事に砕かれた。

彼れはすぐさま、じかにまさしく現實の痛さい擬亂に陥んでゐる自分を見出だした。彼は心の均衡をしなつてゐたが、そのまゝ一氣に、むづと立つたが、

……ちゝみこみたまの

おゝみかみに……

彼れは、ジッと聞澄ましてゐた。一瞬、喜びが、神世のよろこびが、さもしびさんもに彼れの心に湧き上つた。禮拜は濟んだ。その時だつた。さて會衆は一様に自己安慰に似た一念に解放されたやうな、よろこびが感じてゐた。總ていざや物都かにも、遠場梅にMは突然立上つた。

「皆さん！—」彼は、ゆつくり振返つた。その振舞には充分な自信が見へた。

「實に東都に勉強していらつしやるR氏より手紙がありまして、彼は靜かに、しかも明かにいつたが、Kは一瞬彈かれたやうな働動を感じた。R氏—彼れは直様にS子を思つた。R氏—S子との間に、かつて營まれた戀愛を考へた。R氏—彼れは、もう一遍口の中で繰返した。直様にきびしく横様にS子を何つた。異常な注意力の篤に瞳か、ぎり！—と疼いた。彼れはケに二三度頭を振うこかした。Mの申狀は單なる卒凡な消息文の飜譯に過ぎなかつた。が、KはS子の姿態から何物かを読み取らうと計つてゐた。彼は用心深く半眼に、しかも嚴しく、S子を見据へた。S子は俯向

「だつて此間皆の前で、そういつたでしよ」

「まア」そして顔を赤らめた。

「だつて！だしぬけに——」彼は、スッカリ愉快になつてゐた。

「それぢや、あなたは胡麻化し奴でしたつけね」

「わ？」女は大業に眼を張つた。

「だつて！だしぬけに——」彼は、

「そりや、あなたの一番好きな人でしたつけね」

彼れは自ずといつた。

……

彼れは、おゝ—と思つた。彼れは、すばやく、それを認めた。何ではなしに御體の知れぬ或る種の優越感を覺わずにはゐられなかつた。

……

彼の女は、ほがらかに歌つた。そこには最早一瞬前の彼の女は微塵に消ち失せてゐた。彼れはまもなく別人の彼の女を見詰めてゐた。不思議な氣がした。「女つて奴は、からで嘘を吐きます。からだでさ」彼れは、ヤケに頭を振動かした。S子は、すばやく彼れを振仰いだが、ニッと笑つた。それは堪らない淫亂な思はせる程無邪氣なものだつた。彼れは面喰らつて仕舞つた。その時だつた。「真様！—これ！—」と漲つた言葉だ。彼れは、すばやく大感の世界に巻じた。それは或る一つの事實を考へた。それは性心理の材料として取扱はれたものだつた。話はこうだ。

ある裏君が仇男を戀したさいふ。ラブ、スティフキをつけたりする様にも何の邪氣がなかつた。

「なんといふ澄澈たる人達であるのか」

女子は田舎の學校で唯一人の日本人として、先生や友達に可愛がられた時代の自分を思つてつてせしめずに置かないやうな「お如才がなかつた。

「わゝ、あたし、やつと向ふの、此處から二哩ほど……」

「さう、遠目たいへんでわね」

「さうなら、ありがたうございました」

娘は立つた。

「可いの？」

女子は今一度かういにざるを得なかつた。

ここに、これも自身ますわ。そこに何の破綻があるいしかさ考へ出すと氣が氣でないでしよね、後生ですから私を私をかつた。

「此處へおかけなさい」

ふら！—と立つていつて、かすしてゐるM に 鍵い一瞥を投げた石を投げつけられるやうなこその眼先きには辱られたやうたの眼を見ていひます。いけなかつたのは お互に僞り合つたり、だ見さうしなければ居られなかつたのだ。

「有りがたうございます」

少女は盤慇にかう云つてそこに坐つた。

何かの本を開いて讀みだした少女を上から斜にみると、睫毛が長いので、瞬きする毎に、小さい顔に睫毛が一つづいになるに驚嘆した女子は下車しやうやうにみゐた。

席を讓つた女子は下車しやうとはせず、少女の吊革にさがつてゐるので、少女は不審さうな顔をしてちらと女子をみあげた出すのにぞれほど苦心したことを、「これでいゝでせう」といふかのやうに見ゐた。

「なるほどね」

「あなたは多分、初めてでせう？ごめんなさい……」

「はじめて？、何ですの？」

少女は晴れやかな顔を不思議

「あのね……」女子はこゝでちよつとオーブン、ハーテッドに微笑をみせた。

「あなたの後ゝにリング型がついてゐるのをあなた御存じ？」

リング型といふ言葉をかんがへみるのに、ぞれほど苦心したことを、出來ないか、此ふはた平易に十出來るだけ輕いこのやうにいたのであるが、娘の顔色がサ

「ド、ド、ド、ト、」

文子は自分の動悸を娘の動悸

三十秒、一分、二分、娘は何

「ねゝ」

娘は感謝に満ちた微笑をもした。

電車の中は人ごみでそこは見

「なるほどね」

「なるするだらう」

並木の蔭でみゐなくなるまで見送つてをつた文子は、シーツの放浪を持つて廻はつた揚句の、百度の炎熱下に突張つて果て、ゆく苦し味を紛しながら、堪ゆく繼いは日々に、堪ゆくて、いつた風のものが、

「……」

「……」

「……」

諒闇中に付
年始の禮を欠く
サンノゼ

日米支社 主任 峯田國作

新世界支社 主任 岡垣吉太郎

サンノゼ 日本人會

西蔭精一　高橋宗三郎　山藤省三　川原勝三郎　高市甕之助　山田虎楠　山本實夫　宮楠勝助　甲斐政友　久司繁太郎　井上又八　上村一喜　橋本重雄　日永昇　岸本政三　三浦德次　井上善三郎　中本福太郎

山川彌市　畠山喜久治　西川七太郎　玉田平七　押尾修一　矢野龜雄　正木治右衛門　松岡金之進　上村三藏　生田富太郎　笹尾常吉　池本秀一

サンノゼ 日本語學園　敎師 渡邊光雄

佐市佛教會　開敎師 土原行圓

美以教會　敎師 春山敎師

サラトガ 洗濯所　社員一同

ウエーンバスケット 製造會社　清水龜次郎

太平館　武田熊太郎

沖田本店　沖田支店

和洋食料品並に雜貨　土橋商店

南海屋旅館

救世軍佐市小隊　岩永大尉

徳永順天堂

有田商店

喜多商店

天野醫院　天野薫

中原齒科醫院

堀產院

サンノゼ產院　木下千代

ロスゲタス洗濯所　尾本久吉

サンノゼ裁縫女學院　萩原富子

謹迎新年　昭和二年一月元旦

正　鶴田合資會社　社員一同
472 JOSEPHA ST., SAN JOSE. CAL.
醬油、味噌、糀製造元

恭迎新年　昭和二年一月元旦

化粧品、文房具　川上商店　川上虎彦

自動車タイヤ、自轉車　秋月商店　秋月懋

食料品並に野菜　可兒商店

佐市商會　日本人　堀次雄　森本盛登　宮本孔信　奥野柳一

田邊菓子店　田邊敬二

ウエストコースト生命保險會社　峯田保險代理事務所

南海屋旅館内　西村廣告社

北澤武右衛門　北澤兄弟商會　北澤儀重

城花園　城周造

東洋ソーダ水製造所　綱島作太郎

吳服反物　石川商店　石川信吉

岩崎洋服店　岩崎清藏

山田轉也

經育生命保險　木村俊雄

ウエストコースト生命保險　シンガーミシン　小倉耕一

山本旅館

山口屋旅館

サンノゼ旅館

九州屋旅館

司馬時計店

田幡五郎　ジャ・クソングラージ　木長諸富

安永運送店　安永船壯

建築請負　西浦新三郎　西浦源太郎

旅館部、運送部　常盤魚店　北六街　府内軍藏

本年も相變らず御引立を願ひます　旭魚店　早野又五郎

サン生命保險會社　701 Alaska Commer. Build St.

松井壽治　649. N. 4th Street, San Jose, Cal.

佐市北六街六五五　堀川裁縫女學院　堀川アヤノ

和洋食料品雜貨　德和號　佐市クリーヴランド街三三　電話 サンノゼ 三九五五

高等支那料理　廣東樓　北六街六四五【電話】五一九一

琼英樓

遠芳樓

森田義千代

佃啓一

大竹一貫

第二街 ミカド商店

石野寫眞館

第三街 田上延寫眞館

伊藤玉場

谷澤商店　谷澤武雄

大和湯

石丸床

貸自動車 星田常吉

建築請負 泉壽喜次

野滿久吉

山田實

日本人洗濯所 鶴川市松

日直長九郎

奥安次郎

赤星治左衛門

【エデンビル】

御諒闇中に付き年賀の辭を欠く

エデンビル 莓園一同

桝原萬造

上田鐵夫

古屋楳吉

藤川保

越山辰平

山下音吉

小柳國平

川浪寅吉

川浪正道

丸林兎一郎

藤德次郎

村上宇太郎

松井長生

鶴本寅吉

中川源八

中村松吉

光永孝

藤川榮太郎

寺西藤一

笹尾澤太郎

土山民之助

松葉佐太郎

俳句 新年雜詠

森素人選

〔天〕羅府　三海風
今朝春アメリカ晴申さばや

〔地〕ハンポード道　子
元日の陽に輝きて人すぎぬ

〔人〕リクビ　汀二
大勢來て四方の話や家の春

秀逸

御降りや鶏あつまれる松の影　抱玉
廻轉や娘見たさに立寄れる　巽村
ひたすらに餅をはむ鶏や初明り　道子
燒き捨てし運勢暦初がまど　三笑
岩頭や初日影して群かもめ　琴雨
初胴のホクの三光雖々など　龍耳
初東風や沖へ沖へと漁り舟　星人
初空や蜜柑畑の一キャンプ　遊人
二つなて杭せありや初鶏　靜遊
廻轉の跡り來も戸や高話し　三海風
ストーブにてら〳〵顔の禮者かな　同
餅花や狭しといふにあらねども　同
温室に乏しき花や初日影　極玉
元日や燈火の音の朝まだき　青涼庵
物いへばひゞく障子や初明り　丸物

鶏の鋼の輝きころげ初日影　巽村
幌上げて正月顔や俥上人　五仙
遺羽子にそこら雪踏み固めたり　靜遊
雪はれやこの一節の惠方道　神崎
正月の生花に座す女かな　星人
見をつれて隣り往來や今朝の春　阿惠
遠近に相吹く汽笛初明り　寶玉
燈臺に通ふ徑や初日ばれ　翠雨
大根葉噛る兎や初日影　同
元朝の霧に灯り渡舟かな　同
羽子つけば拳爪が鳴る袂かや　同
健かに在す薦師や新年會　三笑
移り來し人に招かれ歌留多かな　同
獨り子の遊びながらの手毬哉　靜風
風ぎ渡る沖に出ぬ四方の春　空夢
初空や郷土に似たる山姿　同
花剪るや手元に光る初日影　道子
裁物や鋏使ふつゝましく　同
乘り物や年賀の客を連れ立ちて　同
愛らしき男の子連れたる禮者哉　同
野の家のたゞ靜なりわ元日　同
扉の中に散りわれる賀狀哉　同
子供等の待てるそうに門の草につく同　三海風
聖誕樹尚そのまゝわれた元日　同
御降りや炊烟あげし人構へ　同
御降りの光り流るゝ玻璃戸かな　同
若水や新うたた病約打ち込めて　同
立ちすまに觸れし氣配や御餅花　同
春分に醉ひもて禮者來られし　同
初風や一朶の雲の高流れ　同
ほゝばし一出づる若水や一トポンプ　同
頭痛膏貼りて來られし禮者かな　同

新年 へなぶり　編輯局選

〔一等〕桑港　半左
小兎が無暗に殖にて日本街
ピヨコ〳〵跳ねる兎年元旦

〔二等〕桑港　駒次
見學に來た才媛を嫁りけり
是がほんとに二世の契りよ

〔三等〕カットバンク　石川加賀男
うしなひて又とらまへた福の神
脫兎の如く逃げ出でにけり

○初日さす四面の窓を開け放ち　眞先に見るへなぶりの里
○へなぶりの里に生まるゝ耳長き兎の性は敏感にして　モントレー　海人
○何かよい事ありさうな初日の出去年も今年も拜み候ふ
○苦やいだ聲も目出たし今日の春手製の水のきゝめかしこく
○瓜憂に茄子を接いだがバーバンク見學團の氣高さを見よ　桑港　駒次
○駄つぎけ饅について息つけば身の頂きや白き年さり　桑港　丸一
○浮氣から持つた世帶と云はやして文化生活うまひ逃げ路
○浮氏で嫁せぐ移民の心からやらや取つたり無理な注文
○鏡餅金五十仙なりのビル、ビユーロに乘せて年は來りぬ　モンタナ　石川加賀男
○アメリカの風土になれて十着の皮をぶら下るなり　ロミタパーク　百姓生
○モンローの主義カラガいじめ藤臘と帝國主義の姿からはすしてしてうまし戀の道傳ふなり
○マクフアスン無用と神は見返アカシヤの末梢に微笑みて中空に銀の波　クインシー　久松
○移民法通つたおかげで二年半三人半で年遊みかな
○アメリカの風土になれて十着せん決心にぶる非土の一世

詩　編輯局選

第一等
ホルトビール　山代常次
日の國と皇の國

第貳等
ペブルビーチ　海人
春
異鄕の春だ渡米して十五回目の春でも空はよく晴れてゐる
「寂しいかい？」妻に聞く
ほゝ笑んだ妻が「さうでもねね……」
不得要領な返し言葉よ
全く「さうでもねね……」だ。
訪る人もない異鄕の春ペブル・ビーチに濟鳥が黑い聲して鳴いてゐる
ぎれ〳〵に——。

第三等
モンタナ州　石川加賀男
失業者
裸になつた街路樹にサツト木枯らしが吹き渡つた
シーラチバグの雪の峰大空に浮彫りされて永劫の相
桑港　駒次
蟲憂・憂慮・狂亂・悶へ
拾餘萬の同胞あゝ水平社幾百歳の後までも
焦燥・憂慮
非土のかなしみ排他・猜み、妬み、嫉視
共に奏でる小夜曲日出づる國の蠟と花
微笑・歎美・氾濫・春の心にアダムとイヴ
放埒な幻想と赤き夢妙なる讃音
火の調子
流れ漂の小さき命今日此處にあす何處
つめた星は中空に凍つて震へり
風吹きて根は切れ花は吹きとぶ
爪先の黑いのは蟻がはひ込んでるわけでもないでせうか
すつかり　カキ出してごらんなさい
眞實に綺麗になりますよ
貴女の帽子は良い帽子けれども花飾りの蔭のちりを落しなさい
貴女の洋服はお綺麗ですけれど、ほこりびに氣が付きませんか
脇の下をお留なさいアンダ　が中から笑つてます
シルク・スタッキンは見良いです
仰せの通り曲つた足も少しや直に見わるますよ
けれどかゞさが小指やつゝた位の穴からチヨイとのぞいて笑つてます
チヨイとプラフシで落しなさい
貴女の洋服はお綺麗ですけれど、ほこりびに氣が付きませんか
脇の下をお留なさいアンダ　が中から笑つてます
シルク・スタッキンは見良いです
仰せの通り曲つた足も少しや直に見わるますよ
けれどかゞさが小指やつゝた位の穴からチヨイとのぞいて笑つてます

童謡　編輯局選

第一等
船原　雨恨
お月さまどこへゆくしぐれの晩はくうろい雲に見わがくれ
チラリ見わるとまた消わる雲にかくれたお月さま
裸になつた街路樹にサツト木枯らしが吹き渡つた
空には灰色の雲があわたゞしく去來してゐる
冬が靜かに忍び寄る
東に西に職を求めて漂泊した勞動者は今町角に佇んで
職業紹介所の黑板を見つゝ
流行をくれの外套の襟元から破れた絨の底から
冷切つた手の指先から勞れ果てた空腹の身體へ

第二等
春　ポーリングーム　蒲公英
こん〳〵小雨いつの間に晴れたお日さまポカ〳〵
暖い
こんもり小山の草の上
ごらんよ小牛が四つ五つフ
馬もゐますよホラ走るヘンスの鳥がキラニけた。

第三等
お日さま　サンマテオ　早子
お日さま上つた東の空に
お正月のお日さま
おめでたうお正月のお日さまいくつになつたわたしは五つになりました。

佳作　莓つみ
たんぽぽ
ポン〳〵ポンポ水の音
みぞをつくつて莓畑青い葉かげに
チラホラミ紅い莓がのぞいてる
夢わら帽子サンボチツト赤い着物は姉さんよ
ポカ〳〵トラフク音たてゝ
つんだ莓が山のやう
春のお日さんまだ出ない。
畑たけを
草の水つた裏い朝の

川柳　編輯局選

キユバチノ　神崎幸太郎

第一等
豐かさは移民地へも萬歳來

第二等
諒闇の新年鏡まで曇つて居

第三等
逐鹿に飽いて今年は兎追ひ

佳作　羅府　桑港　富士丸　羅府　桑港　圖拔生

一壺で照らし暮らす星の間。
考へた揚句兎に點を打ち。
鮪さんに敗けた兎の年か明け。
造拜の式に涙の露やゐる。
自動車に乘つた禮者の增わた事。
新米と云はれ在留二十年。
雜煮腹庭の兎を追廻し。
日本酒に米化の客は赤い顏。
向かふみず矢鱈に英字の年賀狀
威張ひ健舌つた後でハツトする。
日曜の朝は跛兎の如く起き。
毎年のやうに箸もつ手が殖へる。
酔喰はぬ第二世を親は賞め。
親子して故國に送る賀狀書き。
辛棒人今朝はチクタイを妻にさひ。
自動車を買つた當座はよく辭く。
預金帳に御供へ飾る妻の智惠。
年明けや奮闘すりやと呑んでゐる。
惡い所米化するなり第二世。
新世帶道具もイージ・ペイメント。
美しい斷髮に皆の目が光り。
桂庵で話さるゝ〳〵出世傳。
子煩惱スチかぢられて骨ばかり。
ボーナスを當てに年玉ウント買ひ。
幸運をさもまく家に初日の出。
釣つて來たバスのフライで歳をさり。
ニユドレス着初のは妻の技倆にて。
年賀狀借金ビルも同伴し。
年賀狀太平洋で年を越し。
年の餅かじる平和の兎かな。
元旦や人の心に立ちかへる。
老ゆる身を言はで二世の年數へ。
雜煮餅三世の分も數に入れ。
うつかりと屠蘇のきけんで色に出し。
ペンリン　久滿草　桑港　ふるや　桑港　半左　桑港　谷民也　桑港　駒次　桑港　高原生　桑港　半左　林田　逸名　羅府　高橋齊三　石川加賀男　モンタナ州　弓濱坊　デトロイト　半井

一口噺　編輯局選

第一等
デウコア　珍畫樓
屠蘇機關のお客夜中に十八番の「今頃は半七さん」さやりだしたらラヂオ狂の主人夢心地に「古めた東京の放送が聞へた」

第二等
星子
甲「若槻と箕浦の黑白爭ひ何れが勝つだらう」
乙「決つてら、勝人箕浦サ」
△
王府
白人「日本人は何故熱し易く冷め易いのですか」
日君「火山國の空氣を吸つたからよ」
△
桑港　駒次
若槻對箕浦の爭ひ
△
木島笑園
妻君「初賞に一割引と廣告はしてるがあなたの店は引かないの」
店員「私の店では廣告に一割なしですもの」
△
桑港　常二生
日本生れの青年「日本にもダンスは昔からあつたと見へるよ食時後でなくお茶の後でやつたゝみへる」
米國生れの青年「さうして君はそれを調たの？」
日本生れ青年「新聞や雜誌によく「茶ダンス」といふ字が出てるぢゃはありませんか」
△
桑港　常二生
妻君「初賞に一割引と廣告はしてるがあなたの店は引かないの」
店員「私の店では廣告に一割なしですもの」
△
桑港　常二生
日本生れの青年「日本にもダンスは昔からあつたと見へるよ食時後でなくお茶の後でやつたゝみへる」
米國生れ青年「さうして君はそれを調たの？」
日本生れ青年「新聞や雜誌によく「茶ダンス」といふ字が出てるぢゃはありませんか」
△
桑港　カリフオルニヤ生
妻君「近頃排セキの話がなくて安心ですね」
亭主「肺セキの話の無くなるのも醫學進歩のおかけよ」
△
フレスノ　東洋子
青年「いよ〳〵男女同權が一般的になつて來ましたね」
新らしい女「あなたはそう云ふ口の下から、しかも人に向つて女男同權とはおつしやらないですね、正月らしくもない」
星子
產婆「今年は私共のビジネスは大景氣ですよ」
亭主「ナゼ」
產婆「卯年でせう兎の樣に子が生れるから」
桑港　原田春風
元日に母「ラヂオで日本の萬歳の聲がきこえるわ」
小供「日本人の聲は西洋人のより大きいのね」
母「ナゼ」
小供「でも西洋人の聲が日本にて聞ねのでせう」
王府　俊坊
五十餘歳の男「俺は卯年だから今年は一つ兎のやうに活動して見せる」
青年「でも駄目ですよ」
老人「ナゼ」
青年「下り坂は兎は駄目、あんたは下り坂でせう、」
△「君達からやゝ結婚難が來るよ」
×「さうして」
△「近頃女の客が男のようになつて一寸見て帰らんじやないか？」
羅府　金時
ドクター雜煮が咽喉につかへて息が苦しいから早くさうかして下さい　さ云へばドクター「オーライ今直ぐ止めてやる。」

諒闇中に付 年賀欠禮

▲キユバチノ
▲カヨテ地方
松下泰助
太田貞市
小畑千代松
小畑森楠
西村理一
早川次良
丸山國平
丸山則之
後藤辰次
毛利正一
清水良一
西浦大工
伊藤藤吉
坂田大八
桑田長四郎
長島留次郎
中原角太郎
田川二一郎
岩崎久
桑原善太郎

▲マウンテンビユー
松島床
平林ホテル
森岡菓子店
平林保險事務所
山本由藏
今井隆次郎
小名幸月
田中德之助
岩田傳右ェ門
奥卯之助
神崎鹿之助
堀周一
杉本魚店
船引三一
宮負松次郎
櫻井次郎

▲ギルロイ
古賀眞馬
田川元助
山崎富太郎
逸見修平

▲ロスアルト
古市友吉
高野玉吉
東内千代松

▲サンマテオ
▲ポーリングーム
小野武雄
藤本信太郎
武田床
岡見時計店
上杉喜作
山口幸吉

▲パロアルト
佐藤喜八
相原尚春
熊野哲吉
平野登市
大門丈三郎
宇治田彦太郎
菊地德太郎
假谷雄次郎
柏木四郎
伊藤富輔
池田早苗
伊藤光之助
保坂仁作

▲サンマーテン
稲田光次
金魚養殖所
岩尾虎楠
吉田德助
高橋愛三
中澤勝藏

安部桂司
安達良助
遠藤勝次
砂川保吉
庄司喜藏
佐伯鶴松
坪倉勝次
高橋柳藏
高橋德太郎
田村秀松
高橋源次
山口久助
吉田留藏
大橋清作
山田才吉

御諒闇中に付
年賀の辭を缺く
食料品並旅館
田中商店
田中恂一
川本次郎
谷本靜人

同志倶樂部
部員一同

Athletics and California Japanese

(Continued from page 31)

First Team

K. Nushida (P) ..... Stockton
F. Yoshikawa (C) Capt. .. Fresno
M. Nakano (1st) ..... Alameda
T. Sakamoto (2nd) .... San Jose
S. Kawamura (3rd) .... Alameda
S. Hirano (S.S.) ..... Stockton
E. Tanbara (R.F.) ..... Alameda
F. Ito (C.F.) ..... Alameda
Tsukimura (L.F.) ..... Fresno
E. Higashi (Utility) .... Stockton

Second Team

J. Araki (P) ..... Stockton
M. Watanabe (C) .. Los Angeles
Mirikitani (1st) ..... Stockton
Okano (2nd) ..... Sacramento
Miyahara (3rd) Capt. ..... Fresno
C. Hinaga (S.S) ..... San Jose
Nakagawa (R.F.) ..... Fresno
Ikeda (C.F.) ..... San Jose
Miyanishi (L.F.) ..... Stockton
Nakamura (Utility) ..... Fresno

Third Team

R. Hinaga (P) ..... San Jose
H. Yamada (C) ..... San Jose
Y. Hamatake (1st) .. Sacramento
K. Zenimura (2nd) ..... Fresno
H. Usui (3rd) ..... Stockton
Tanaka (S.S.) ..... Los Angeles
Hamatake (R.F.) .... Sacramento
Okino (C.F.) Capt. ..... Stockton
Iwata (L.F.) ..... Fresno
C. Towata (Utility) .... Alameda

The following players have been given honorable mentions:

Pitchers—M. Yasui (Sacramento), Y. Domoto (Alameda), Furubayashi (Fresno), Hiu (Alameda), Nagashi (Watsonville), J. Nishida (San Jose), Matsuda (Sacramento), Kawasaki (Los Angeles), Sacco (Fresno).

Catchers—Hanamura (Alameda), Frank Ito (Stockton), Ishii (Sacramento).

First Base—J. Uyemura (San Jose), Sakata (Fresno).

Second Base—T. Shindo (Stockton), Kunitomo (Fresno), Iwai (Alameda).

Shortstop—C. Towata (Alameda), Hamatake (Sacramento), S. Hirano (Los Angeles).

Outfielders—Takeshita (San Jose), Shiba (Sacramento).

The outstanding characteristic of the first team, which will at once strike the follower of Japanese baseball, is its powerful offense and defense qualities. In other words, the players elected on the first team can hit as well as field in brilliant fashion. Nushida, pitcher for the Stockton "Yamatos," finished a fine season, and he has been in a class by himself this season. In selecting the first string-catcher there was some controversy, but finally the verdict was given to Yoshikawa of Fresno, whose ability behind the bat in diagnosing the batter's weakness and all-round generalship found no equal. His hitting was the thing in question that made rabid of experts to hesitate.

Some Reliable Fielders On First String:

Ed Higashi of Stockton is the boy with the heavy stick. He was given the call over Watanabe of Los Angeles for his consistent work behind the rubber and for his "heavy-stick" work. Nakano, first sacker of the Alamedans, is another player who is peer of all the Japanese first sackers in the state of California this season. Sakamoto of San Jose played fine ball, and his general style of play won favor with the critics for the first place selection. Kawamura improved greatly since last year and his selection for third base was unanimous with the experts. For shortstop Hinaga of San Jose gave Hirano of Stockton a very close run for the money. Hinaga's stick work and fielding this season was of first calibre. However, Hirano was given first call because of his consistency at bat and in field and for his experience. Tanbara of Alameda played the best games of his career, and his showing in the Japanese League was far from criticism except for praise. Ito, another Alamedan, is a player of outstanding prominence at bat and in the field. Critics pronounced Ito the smartest lead-off man on the coast. Tsukimura of Fresno is a hard man to keep off the first team. He played brilliantly this season. The honorable titles of captains are given to the following: Yoshikawa (1st team), Miyahara (2nd team), and Okino (third team).

Author Congratulates Players of California:

With a sigh of regret no one will ever see any of these All-Star teams play together, the experts and the writer drop the subject until next year. But before leaving, the writer congratulates the Japanese baseball players in California for the showing they have made in the progress of Japanese baseball in in California.

(To be continued in next issue)

TO NEW YEAR

By Iwao Kawakami

Hail to thee, eternal youth—
Youth with a crown of confetti!
Singing and shouting with uncouth
Joy—dancing with mad, elfin glee!
Watching us with sober alarm
Is he who is done—gray Old Year!
Come—let us take him by the arm—
And make room for happy New Year!

Cultural Heritage and the Second Generation

(Continued from page 32)

thing to give us education. We begin to see our parents in a more favorable light in comparison to our American friends' parents. We begin to see how hard they are working under hot suns in the country or doing drudging menial tasks in the city that we may have the chance that they missed. For their sacrifice we are grateful.

We Soon Rebel Against Parents' Ideas:

Increasingly as we grow up we begin to see the wide gap that seems to exist between our parents' teachings and our newly learned American ideas. A time soon comes when we openly rebel against our parents' ways or secretly think our ways are superior. Very often we become so "Americanized" that we cannot see anything good in our fathers' ways. Yet, those of us who are older begin to wonder if, after all, what is good American is not good Japanese and vice versa. We begin to see that the big things that count in life are the same everywhere and that the little things do not matter.

Forced always to rely on ourselves because often our parents could not give advice, raised in a hostile atmosphere and shifting environment, used to rugged simplicity more than luxury, having seen our parents' struggle for the wherewithal to raise us, and given the best of American education, we ought to be sturdy, serious minded, and courageous today, and we have only ourselves to blame if we are not.

What does the future hold for us? "Nothing, worse than nothing," say many pessimists. I beg to disagree. On the average, the future holds more for us, the Second Generation, than for the young people in Japan. And I am not so sure but that the future holds more for us than for our American friends. For look! We are the children of two cultures, the East and the West, and we can and will understand and derive strength from both, and each one of us can have the strength and capacity of two people behind us.

A Great Future Lies Ahead of Us:

"What can we do?" we often ask in despair. Anything! Everything! Who said that we cannot produce a Shakespeare, a Newton, an Edison, a Bach, a Kant or a Luther from our midst? Certainly God did not. Blazing the trail may be long and arduous, but we can and will blaze it to the end. Let us remember that even Shakespeare hasn't said the last word in literature. Neither have other great men in other lines of work. At any rate, it is better to "hitch your wagon to a star" than to get a neck ache and eye strain peering into gloomy Hades.

Appreciation of Our Past and Gratitude To Parents:

Then, when we make our resolutions and turn over a new leaf, let us remember to have appreciation for our past and gratitude to our parents for making us what we are today. As we look towards the future, let us remember that it is open, wide, and free for us to be as great or little as we want and that there are great reserves of two cultures behind us upon which to draw. Shakespeare, Newton, Edison, Bach, Kant, Luther, Gladstone, Pasteur, ... which shall the Second Generation produce? Or shall we produce them all? It is up to each one of us to say.

Twentieth Century Internationalism

(Continued from page 32)

mit of sudden and spectacular achievement. THE IMPORTANT THING IS TO GET THE TENDENCY RIGHT."

Let Us Keep an Optomistic Outlook

In view of what I have written, these things suggest themselves to my mind as we enter upon the course of another year.

The necessity of keeping our faces to the future in glad expectation of a better day. A discouraged heart never accomplished a great work. Things will grow better. In the words of America's foremost humorist we should be "thankful that our future is still before us."

Challenge False Ideas

Let us courageously, yet patiently, challenge the false notions of nationalism and race prejudice and orthodoxy. We know these are stumbling blocks in the world's progress—but first let us cast them out of our own lives.

Less Talk and More Work

Let us cease these nerve-wracking debates and arguments and begin to do some real work in order to show the world that we have something besides gas in our anatomy. Let us make our theories live and walk the streets. That will get us somewhere.

Let Us Be Reverent

And above all let us walk reverently in a universe where there is so much change and in which even the stars wander in their courses.

Two Great Builders and Two Great Books

(Continued from page 32)

hurled down the walls, and shattered the buildings of the prison, not one man tried to escape, and when the government sent a regiment of soldiers a few days later to guard them Mr. Arima said he would resign if they were not immediately withdrawn. Love for him is not sentimentality. Strenuous work is the keynote of the prison with its various workshops; and the hours are long and exacting. But men are promoted as they are found worthy. Their cells are airy and bright, and he insists, in the teeth of the authorities, that there shall be large roof space where they can walk and see beyond the prison walls. Here he has hit upon a great psychological principle. A limit is the limit. A barrier is something to be crossed. To shut a man completely from the outer world is to harden him against the outer world. I asked him if a recreation hall outside the prison wall would meet a need. "Yes," he said with a smile, "but that is an ideal for the future." Every detail of the new building he is planning with loving care, and I watched him and the architect at work. His spirit is contagious. Going around with the chief warden, a fine man, large and powerful in frame, direct and simple in speech, I found that he knew every prisoner by name and could tell each one's story. I do not feel free to tell any of these stories of human waste. It is a tragedy familiar to us all. But what matters is that men like Arima San and women like Caroline MacDonald are at work mending this broken earthenware in the name and love of Christ. Her book, "A Gentleman in Prison," is another classic of Japanese life in this day of rebuilding.

Buddhism and Christianity in Japan

(Continued from page 32)

Christ. Thoughtful Indians everywhere are giving Christ his rightful place, because of what he is doing for the outcast of India, and because Mr. Ghandi, as their friend and champion, has suffered in a way which recalls the Cross of Christ.

This is the distinctive mark of Christianity and with the true prophetic insight the author of the Fourth Gospel call this the glory of God. His Christ goes out to die with the great prayer on his lips "Glorify Thou me with the glory which I had with thee from the foundation of the world," and the Christian banner is "the Lamb slain from the foundation of the world."

ANNOUNCEMENT

Because of the limited amount of space in our Engish section we are unable to print many unusually interesting articles, which we are holding over for our next issue. The editor is particularly gratified by the number of essays received for the contest, and we wish to thank our readers for their generous support. We would like to give the following special mention: Frank Taniwaki for his "Great Forgetters," Tomiko Dobashi for her "Rain! Refreshing Rain!" and Michiko Nishida for her "Knowing America Through Books."

謹賀新年

ワツソンビル

阿野權四郎 山本善太郎 大野義太郎 志熊宇之助 福本槌三郎 井上龜一郎 井上二十一 福本與之助 横山延藏 清時利次 管井政治郎 小林惣一 田中辰次郎 小林織太郎 土屋峯治 志熊幸太郎 川口菊藏 小錢松治 坂田久三郎 田中兼助 元木一治 安本盛一 高次農夫一 岩見安太郎 淺田市造 村川竹一 山田久之助 山内作次郎 三谷淺吉 有田百 高田善十郎 森宗惣市 渡邊由松 八木初三郎

華村日本人會 幹事 元木一治 學識長 河村政平 村上熊次郎 壽村武一 高山豐三 蕃村長老教會 伊藤晴之 高田醫院 華村佛教會 猿橋雷笑 松本次良一 山際チキ 池田重夫 行德仙吉 神谷繁吉 神谷明 神谷實 M. & W. LAND COMPANY 吉田角右衛門 美根伊勢吉 山田慶次郎 新世界支社 水戸野琢藏 印丸豐次 橋本種市 永瀨長介 紐育 生命保險代理 松田午三郎 高橋重孝 橋本幾太 安達重吉 福場遠助 鳥越文吉 海野富之助 小田德三 松田虎藏 榎本辰太郎 前田仁作

謹迎新年

日本人諸君の御健康と御幸福を祈り本年も相變らざる御愛顧を御願ひ致します

メーン街公園前
ウイリアムス・アンド・ビーブラツク商會
WILLIAMS AND BIEBRACH
MAIN ST., OPPOSITE THE PARK

日本人諸君歡迎
W. W. BENDELL
"AUTHORIZED FORD DEALER" FOR WATSONVILLE AND THE PAJASO VALLEY
ルーデンベ
フオード自動車
代理人
ワツソンビルし渡し値段

ツーリング（スターター及びバルーンタイヤ付） 四七一、三一弗
ロードスター 同 四五〇、八三
クーペー 同 五八五、〇一
チユードア・セダン 同 五九五、二五
フオードア・セダン 同 六四六、四五
ロードスター・デリバリー 同 四七六、四八
ロードスター・シヤシー 同 三八〇、〇〇
トラツク（スターター及ユユマニツクタイヤ付） 四五五、〇〇
シヤシー 五九一、〇〇
フオードソン・トラクター
支拂方法、最初の拂込み其他萬事に付いては和氣が委しく說明します

クライスラー自動車
價格 七百五十弗より 千二十八弗まで
L. FERGODO
639 MAIN ST., WATSONVILLE.

この機會に日本人の皆樣へ新年の御挨拶を申上げ日頃御愛顧を蒙りました御禮を申上げます事を光榮といたします
リースクス商會
LEASKS
FORMERLY ALEXANDERS

ベーカー靴店
E. J. BAKER, 423 Main St.

奥野篤之助 横山林三郎 淺海佐六 抽洞虎三郎 山本才吉 横山金太郎 矢の平留三郎 金本五良吉 村上鹿藏 眞鍋生造 境英藏 市岡庄太郎 松井仁平 松永大作 滿井直記 和田庄藏 滿井寶作 酒瀨川清右衛門 華村流吟社 小林守郎 同人一同 戸田宇藏 仲田豐一 日米新聞幹村支社 武田左文司 大江德太郎

クローノルデン藥舗
Krough & Norden Drug Store

マクフアラン商會
遊戯道具一切
MACFARLANE & CO.
Tires & Sporting Goods

フリーマス金物店
F. J. Friermuth Hardware Co.

ニユース・コムパニー
Watsonville News Co.

That Success and Happiness may attend you during 1927 is the sincere wish of
THE PAJARO VALLEY NATIONAL BANK
Watsonville, Calif.
パハロー バレー ナシヨナル銀行

會席御料理
パツクハート キヤンデー店
EUCKHART, CANDY STORE

ESSAYS AND COMMENTS BY THE SECOND GENERATION

BIGNESS
The Great American Idol

By Kay Nishida

If all the idols of American life could be carved into stone images in sizes proportionate to the extent they are given adoration, the god of Biggness will tower above and overshadow all others. Cities are expanding at furious rate; life goes on here on a stupendous scale; and the number that burn incense before Biggness goes up to countless thousands.

Here is a business man with tigerish countenance, who manipulates a cigar stub between his teeth and testifies to the glory of Biggness.

"We want Biggness," he gesticulates, and the cigar stub nods its approval, "because Biggness brings on prosperity, creates employment, and produces big profits. It is good for the industry, good for America, good for everybody. We want more of it—bigger cities, bigger factories, bigger industries, and bigger everything!"

Somersville Achieves its Place in the Sun:

Here is an American town in the Northwest, reeling in the grime of Biggness. Somersville, some decades ago, was a peaceful and smiling community, whose unpretentious houses were shaded by stately trees. The whole town breathed in an atmosphere of contentment, for here both extreme poverty and extreme wealth were alike unknown.

But soon there decended upon the little community a mania for Biggness; or, to presisely state the situation, the desire for expansion, which had been in a dormant state, was suddenly aroused when a veteran industrialist from the next city pointed out the possibilities of the town achieving its place in the sun. A crop of real estate men soon sprung up and pushed the boom, while the newspapers flared up with the glory of Somersville. The world was coaxed, flattered, pulled, and stampeded into Somersville. The hordes of prospective dwellers flooded the town. They were hurriedly dumped into tenement shacks, which had previously begun to multiply with great rapidity. Somersville doubled its population in two years and trebled it in five.

Factories Echo the Hymn of Biggness:

About this time the value of property began to mount prodigously; rent soared; and the multitudes of alien laborers were packed still more closely to give way for the more that were streaming in. The forest of smokestacks, which had sprung up where none had stood before, now cluttered the skyline in ugly array, emitting vast volumes of smoke, which writhed and rolled like angry serpents. They blackened the houses and darkened the sky, or whirled into the nostrils of the busy inhabitants. Like a vast giant, the city panted incessantly from morning till night. It grunted for coal; it shrieked for raw products; it roared forever for speed. The output increased with the increased exertion, which in turn added to the streams of yellow metal that poured into the hands of the money barons, to be eventually spent by their progenies in hectic pleasures. Because of the rapid growth of the city and the consequent unsettled politics, corruption was rampant in the local government, and the former town elders held up their hands in despair over the new race of greedy politicians that invaded and controlled Somersville.

The March of the Big Parade Goes On:

Then came the epidemic, which started from the congested districts and spread to the whole city. Because hard time was in store for the poor, charitable institutions became necessary. Extreme poverty now stalked side by side with extreme opulence. And for the first time Somersville was faced with a crime wave.

But the march of the Big Parade goes on. It recruits from the poor and wretched because it means employment to them and shelter for their children. It impels the money-hungry capitalists to roll the wheels of industry in face of lock-outs and sabbotage. Those who were at first suspicious of the "Bigger, Better Industrial Somersville" are now carried on by the stream, and the whole city chants the one great American hymn, "Give me biggness, Biggness, BIGGNESS!"

And from the door of one of his smoking factories appears Horace Claton, millionaire banker, realtor, industrialist and the invisible monarch of Somersville.

Claton's career may be traced some thirty years back to a country village called Pleasanton some miles north of Somersville. He was then just out of college—a manly young fellow with a good deal of confidence and lively ambition. He was earning six dollars a week, which at that time was good pay, and all went well until Margery, the girl he was courting, married Thornwall. It was then and there that Claton decided to quit Pleasanton. He moved to Somersville, which was then a small community, and here he began to hustle, burying his disappointment in his unrelenting fight for success. He was a tireless worker and a vigorous fighter in business, and he soon found himself climbing rapidly. When Somersville began to wake to its possibilities of expansion, Claton immediately organized the Booster's Club, and he spread the doctrine of biggness with his characteristic gusto. In ten years he was a bank president; in twenty years he was worth well over a million.

Claton Hitches his Cart to the Sun:

The secret of his success is simple enough, he told his friends. "I always hitch my cart to the stars and strive for big things," he said. "Little things don't count. To grow bigger and bigger in every way—that is progress."

Clayton had married two years after his removal to Somersville, but his marriage was a failure. He was too much in love with his business, or rather, not with business merely, but with attainment of Biggness in all his enterprizes. He had no time to be "bothered with family matters." He was working hard enough providing his family with home, automobiles, and comforts of life. Rearing children was a mother's job. Therefore he did not want to interfere just as he did not want his wife to interfere with his business.

Claton's wife was a woman of sentiment and taste. At first she revolted against the neglect, but she soon gave up because she realized that even for her, Biggness was too great a rival. She bore him three children, but they all held him in awe and seldom spoke to him except when it was unavoidable or when they needed money.

The Conqueror Craves for Human Affection:

But in the business world Horace Claton at the age of sixty cut a big figure in Somersville. He was always consulted whether in business, in politics, or in the affairs of the government. But withal he was a lonely soul. The love which his wife had for him had long ago been frozen. His children obeyed him but avoided him. At times he felt pangs of irresistable loneliness, but the very quality which pushed him so vigorously in the material world repelled him from the affections of men.

It so happened that one day, as he was eating at his usual restaurant, he happened upon his old-time friend, Thornwall. And with him was Margery. All the rest of the day Claton was lost in lingering memories of the past, and he resolved that the next time he is in Pleasanton he will stop in to see them as they had requested. The opportunity came the following month. It was just before Christmas, and the whole Thornwall family were together for the holiday reunion. Their home was situated on the outskirts of Pleasanton and would have made a shabby appearance if placed beside Claton's palatial mansion. But the Thornwall's were rich in human affection, and the scene at their home that evening made Claton a bit wistful. Their grown-up children and the children's children, all eager-faced and smiling, gathered around the old couple in love and devotion, as they seated before the open fire, and the glow of human affection, mingled with the cheery sparks from the hearth, diffused warmth and streamed out of the window in ruddy abundance. Claton looked on and thought of his own bleak home, and sighed like a child. A pang of hunger for human affection assailed him now more than it ever did, and he repented over the monstrous failure of his life. He realized too late as countless numbers have done and will do that the blind adoration of Biggness will ultimately defeat itself. His money kept on accumulating, more than he could ever spend, for he soon became a feeble old man, and each year the cold wind of time saw him grow more melancholy as he drifted nearer to his grave. But all around him the march goes on, the march of the Big Parade, and the multitude shouts the great anthem, "We want biggness, Biggness, BIGGNESS!"

Poetic ·· Artistic ·· Beautiful ·· Japan

A Torii Before a Shrine of Old Japan

THE HYAKUNIN ISSHYU

The two following poems are taken from that remarkable collection of Japanese poems known as the Hyakunin Isshyu (Hundred Poems by Hundred Poets), which is made popular in Modern Japan by its use in the karuta.

Loneliness

Overgrown with thick-leaved vines
In its loneliness
Comes the dreary autumn times;—
And not even man is there.

◇◇ ◇◇ ◇◇

Love Repelled

Like a driven wave
Dashed by fierce winds on a rock
So it is, alas!
Crushed and all alone I;

◇◇ ◇◇ ◇◇

The Mocking-Bird

List to that bird! His song—what poet pens it?
Brigand of birds, he's stolen every note!
Prince though of thieves—hark! how the rascal spend it!
Pours the whole forest from one tiny throat!

—Ednah Clarke Hayes

ATHLETICS AND THE CALIFORNIA JAPANESE
A Summary of the Main Sports and My Choice of All-Star Japanese Teams

By FRED M. KOBA
Boys' Work Secretary, S. F. Japanese Y. M. C. A.

Five years, as time goes, is not a very long time—just a few steps down the one-way trail of history; a split second on the stop-watch of grim Old Man Time. But in the restless, ever-changing realm of sport, where competition is keen and ambitious rivals are merciless, five years is a period long enough to see the rise and decline of many sports.

This deep thought, wandering uninvited into the old bean one rainy afternoon, set us to wondering: "What has been the change in athletics among the Japanese in California in the past five years?"

A few snappy double plays by memory, with the assistance now and then from the dope book, resulted in the somewhat surprising realization that many of them are right where they were back in the summer of 1921—at the top and going strong. Some, of course, have stepped out of the competitive picture; others have faded into the background; and still others, although they clutch their laurel wreaths and blink in the glare of the spotlight, are—as the ringsters say—"ready to go."

Baseball Has Strong Hold Upon Japanese:

While there has been a general increase in the matter of player participation in our various sports among the Japanese in California in the last five years, certain sports have undoubtedly grown more rapidly than others.

If you're willing, we'll dig into this subject a little deeper, making a start with the national pastime—baseball.

Without much doubt more persons play baseball than participate in any of the other sports. Baseball is a game that is played by young and old and by both sexes. Those gifted seers who base their predictions of spring weather upon the quality of willow bark or the eccentric antics of our friend the ground hog have their ambitious followers in baseball. Coming events often cast their shadows before, according to the well known proverb. And considering the arctic tang to our Northern atmosphere, the opening day of the Japanese Baseball League of California was indeed an auspicious occasion. Baseball has lost none of its magic appeal for the Japanese boy. Among the Japanese, baseball is still the king-pin of all sports. It still holds first place as an attraction, and it will be a long time yet before anything unusual will happen to its growing interest. At these league games, crowds crammed to capacity, while in less fortunate cities the attendance, all things considered, was very encouraging.

The season just closed may go down in Japanese baseball history as the year of keenest competitions. Powerful competition was in evidence all through the year. Four teams loomed up as posible contenders for the California supremacy in the first half of the League's season; and when the second half opened the Garden City Asahi nine was added to the honored list. The five teams which represented the glorious baseball season were as follows: Stockton "Yamatos," Fresno Athletic Club, Sacramento "Nippons," Alameda "Taikais," and the San Jose Asahis.

Fresno Is Bright Spot on Baseball Map:

Now as every fans knows, Fresno was the brightest spot on the baseball map back in 1921. The Fresno Japanese baseball nine, winners of the California championship for many years, are still going strong, and as this article goes to press the California championship of 1926 will have been decided between the Fresno nine and the Stockton Yamato team, each team having won one game in the crucial series.

The Alameda nine started out very strong only to be turned back by the "Yamatos" of Stockton, and the San Jose Asahis. The Fresno nine, having won the first half, did not go strong in the second half, losing the majority of her games. Stockton "Yamatos," after a late start, took honors in the second-half. Sacramento "Nippons" fared badly this season and took to the cellar honors. San Jose Asahis with practically a new team faced the season with fair success.

Again a roster of baseball talent has come to my attention, with even more difficulty attached as I weed out the galaxy of stars to thirty of the best Japanese players in California. It is the same old question: who can I leave out? The list is a harder one to prune than to enlarge. But thirty is a much better limit, if the selection is to have that choice of quality which makes such a list distinctive. I have in so doing selected an all-star first, second, and third teams in making these selections. This year, however, an all-star California team is posible with far more back of it than ever before. In the first place, there has been a numebr of such outstanding baseball stars that there can be very little question about them, on the part of the average baseball fan.

In the second place, it is becoming more and more the custom for baseball experts to collaborate in picking teams. In picking the three nines, I have had many wise conferences with leading experts on baseball in California who have seen these players in action this season.

(Continued on page 30, col. 1)

THE PURPOSE AND IDEALS OF THE CAMP FIRE GIRLS
Camp Fire Girls Are to Extend the Warmth of the Hearth Fire Outside the Home

By EMILY SANO
Guardian, S. F. Japanese Camp Fire Girls

Camp Fire Girls! Immediately you picture in your mind a club for campers. But no, the idea has more significance, for the symbol of the fire is the heart or center of the home as well as of out-of-door life. The girls were to be hearth-fire girls, but they were to extend the warmth of the hearth fire outside the home. So the camp fire, which was the fire and which included the coming together of all peoples of a family and a nation to discuss ideals and plans, to warm and cheer strangers, was chosen as the symbol of all the fire of human kind, and the organization was called "The Camp Fire Girls."

Camp Fire gives ideals and inspirations through the symbolism. The old colorful symbolism of the Indians has been expanded and adapted to express their activities. It gives poetry and beauty to rituals and ceremonies, ranks, and honors. The group name and symbol are chosen by the girls. Could a better one be selected than the group named "Cheskchamay" meaning "We are all friends?"

Camp Fire Girls Seek and Create Beauty:

Japanese Cheskchamay Camp Fire was organized in March, 1925. A group of girls banded together to seek out some organization which would offer them high ideals and spirit of true friendship. After due reflection Camp Fire Girls was selected. It differs from other organizations, in that it encourages the girls to create beauty about them in their homes by making beautiful things, and in themselves by the things they do to others.

"I'll try to find the beautiful in life,
And where it is not, I create beauty," runs their Credo.

It is not enough that the aim of the their club be merely social. A club with a variety of activities will develop many sides of a girl's nature. The greater the number of channels in which a girl may use her talents, the greater her development. In the Camp Fire program practically every wholesome activity which would naturally engage the interest of the young girls is included. It is a program of activities based on the winning of honors. Home, Health, Nature, Camp, Hand, Business, Citizenship are the honors grouped under the seven Crafts. The theory of Camp Fire honor system is that "If a thing is worth doing, it is worth doing well." It is a program of of habit-building, and wholesome habit-building is character-building.

Cheskchamay Girls Study Craft:

Cheskchamay meets every Friday night. The programs for the meetings are planned to provide different subjects. Knot tying and signalling they know as well as the Boy Scouts. If you want to know the Great Dipper from the Little Dipper, ask the Camp Fire Girls, for they have been instructed in astronomy by a graduate of the State Teachers' College. We invited a guardian of another group to come and teach Camp Fire songs. Specialists come from time to time to give the girls the benefit of their special knowledge.

The health program is also taken care of, as we often go on hikes. All the pleasures of hikes are but a foretaste of the joys of the camping trip. Every summer we go to Russian River. This year at the camp almost all the girls earned honors for blue and smoke prints, pressing wild flowers, learning to row, camp cooking, etc. There is enough variety to give each girl the freedom of choice so that everyone can find something suited to her taste.

Camp Fire Girls and the Law:

With the coming of the New Year, the Camp Fire girls see in it promise of renewed strength and friendship. Each year their Law will have a deeper and more significant meaning for them, for it gives them the recipe for a happy and serviceable life.

Seek Beauty
Seek Service
Pursue Knowledge
Be Trustworthy
Hold on to Health
Glorify Work
Be Happy.

NICHI-BEI ESSAY CONTEST WINNERS

Here Are the Winners in our Prize Contest:

1. Liwa Ukai	Oakland, California
2. Eiji Ichio	Berkeley, California
3. Asayo Miyamoto	Clarksburg, California
Honorary Mention :	Iwao Kawakami

Yesterday, To-day, and Tomorrow

First Prize Essay

By Liwa Ukai

Profit ye by errors of others. Think not of yesterday! Think of tomorrow! It is to-day which must occupy our minds for to-day precedes everything; in place, in time or in degree. It is to-day which forms our tomorrow. Perhaps we know not of the coming tomorrow, but he who is wise has no time for any thing but to-day. He realizes that to-day is the nucleus of tomorrow and of yesterday and that to-day is the foundation of his life. Guard it.

Man's great ancient fault has been to plan ahead too much. To-day was neglected for tomorrow. We mortals are but mere slaves to the primitive desire for happiness, and in our efforts to taste of it, we plan, plan, plan. We gloat—we dream of our expectations, forgetting that which the clever tongued Shakespeare essayed to teach us:—"Our expectations must stand in preparation." It is always "Tomorrow this; tomorrow that." Thus, a never to be regained, precious day is wasted. There comes a tomorrow, then the to-day and the already too late yesterday, totating without hesitation. And comes the time; time that awaits for no one; time that mocks us. With it approaches that oft experienced, keenly felt disappointment, embitterment, and loss of incentive. On goes the world, regardles of all.

Think ahead! Plan ahead, but achieve a result, a result worth the while. Waste not a moment! Life is too short. Man must make himself through himself, with his to-days.

There is always a new to-day and always an opportunity to start anew. Those among us who have not found ourselves, let us be an asset to all. Let us cast out the bygone errors of our yesterdays and continue our kindnesses of to-day. We owe it to our parents, our friends, our country, our race, and to ourselves.

The Exclusion Act and the Second Generation

Second Prize Essay

By Eiji Ichio

The majority of young men and women of the second generation do not as yet realize the good that the Exclusion Act has brought them. This is a startling statement, but true nevertheless.

The doom of race prejudice against the second generation was sealed when the Exclusion Act was passed. Why?

The Act has abolished the chief causes of prejudice along the Pacific Coast. It has barred the "undesirables" who came to America, merely to make money with no intention of becoming good citizens of the United States. It has also barred cheap labor with its accompanying low standards of living.

It was self-evident that as long as a law was not passed against these, prejudice would continue to become more intense.

The second generation will not be long in realizing the positive good the Act has done them in removing these causes for friction between the races.

Americans love fair play. They are willing to give honor where honor is due.

Ten years from to-day, Americans will meet intelligent, educated young men and women who speak English as fluently as they themselves, and who love the country in which they were born and whose citizens they are.

The world is turning to the Orient for its trade. In the midst of this ever-increasing trade and the barriers of prejudice being replaced by good-will and respect during the coming years, the second generation may look well forward to a promising future abounding with opporunities.

"Let us then be up and doing
With a heart for any fate
Still achieving, still pursuing
Learn to labor and wait."

Criticism

Third Prize Essay

Asayo Mae Miyamoto

How we shrink from criticism! Even from our nearest and dearest friends.

One's ideal, one's life work—a goal attained after years—years of patience and of physical and mental toil; then at last the success we worked for is won.

We sit back with a complacent feeling that at last our work is perfect. Then crash!—our complacency falls away as the criticisms begin.

Criticisms from here and there and von!

Discouraged?

At first we read or hear the criticisms with amusement. But as time goes on, and each venture is met with criticism, we slowly become more and more discouraged. We feel bitter. The world seems to be against us, and slowly the discouragement begins to show in our works. They become poorer and poorer.

But for one who succeeds—one who is really on the road to success—the most critical of critics is our best friend.

Why?

The critic has brought to our notice our mistakes and the weaknesses of our work.

Could we ask more than this—the opporunity to correct our mistakes before they lead us to absolute failure?

Put away your conceit! Criticize yourself. You will find, then, that criticism is the best cultivation of ambition and of advancement.

The Promising Aspects of Japanese-American Life

Honorary Mention

By Iwao Kawakami

It may seem rather presumptuous to attempt to write an essay on such an ambitious theme, but like most youthful ambitions, it is worthy of an effort.

There are, to my conception, three promising aspects of Japanese-American life. In the first place, the agricultural aspect; secondly, the industrial aspect; and lastly, the social or intellectual aspect.

The agricultural aspect is, despite the various legislative restrictions placed on it, a steadily progressing one. The first generation of Japanese farmers have learned bitter lessons from Mother Nature and are now in a position to reap the honest efforts of their toil. And without doubt, they shall reap moral rewards as well as material ones. Their sons and daughters have been given a splendid heritage of patient pioneering.

The industrial aspect is undoubtedly the most practical and lucrative one. As the Japanese population in America increases, there will constantly grow a demand for well trained, efficient business men and women. This will inevitably lead to the social aspect which is based, in the majority of cases, on industrial success.

The social and intellectual aspects are, by far, the least developed by the Japanese-Americans. There are, to be sure, individual examples of social and intellectual leadership; yet they cannot begin to compare, in quantity or quality, with those of other races in America. The Japanese-American is, in most cases, confronting the pitfalls of unoriginality and imitation, and these are precisely the things that one must learn to avoid.

Before a new idea all nature and mankind must yield, and the Japanese-American mind is the most promising blade of world's youth.

SPECIAL NEW YEAR EDITION 1927
Thoughts and Opinions of Second-Generation Members

The Japanese American News

THE LARGEST JAPANESE NEWSPAPER OUTSIDE OF JAPAN

LITERARY NUMBER
ENGLISH SECTION
Articles by Dr. J. Scherer
Dr. H. Guy, Dr. Saunders

ESTABLISHED IN 1899 | SAN FRANCISCO, CALIFORNIA, SATURDAY, JANUARY 1, 1927 | PAGE 32

TWENTIETH CENTURY INTERNATIONALISM

Illusion that War Is Necessary and Inevitable Must Be Torn from the Human Heart; Racial and Cultural Prejudices Menace World Peace; Spirit of Internationalism Needed

By Dr. Harvey Hugo Guy, Ph. D.

This generation faces four great problems: The problem of Nationalism, the problem of the Races, the problem of Population and the problem of the clash of Cultures. Up to the present time all these have failed to yield to any of the suggested solutions and consequently the world is in a state of uncertainty and fear.

The principle at work up to the Great War was the principle of the survival of fittest—the notion that there should be a sort of super-imperialism—one dominant race and one dominant culture. Now the Great War demonstrated that that principle led to untold misery and destruction leaving the world a waste and mourning wilderness.

It is pretty safe to say that not a single soul in all the world would like to see that war repeated. We are all sick and tired of wars and rumors of wars—we want peace and prosperity among men.

If the old principle of competition has failed to give the desired result what shall take its place? On the correct answer to that question hangs the future well-being and prosperity of all mankind.

Before we can hope for a better day we shall have to rid the human heart of some first class illusions.

The first of these illusions is that war is necessary. It is as much a part of civilization as courts and jails. "War is inevitable" was the old slogan and even now many of the older generation still think it is. If that idea is not torn from the heart of humanity, we shall witness a repetition of the Great War, but on a grander scale of cruelty and human sacrifice. War is wrong and no amount of subtle argument can make it right.

Racial Equality Is Attained by Demonstration of equality:

In the second place we must get rid of the notion of racial superiority. To too many people all colored races are just "niggers" and should be made to keep their places to serve the whims of the superior races. They are predestined, so the argument runs, to do the bidding of their superiors, to be menials of the higher races and should they refuse they will certainly disappear. But no race is willing to submit to such treatment, and when favorable occasion presents itself will rebel—and the measure of that rebellion will be the measure of their courage and ability to resist oppression. Of course racial equality will never be gained by argument or by the passing of resolutions—it will be gained only by demonstration of equality.

Another illusion that is looming large on the horizon of international relations to-day is the notion of superior civilizations, dominant world cultures. Probably every civilization and every culture has at one time or another felt the urge of this false hope of becoming the civization, the culture, of the world. We shall probably find it difficult to make adjustments here—these cultural prejudices run deep and strong in all our hearts, and yet when we take time to consider all phases of this matter it is easy to see how impossible it would be for any one section of the human race to possess all the culture of the world. We shall have to get over thinking of cultures as "false" or "heathen" if we hope to see the peace of the future maintained. Nothing is quite so despicable in this day as the proselyting spirit—the spirit of counting noses in order to judge the success or failure of any culture. If there is truth anywhere—it is our duty not to destroy or dominate it but to preserve it.

Another Illusion:

And yet another illusion this generation is a slave to is the notion that all the world's ills may be cured by the passing of resolutions or the enactment of laws. Most people think this is the way out. Never, have there been so many surveys, so many institutes, so many leagues, so many campaigns of education as during the past twenty-five years. They all, doubtless, did some good and yet we have to designate this last quarter of a century as the most hopeless and pessimistic since the dark ages. The problems we face are age-old—the result of centuries of divergent evolution—deep rooted and fixed in the heart of the races of mankind. It is childish to think the effect of millenniums can be radically changed or brushed away in a generation.

In all these matters we need to take to heart the wise words of Elihu Root: "It will be very useful for all of us to keep in mind another consideration. It is that we must not be discouraged if we cannot have everything as we want immediately. The business does not ad-

Continued on page 30, column 6

BUDDHISM IS RELIGION OF COMPASSIONATE CONTEMPLATION; CHRISTIANITY IS THAT OF SUFFERING LOVE

Two Religions Should Cooperate In Carrying Out Japan's Humanitarian Work

BUDDHISTS ARE NOW WILLING

Christian Churches in Japan Lead in Fight against Social Abuses And Vices

(An address given in Tokyo)

By Dr. Kenneth J. Saunders
(Author of "Epochs of Buddhist History")

Since I was last in Japan I noticed an increase of sympathy between Buddhists and Christians. We have for example, a notable book on Honen, which is the joint work of a Canadian Christian and a Japanese Buddhist.

The two Buddhist universities in Kyoto have a Japanese Christian professor lecturing upon Christianity, and exchange-lectures have been arranged between the Koyasan Buddhist College and the Methodist Kwansei Gakuin. It has been my privilege to give lectures on the Fourth Gospel and the Lotus Scripture both to the Methodist and the Buddhist universities.

I strongly commend the wider use of the Fourth Gospel as an expression of Christian experience and thought, congenial to Buddhists. Its great categories of Light, Life and Love are familiar to them, and its doctrine of the indwelling reason is akin to their own philosophy. I have ventured to liken the Fourth Gospel to a great Christian Church with its prologue or porch, its main section corresponding to the nave, its Holy Place where Christ is found alone with the diciples, and its Holy of Holies with the mystery of the Passion and Resurrection.

Lotus Scripture Is Foundation of Japanese Culture:

In the same way the Lotus Scripture chosen by the great Shotoku as the foundation for Japanese culture resembles a great Japanese temple, and the Christian finds himself at home in these noble buildings with their Gregorian chanting, splendid vestments and noble images of compassionate beings like Kwannon and Amida.

Yet it is not doubtful that the two great buildings, like the two great religions, are different, as a glance at the high altar in each case shows. What then is the central object upon the altar round which the whole architecture has grown up? On that of the Christian church it is the Cross, on that of the Buddhist temple it is, or ought to be, the historic Buddha, Sakyamuni, with eyes closed and hands folded in meditation. The one is the religion of suffering love, of agony at the heart of God; the other is that of compassionate, yet aloof, calm and contemplation.

Buddhist Craves for Doctrine of Sacrifice for Others:

As Armistice Day approaches we remind ourselves of the tremendous drama of sacrificial life poured out for the sake of others yet unborn. These millions laid down their lives for the world. The Buddhist has a craving for such a doctrine. Everywhere in India there are remains of Buddhist temples I found where the old stories of Buddha in a former birth giving up his life, or his eyes, or his possessions. Here he is the king of the apes, making a bridge that his tribe may escape from the arrows of the king of men. He is teaching the King that it is better to suffer than to let others suffer, and this is the old principle of Indian religion made real to-day and dramatised in the person of India's greatest son.

In another scene he is giving a pound of his flesh to rescue a dove whom a hawk has caught. In other words, Buddhism not having a doctrine of atonement, of the innocent suffering for the guilty, has had to invent one, and to use old folk-tales as Buddhist material. Over some of these one may write "Greater love hath no man than this that a man lay down his life for his friends."

But Buddhism has not yet got the great compelling power of the cross: "I, if I be lifted up, will draw all men unto me." When men see the suffering Christ they learn most truly what God is like. Here Darkness and Light are at war with one another, and here is a Love which is intolerant of evil. It will die rather than do wrong. Now, the Japanese have refused the doctrine of suffering. The first figures on their altars were figures of the Healing Buddha, and the only picture in Japan which suggests the suffering lives of the Bodhisattva is a little old faded one at Horiuji ,which is Korean.

Yet they have seen the Crucifixions at Nagasaki, the spectacle of those who loved their Lord to the death, and they are of course familiar with the sacrifices of the battlefield. With the Gospel of Christ we are not surprised to find growing up in Japan an intolerance of evil, which was not there before. Buddhism had become somewhat sentimental with its easy Paradise open to all sinners who called on Amida; and into the midst of this world, beautiful in its art and culture, but too tolerant of evil, has come the stark reality of the Cross.

The Christian church in Japan, small and poor though it is, is acknowledged by Buddhists as leading the fight against evil. Last Sunday we saw Tokyo assembling to honor the Salvation Army. It was recognition that here was a force to fight against organized lust, and to befriend the weak and poor. I went in the evening to the church of the slums, where a Japanese St. Francis, Mr. Kagawa, is in the name of his Lord at work at "human architecture" for the downs and outs. And to-day he is constantly consulted by the Government as one who knows the problems of poverty from within.

If the Christians will boldly invite the Buddhists to join them in all humanitarian effort, the future is theirs. When men see what it costs to redeem a slum area, and see the suffering symbolised in the young leader, broken by his work, they turn immediately to

Continued on page 30, column 8

ODES TO ARGOSIES AND NORTH STAR

POEMS BY 9-YEAR-OLD GIRL BRING PRAISE

The following poems composed by Katherine Bichowsky, nine-year-old school girl of Napa, California, is highly commended for their rythm and remarkable imagery:

THE NORTH STAR

Cold and drear, cold and white,
The lone North Star
Wrapped in a sheet of glistening light
Floats o'er the glacier's bar.

** * **

ARGOSY

What cargo dost thou bring me home,
Silver ship, silver moon?
I bring thee dreams of India's strands,
I bring thee dreams of distant lands
As thou stand there with uplifted hands
To greet me ere I come.

NEW YEAR GREETINGS

By James A. B. Scherer

To one who has lived in Japan New Year brings cheery recollections. Courteous and kind as the people are at all times, at this joyous season their hospitality knows no bounds, and the very air is vibrant with jollity. Old friends who have not met for years remember one another, the streets and village roads are crowded with eager visitors, and "O tanomi moshimasu" resounds all day from every doorstep.

In the spirit of the Japanese New Year I wish to lay my visiting card on the threshold of the Japanese American News and to wish for it and all its readers the full fruitition of their fondest hopes. Removal from San Francisco to Los Angeles has by no means diminished my interest in the cause represented by the News or its readers. Since coming to Los Angeles last April I have met no friends whose greeting cheered me more or whose quality seemed higher than that group of graduates from Japanese American homes that gathered round the festive board of the City Club at commencement time. Nor have I anywhere felt more deeply stirred by eloquence than when a spokesman of this group delivered the valedictory address for his class at the Hollywood High School. As I said in public on that occasion, all fear of friction between our two peoples vanishes in the warmth of such sincere and intelligent patriotism as inspired that address and is diffused among "the new Americans" of California.

To them and to all their friends, a happy New Year!

THREADED BEADS

AUTUMN

Windless, yet fall the poplar leaves,
Ay, tis autumn.
I see the ominous crow
Perched high on the tree!
Would my mother were here—

° ° °

RESTLESSNESS

Restless,
I stole out from my gloomy room;
Restless still,
And I bemoan my doom
By the river where, in darkness lotus bloom,
Now unseen.

° ° °

EXPECTATION

All is against me!
Sullen, under a tree I roamed,
Treading its leaves fallen;
Ah, a drop!
Is it dew,
That happy morn foretells?

° ° °

SORROW

Nonchalant!
Hide your face, cold moon,
And let me in darkness alone.

° ° °

DREAMER

Lotus-eaters I saw,
Dreaming dreams with their drowsy eyes.
I yearned—
Lo, a lotus in my hand!
I casted it away—
Easy is the downward path, you say?
Ah, but scorn not my tears.

TWO MASTER-BUILDERS AND TWO GREAT BOOKS

Toyohiko Kagawa, Japan's Eminent Reformer, Is One of the Great Figures of the World; Arima San's Prison on the Outskirts of Tokyo Is a University of Human Architecture

By Dr. Kenneth J. Saunders

One of the great figures of the world to-day is Toyohiko Kagawa, who has been well called the St. Francis of the slums. Novelist, reformer, pastor, and evangelist, he is also a great political figure in modern Japan. After graduating at Princeton he settled in a tiny house in the poorest slums of Kobe, and began that great task of what he calls "human architecture," which has enthroned him in the hearts of the poor, and brought the Government round from opposition to keen interest. Coming out from a great religious meeting in Tokyo, I accompanied him through the dense crowds, and it was like a royal procession as this frail little man clad in the corduroy of the working class, his eyes terribly inflamed with trichoma caught in the slums, and his voice hoarse with much speaking, was acclaimed alike by the poor and the rich. The Governor of Tokyo stepped forward to shake his hand, which is like that of little child, and though he has been in prison for defence of the strikers in a lock-out, he has, I believe, received messages of encouragement from the Imperial household. He is organizing trade-unions, helping to form a Labor Party, writing incessantly, preaching often eight times on a Sunday—doing everything in fact to break the eight hour rule! "It is not for me," says he, and when I have tried to lure him away for a period of rest and writing he has more than once turned to me with his disarming smile and the words "I cannot leave the firing line."

Kagawa Is an Optimist Who Faces Reality:

Those who want to know the story of his early struggles, and of his life in the slums should read his novel "Across the Death Line" or as it is called in America "Before the Dawn." Comment upon this change of title is superfluous. "The Americans," said T. R. Glover, "are the legitimate offspring of Polly Anna and Mr. Micawber." But Kagawa is an optimist who faces reality, and his book means what it says; that there are great masses in our industrial cities living beyond the death line. I visited some houses in Shinkawa where disease and squalor and filth abound, and his agitation has awakened the authorities of Kobe to replace these hovels by tenement houses, which will probably stand empty, as they do in Bombay and, elsewhere where benevolent paternalism is not informed by love and sympathy.

Here then is a young apostle of thirty-three, worn and broken like his Master by carrying the cross, yet filled like Him with serene and radiant belief in men because he knows God as the Great Reality. He sees in the poorest and most despised "children of God," and "brothers for whom Christ died," and in him Christianity in Japan is incarnate as a great power, not only for building men, but for making the destiny of a nation. He and the other young champions of idealism and pacifism are winning the fight against militarism and imperialism.

Arima San and his Prison:

Another great builder of men is Arima San, whose influence for the last thirty years has been felt chiefly among the "criminal" classes. Arima San is the governor of a vast prison which covers sixty acres of ground on the outskirts of Tokyo. Through the influence of Miss Caroline MacDonald, who is devoting her life to prisoners, I obtained permission to visit the prison. As I wrote in its Visitors' Book here is "a great University of human architecture." Some eleven hundred men, all with a sentence of ten years or more, are being fitted for useful citizenship. "I have never met a man who is incorrigible," says Arima San. When I asked him if he had always been kind and optimistic he said, "No. For ten years I was very severe and hard, but when I became a Christian I learned the power of sympathy to change men." "Does Buddhism help you?" I asked. "Yes; it helps to build men, but Christianity goes deeper." When the prisoners ask to be instructed in Christianity, Miss MacDonald goes to them, and when they ask for the Buddhist chaplain he is there to help. A graduate of the University of Tokyo, he asked to be allowed to live in the prison, and there he preaches a very Christian form of Buddhism which exppresses it self in the paradox "Even the righteous may enter Paradise." Of such men, surely the words of our Lord "I was in prison and ye visited me," are true. And of the prisoners there are men who are not far from the Kingdom of Heaven. When the great earthquake of 1923

Continued on page 30, column 7

CULTURES OF EAST AND WEST ARE RESERVES FROM WHICH SECOND-GENERATION DERIVES STRENGTH

Qualities Which Make Worthy Japanese Should Also Make Good Americans

PARENTS DESERVE GRATITUDE

First Generation Struggled Arduously To Give Us American Education

By Miya Sannomiya
(A Member of the Second-Generation)

Happy New Year! Isn't it nice to be able to greet everybody and still not have to write thousands of cards?

Here we are again with a nice new year facing us, and I am sure that most of us are making our annual New Year resolutions in our efforts to "turn over a new page." Talking about "turning over a new page" reminds me. Don't you often stop in the middle of an interesting novel you are reading and pause before turning over the next page? Then don't you mentally review what has happened so far, and then, driven by curriosity as to what is going to happen to the hero or heroine, don't you guiltily glance over the few last pages? Then, satisfied as to his or her fate, don't you read on eagerly? I do.

New Year reminds me of novel reading, for that time I always stop and take stock of the past and peer into the future. Unlike novel reading, however, I cannot cheat old Father Time and turn over the pages of the years to the last chapter. I must always satisfy myself by trying to picture what might happen. In the pictures of the past and the pictures of the future I build my resolutions.

Second Generation Constitutes One Living Personality:

Lately I have begun to build resolutions for more than just myself, for I am beginning to see myself as only an atom of a huge host of young people called the "Second Generation," all of them having the same type of back history, living under the same circumstances, and having the same hopes, fears, joys, oportunities, and problems. Whoever we are or wherever we are, we, the so-called "Second Generation" are one. We constitute one body, one living personality as unique and different as individuals may differ from one another. How I do wish that we could remember that as we make our New Year resolutions, for the thought will give us strength, hope, and inspiration.

If we constitute one body and have our own personality, why can't we look back over our past and look forward to our future as one life and make our resolutions as one? For the big things that count, I think we can. Let us try and see.

Looking back over the years, we are little tots again. Perhaps our surroundings are unbeautiful. Perhaps we are dirty and untended, for most of our parents are busy in a strange land struggling for the wherewithal to rear us. Let us remember their struggles.

Older Members Appreciate their Parents' Sacrifices:

Then we are in school. First grade, second, third, fourth pass by in quick succession. Other children have the advantage over us because their parents all speak English. But we must struggle along by ourselves as best we can. Sometimes we wish that our fathers and mothers spoke English, too, and understood American ways which we are rapidly learning. We enter high school. One by one our school friends drop out, but we keep on going, many of us even through college. Slowly we begin to realize that our parents, though they may not speak English nor be Americanized, think so much of us and our future that they are sacrificing every-

Continued on page 30, column 4